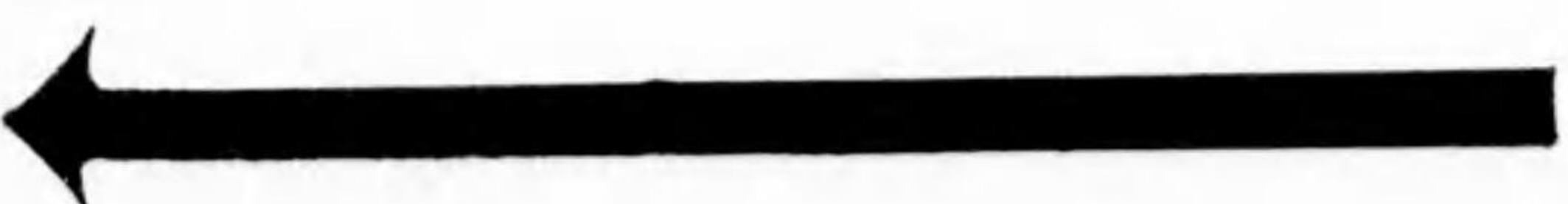
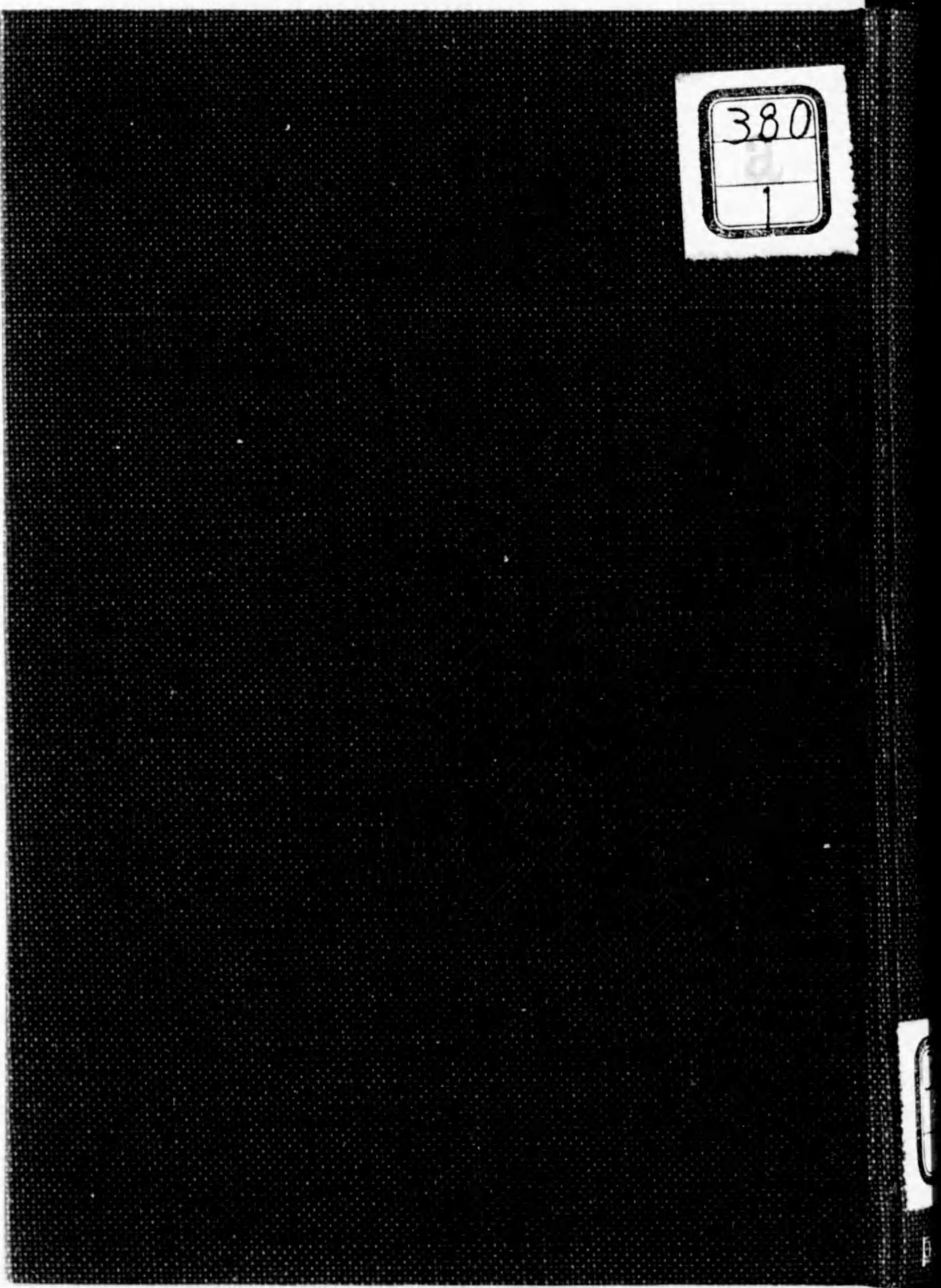


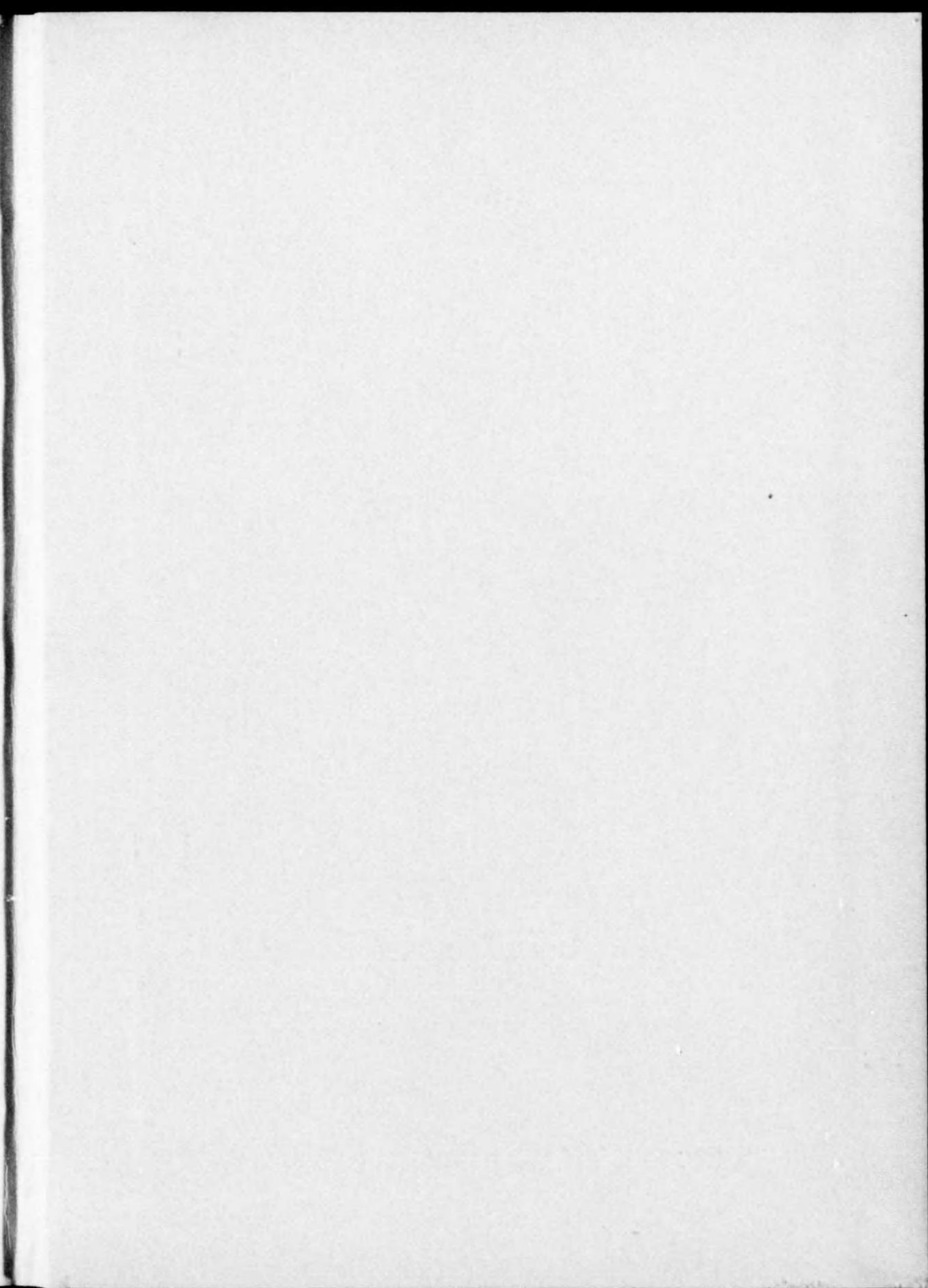
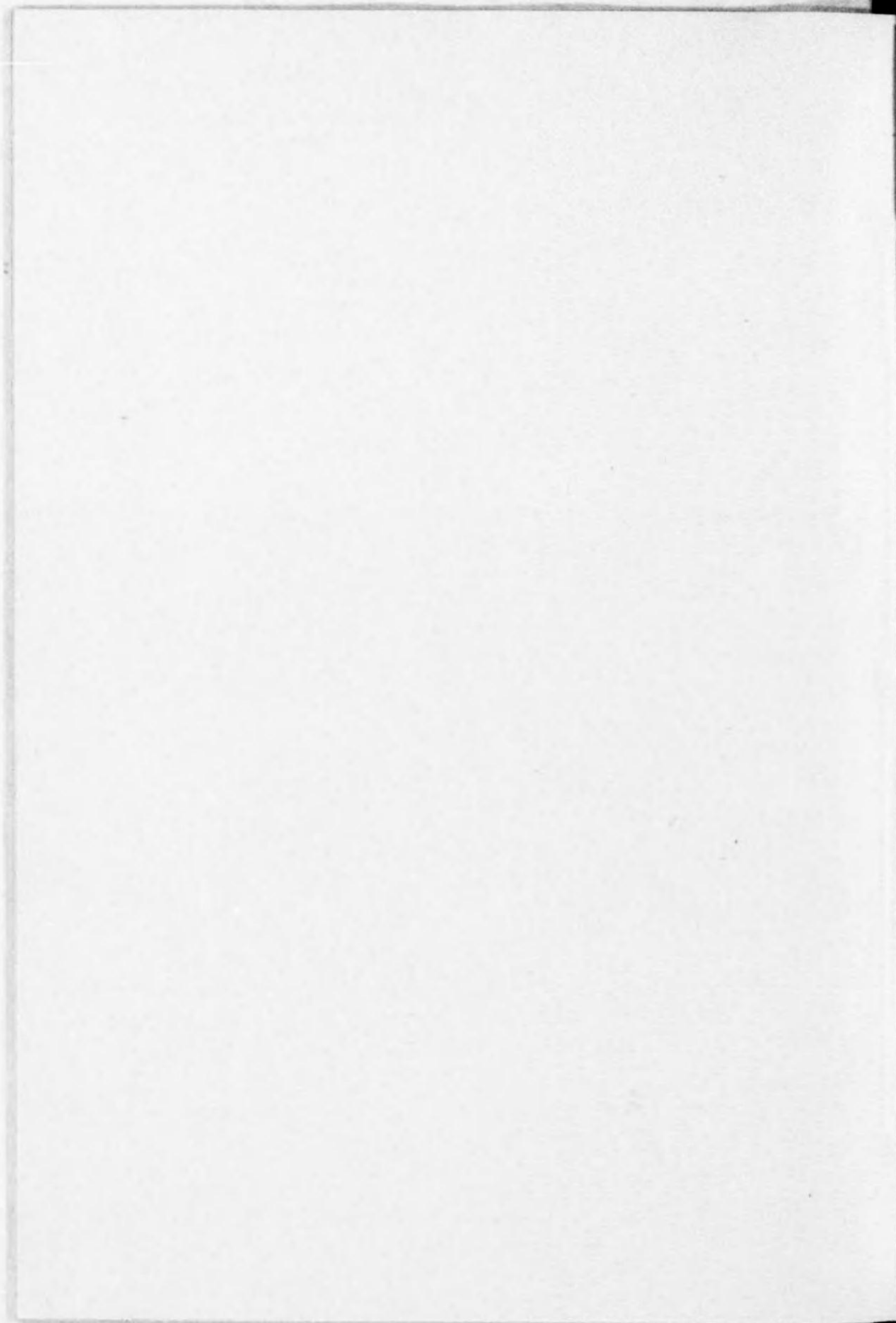
始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5

380





4T131

柳田國男先生著作集 第五册

木思石語

實業之日本社

143000

380 /



題簽

折

口



143960

自序

この小著の特徴の一つは、旅を愛する若い人たちを聴手として、傳説といふものゝ意義を説いて見ようとした點に在るだらう。十四五年以前、ちようども思石語を書き始めた頃までは、まだ斯ういふ問題に興味をもつ人が、都府のまゝ中にも澤山に居たのであつた。今になつて考へて見ると、この期間は永かつたとは言へない。旅が詩歌の題材となつたのは古く、紀行文學の世に出たのも新らしいことでは無いが、それが多數の追隨者を得たのは、明治中期の印刷文化の餘澤であつた。一方には交通が急に自由になつて、誰にでも漫遊が出来る時

自序

330



題
簽
折
口



143960

自序

この小著の特徴の一つは、旅を愛する若い人たちを聴手として、傳説といふものゝ意義を説いて見ようとした點に在るだらう。十四五年以前、ちようど木思石語を書き始めた頃までは、まだ斯ういふ問題に興味をもつ人が、都府のまんな中にも澤山に居たのであつた。今になつて考へて見ると、この期間は永かつたとは言へない。旅が詩歌の題材となつたのは古く、紀行文學の世に出たのも新らしいことでは無いが、それが多數の追隨者を得たのは、明治中期の印刷文化の餘澤であつた。一方には交通が急に自由になつて、誰にでも漫遊が出来る時

自序

代が来たのである。春の好い季節の試験休みは言ふに及ばず、夏の炎天の野でも山でも、無事に苦しんだ元氣な青年が、草鞋に脚絆といふやうな古風ないでたちで、どこと無くあるきまはるのを、元はよく見かけたものであつた。それが今日の所謂身神鍛錬の大群行動となるまでには、靴だゲートルだ背囊だ水筒だといふ類の、こまかな幾階段の改良を経て居るのだが、結局は觀て來る感じて來るといふやうな、寂しい素直な旅をする者が、いつと無く見られぬことになつたのである。旅行道の歴史に於て、この約五十年は記念すべきものであり、又相應に大きな効果を擧げて居る。人が生れ故郷の感覺から離れて、地方といふものをはつきりと學ぶのはこの機會であつた。祖先を共にする者の一致して持ち續けるものと、個々の境涯に應じて次々に發明して行くものとの、織り上げた綾模様は美しかつたが、さういふ中でも傳説は然るべき仔細があつて、特

に淡懷多感の旅人の胸を浪打たしめたのである。傳説といふ漢語が現在は全國の口言葉になつて居るのも、實は青年が先づ屢々之を口にしたからであつた。『旅と傳説』といふ雑誌が弘く世に迎へられて、十五年を重ねたのも其力であつたのみならず、私が斯ういふ問題に心を傾けて、情熱を以て之を人に説かうとしたのも、やはり又この時代の風潮に搖かされて、圖らずも旅で新たな知識を求めらうになつたからであつた。

しかも日本民俗學の諸項目の中で、傳説のやうに花やかで、同時に解釋の下しにくいものも稀である。誰でも片端は是に興味をもち、誰でも本當にわかつたといふ者は無い。始めてこの方面の學問に入り込むのも茲からであれば、最後に残る未開地も亦茲に在る。木思石語を書くよりも又十五年ほど前に、私は既に山島民譚集といふ大膽なる一著を公けにして居る。それから後も機會を得

る毎に、幾つかの文章を書き、一部分は是も本になつて居る。大體からいふと、多くの類例を集め並べて見るまでは困難なことではない。又それだけでも人の關心を惹くことは出来る。たゞ其背後には深い根があつて、非力ではたぐり寄せることが出来ないのである。よその民族には自分の知つて居る限り、是ほど傳説の豊富なるものも無く、又斯ういふ形態を以て保存せられて居るものも少ない。つまりはこの一つの問題のみは、搜しても外國に参考書が無いので、それで世上の學者と呼ばれる人々が、講究を斷念して居たのである。次の代の日本人の能力は要求せられ又試験せられ、更に大きな褒賞を以て待ち受けられて居る。私は不幸にしてまだ到達して居ないけれども、前途は遙々と見えて居るやうな氣がする。従つて斯ういふ微弱なる努力の一書でも、なほ後世に承認せられるであらうといふ、希望だけは失はないのである。(昭和十七年八月)

目次

自序

木思石語 一……………一

傳説と口碑……………一

口碑の分類……………四

歌と物語……………九

説話の元の形……………二二

説話から傳説へ……………二六

木思石語 二……………一九

旅と傳説……………一九

目次……………五

傳説と縁起……………三
 傳説の第二の特徴……………七
 傳説と神話……………三
 木思石語 三……………四
 傳説採集の興味……………四
 地方色と時代色……………四
 傳説結成と其材料……………五
 傳説消滅の痕……………六
 木思石語 四……………七
 傳説の分類……………七
 木や石の傳説……………七
 傳説と地名……………八

傳説と家……………八

名所と旅……………八

木思石語 五……………九

白米城の傳説……………九

白米城傳説の實例……………一八

再び白米城の傳説に就て……………一七

白米城傳説分布表……………一四七

傳説と習俗……………一六

矢立杉の由來……………一六

一鎌篋竹……………一三

惡鬼退治……………一六

遠矢の高名……………一七〇

矢は境の標……………一七

傳説の二系統……………一八〇

眠りの衆……………一八五

武藏野と水（放送）……………一九七

「うつぼ」と水の神……………二二三

玉手箱の古い思想……………二二三

鎮魂の祭……………二二六

御神體入換……………二三〇

猿の皮の鞆……………二三四

豊前と傳説（講演）……………二三九

旅と傳説について……………二七七

索引……………二八五



木思石語 一

傳説と口碑

今でもまだ傳説といふ言葉は、可なり色々の違つた意味に使はれて居る。出来ることなら一定して置く方が便利であるが、其爲には今少し御互ひに、話し合つて見る必要があると思ふ。強ひて主張するといふ程でも無いが、自分などは現在ごく狭い意味に此語を用ゐて居る。『旅と傳説』は之に比べると幾分か広く、殊に讀者寄稿家の心持などは、それ／＼異同があり、其範圍も必ずしも一定しては居ない様に見える。言ふにも及ばぬことだが、

是は傳説といふ漢字の字義に由つて其當否を決すべきものではない。支那には稍古くから斯んな熟語があつたといふのみで、今我々が日本で之を問題にしようなどは、誰だつて豫想したものは無く、又打合せをしてきめた者も無い。言はゞ耳馴れた有合せの漢語を、最も有效且つ便利に應用さへすればよかつたわけで、私たちがたゞ何と無く、傳説を「傳はつて居る説話」と解して居る人が多さうだから、それに従つたといふに過ぎない。ところが他方には又「傳へ説く」と動詞に使つて、何によらず親々の代から、口で與へ耳で受けて、次々に言ひ傳へたものは皆、傳説だと思つて居る者も尠なくは無いので、地方の人たちが口碑傳説と一口に謂ふのは大抵はさういふ考へに基づいて居るやうである。しかし自分に言はせるなら、既に口碑といふ佳い語がある以上、大體それに似たものに今一つ、餘分の名を付與するは贅澤であり、二つがもし全部と一部との相違なら、斯うして連稱することは當を得て居ない。口碑は其文字から何人も推測し得る如く、口を碑文の代用として後世に傳へんとする一切のもので、何と解釋しようとも、傳説は必ず其中に含まれる。斯

んな氣の利いた單語の發明は、正に支那人の特長と言つても宜しい。西洋の方にはちよつと是に似た適切又は手輕な名前が無い。我々が通例「傳承」と譯して居るトラチオンは、事によると永年の法律制度のやうな、或少數の権力者の考へで定めたもので、一しよくたにされる懸念がある故に、特に民間の「傳承」と斷らねばならぬ必要を認める。それでも尙「しきたり」と「言ひきたり」とを區別しようとする、御丁寧に「民間の口頭傳承」といはなければ通じないことになつて居る。然るに我々日本人の間だけでは、コウヒといふ二音で他には何の紛れも無く、口と耳とで承け繼いで居る昔のものゝ全體を、總稱することが出来るのである。だからなまじつか傳説といふが如き、範圍のまだ劃然としない言葉を附け添へて置かぬ方がよい。要するに口碑は口碑である。傳説と相對して二種でも無く、又びつたりと同じものでも無い。二つを引離して考へて見る必要が先づあるのである。

口碑の分類

口碑は口に屬し又耳で管理せられるから、之に對立するものは目で見るもの、即ち主として手足の働きの、今一つは直接に心で感ずるものと其間には判然とした堺がまだ立たぬ故に、普通には引くるめて之を風俗習慣等と謂つて居る。耳で聽かれる我々の昔風も、大抵は亦この二つのものと結合して、一つの印象となつて若い者を感化して居るので、今まではそんな差別も不可能の様にあつたが、試みに外國人などがやつて來て日本の平民の生活を知らうとする場合を想像して見ると、確かに彼等の知識は三段になつて入るのである。自信の強い英米人の如く一言も國語を知らずに旅行する者でも、神社に鳥居があり參詣人は手を合せて拜をするものだといふことぐらゐは分る。それから追々に言葉を覺えて來て、始めて盆踊が單なる手足の上下で無く、素朴な音樂の陰に何代と無く引續いて、人

を笑はせ又溜息をつかせるやうな、込入つた感情が歌はれて居た事を知るのである。しかも其以外に如何に思ひ遣りの深い彼等でも、到底理解し得ない無言の知覺、殊に信念といひ常識と名づけられて、同じ仲間の者ならば何の造作も無く、親から子に孫に相續して行くもので、異種の外人なるが爲に努力しても知り難い點が幾らでも残るのである。だから自分たちはこの三つの中に立つ口碑に對して、一方には體碑、他の一方には心碑とでも名づくべき一團の傳承を、區別して見ようとして居るのである。しかし此問題は直接に傳説とは關係が無いから、先づ是以上には述べぬことにして、爰には主として口碑、即ち人間の口を以て傳はるものゝ、内容を分類することゝしたい。簡單なものから順を追うて列擧すると、第一には言語は主要なる口碑である。何べん造り改めても舟はフネ笠はカサ、是があるが爲に昔の人のしたことが、解らぬとは言つても大よそは想像せられる。動詞や形容詞の影も留めぬ過去の生活でも、言葉がある以上は心持となつて我々の中に遺つて居る。小は草木蟲魚の只かりそめの交渉から、大は人間の社會を統一に導いた義理情愛禮儀作法

の一つ／＼に至るまで、名があつて始めてそれが基づく所遠く、隠れた因縁の容易に絶ち難いことを知るのである。殊に其中でも固有名詞と謂つて、ある人ある土地ある物に付與した言葉は、今でもそれ自身が歴史の本體であり、書物に事細かく書き記した場合は別として、耳で承け繼いで居る記憶の中で、最後まで保存せられるものは名前である。第二には之と關聯して、其言語の利用法、即ち單に語法を學んだといふだけでは、使ふことの出來ない特別の文句、長い間の親々の實驗を通つて、癖になるまでによく現はれる土地々々の物言ひである。其中にも之を始めた人の才能の働きによつて、聽く者に大なる興味を與へ、従つて眞似受賣の一段と盛んなるものがあつて、今日は之を諺(コトワザ)と稱して、別途に傳承せられて居る故に、これを口碑の第三種に算へることが出来る。コトワザは必ずしも格言教訓の狭い目的をもつものばかりとは限らない。主たる用法は會話を簡單にし、短かい語數で出来るだけ大きな効果を收めるに在つた。新らしいものには輕口秀句、相手を笑はせることを主とした例も多い。それからタトへと名づけて、奇警なる觀察批評を以

て、人を感心させようとするものもあれば、單に入用な智識を記憶し易い形にして、其利益を普及したのものもある。それを細かく分けて行くことは爰では六つかしいが、弘い意味からいふとコトワザの中に入れてよい物言ひで、通例は別に算へて居るものに謎言葉がある。これにも階段があつて前以て豫習をした人で無いと、どうしても悟れない程六つかしいものと、少しく智慮を廻らせば自然に解けるものとあるが、何れにしても本意を隠してゐるといふ點に、興味の中心を持つて來た點が他の諺とは違つて居る。しかも始めて聽く者に取つて新らしいといふのみで、實は親代々の古い形を追つて居る。其中でも問答の形式を取つたナゾといふものなどは、今はもう流行らぬが以前は人望ある智慧の競技であつた。問答では關東によく行はれた「一羽の鳥をニハトリとは是如何」の如き、乃至は全國に知られて居る「子買をく」の掛け合ひの如く、全然方式化してしまつたものがまだ幾らもあるが、何れも遊戯としての興味によつて、偶然に昔の生活の跡を、保存して居ることとは同じである。今此等のものを一括して第四種の口碑に算へるとすれば、次には又第五

として、トナヘゴトといふ一類を設けなければならぬ。唱へ言も外形は諺とよく似て、現に其中に編入せられて居るものも多いが、その最初の用途は著しく異なつて居た。此方は寧ろあまり多くの他人に知らせぬのを利とし、知つた者同士の仲間ならば格別、さうで無ければ口の内で唱へるのを例として居た。つまりは諺が人と人との交通であるに反して、これは神又は靈を相手としたコトワザであつた、呪文と謂つて居たものゝ系統に屬するからである。従つて是には謎よりも更に解しにくく、又間違つた言ひ方をして有難がられて居るものが多い。しかし近世の成人は段々に唱へ言を使ふまいとする傾向がある。さうして子供等ばかりが尙盛んに、烏や鳶や螢や蝸牛、其他の微細なる天然に對して、今もをかきな文句を繰返して居るのである。人によつては之をも童謡と一つに見て居るが、少なくとも根原に於ては丸で別なもので、一方は是でも話術の一種であつた。それが改まつた場合には所謂切り口上を用ゐ、特に其調子を花やかにしたのと、小兒は趣意を知らずにとゞ外形を眞似て居た爲に、段々に呪文の性質を失つて、歌と同じく自分たちの仲間だけで、

楽しみ興ずる様になつてしまつたのである。螢に「來い來い」と謂つて螢が來なくとも、何とも思はぬ様になつたのである。

歌と物語

口碑の一番重要な部分として、人が夙くから注意して居たのは歌であつた。是を自分は第六種に算へる。歌も最初には眼にも見えぬ靈界の聽き手の感動を、豫期して居た點は唱へ言と同じであつたが、此方は人間の中の幼少で無い者までが、其様式の面白さに引付けられてしまつて、いつの間にか之を信仰以外の、自分たちばかりの娛樂に供するやうになつて居る。詳しい事情は私には説明が六つかしいが、察するに呪文といふ方は幾分か相手を安く見て、出来るものならば欺きもし、すかしもしようといふ智略がまじつて居たに反して、祭の歌は單純なる禮讚渴仰の聲であつたが故に、傍で聽いて居る同輩の情を動か

すことが強く、言はゞ神靈よりも先に、之を悦ばしく忘れ難きものに、感ずるやうになつたものかと思ふ。そこで何かの折には知らず知らず、之を口ずさむ者が多くなり、音楽は次第に成長して來ると共に、之を試みる場合が段々と繁くなつたのである。尤も田植とか木遣り地突きといふ類の特殊の作業、又は祝宴酒盛などの會合は、今日我々が想像する以上、歌の入用なる時れの儀式であつた。本來の趣旨は概してもう忘れて居るが、斯ういふ際に歌が無くては濟まぬといふ心持だけは、續いて日本には傳はつて居たのである。そればかりで無く、人が唱へ言に對して稍冷淡になつた後まで、歌だけは始終大切に之を守り育てようとした理由が、まだ他にもあるかと思はれる。歌には最初から明らかに二通りの種類があつた。一つは短かくて簡單で所謂餘韻を主としたものと、今一つは長い文句を丁寧に積重ねて、委曲を盡さゞれば止まぬものと、誰が見ても目的は同じとは考へられぬものが並び行はれて居た。それを叙情詩と名づけて、正しいかどうかは疑はれるが、恐らく一方は人の爲に神に訴へるものであつたが故に、洞察を豫測して寧ろ絮説を省き、他方

は神様に代つて常人に説示する爲に、斯くの如く精叙して其記憶に便にしたもので、即ち後世の言葉で歴史教育と謂つたものゝ起りは、昔は之を信仰の行事の中に、包容させて居たのでは無いかと思ふ。是はいま自分等の「傳説」と名づけて居るものとも、深い關係があることだから今少し詳しく考へて見たいが、個人の言語を利用するのに、言ふと聽くと二通りの道がある様に、一つの群又は部落が歌を聽く時にも、前からちやんと知つて居る事と、それは今まで知らなかつたといふものと、題材はおのづから二種に區別せられ、之に對する態度又は興味の中心といふものが、全然に別でなければならなかつたのである。然るに日本では以前その二つの歌が、常に同じ折のみに歌はれて居た名残で、今でもまだ其堺をはつきりと立て得ない人が多いが、氣をつけて見ると發達の跡はほゞ二流れになつて居て、存外に混同をして居ない。例へば國々の盆踊の歌などでも、ごく簡單な何度でも繰返される短歌と、俗にクドキと稱する長篇の語り物とがあるのみで、其中程に位するものは一つも無く、クドキは年を追うて長くなり新らしくなりつゝある。即ち「うたふ」と

「かたる」とは元々異なるもので、單に壯重なる句法の外形が、一部分だけ似て居たのと、歌をうたふ日に歌をうたふ人たちが、言はゞ其機會を利用して、必ず後の世に傳へなければならぬ物語をかたつた爲に、いつも二種の詞曲は一括して考へられるやうになつたのかも知れない。

説話の元の形

果して私の想像の如しとすれば、等しく口碑と謂ふものゝ中でも、第一種に擧げた日々の言語から、第五の唱へ言までが「傳説」で無いことは勿論、第六番目の歌と名づくるものゝ中でもその古くから有る大切な半分は、やはり亦傳説の外なのであつた。佛蘭西の學者などには此方を小歌(ジャンソネット)、他の長々しい語り物を歌(ジャンソン)と謂つて居る人もあるが、さうすると歌が如何にして始まつたかと考へる場合にも都合が悪く、

又説話と物語との關係聯絡を説明する爲にも不便である。自分等の今日少しも疑つて居ない一事は、書物が普通の教育に利用せられたのは、至つて日が淺く、其以前は大部分見やう見真似、即ち觀察と傍聴とに由つて自ら學んだものだが、さういふ中にも是だけは是非とも、改まつて教へ覚えさせて置かなくてはならぬと、父兄先輩の考へて居る事柄があり、それは主として歴史と修身とであつたが、何れも所謂口頭傳承の方法を採用するの他はなかつた。この場合にも昔からの仕來りがあつて、第一には此教育を施す時期を擇び、單に青少年男女の閑で遊んで居る時といふのみで無く、祭とか葬の前夜とか、或は冬の夜長の特に豫定せられた時刻とか、最も彼等の感情の純化して且つ鋭敏になつて居る際を待つて居た。それから第二には用語と叙述の順序を整頓して、たゞ面白く興があるといふのみで無く、最も印象深く且つ記憶し易く、他日更に次の代に引繼ぎ易い形體を具へることを努めた。尤もそれは教科書を三號活字で組むといふやうな、意識しての事業で無かつたことは無論だが、馬琴の小説の七五調などを見てもわかる通り、獨り朗讀する者の呼

吸の都合といふだけで無く、同時にそれがこの國民の久しい昔から、物を受入れ理解して行く調子とも、自然に折合ひ又一致して居たのである。だからもし句を切つて節を設け、稍平生と異なつた速度を以て讀み上げること、乃至は珍らしく又耳に快い語音を選抜してそれを綴つて文を成すことが歌ならば、古來の日本の民間説話は、曾ては悉く歌であつた時代がある。それが所謂小唄の如く、たゞ音楽を以て生命としたものと反して、人が其内容のみに一段と強い興味を持ち、文句は忘れたけれども斯ういふ内容の話があつたと、形と本質との二つを引離して、承け傳へることが出来るやうになつて、爰に始めて今日の「話」が出来たのである。古い國語を搜して見ても、ハナシといふ名詞は元は無かつた、咄とか噺とかいふ和製の漢字はいつ頃からのものか一寸確かめにくい、兎に角に昔の書物の中には無い字であり、一方では又話といふ字の和訓も、以前はカタルもしくはモノイフであつた。人が今日のやうに早口で長い時間、物を言ひつゞける技術は實は新らしい發達であつた。田舎には今なほ會話は簡短を悦び、聽く人を疲らせるやうな口達者は、オン

ヤベリと名づけて忌み嫌ふ風が残つて居る。即ち大切な問題で謹聽を必要とするものには、改まつた切口上を用ゐ、さういふよそ行きの言葉を使ふときは、忽ちあたりの人が眞顔になつて、ウソにも出鱈目にも動かされ易い弊害の生じたのも其結果であつた。ところが信仰や境遇の變化につれて、自然に歌ずきと話好きとの二派に別れ、形に倦む者は殊に熱心に、新しい世間の話を貪り集め、末にはとても其全部を、律語にして語ることも出来なくしてしまつた。さうして爰に始めて説話と名づけられる口碑の一部門を、獨立せしむることになつたのである。人は或は昔話といふ語によつて、昔も「話」があつたことを想像するか知らぬが、これはたゞ昔語りを話にした後のことで、しかも重きを形式に置かなくなつたといふことはあるが、それでも古いものほど、尙少しづつは曾て明瞭なる句切りを以て、如何にも悠揚とかたつて居た痕跡を留めて居る。さうして單なる外側の條件から判別するならば、今日我々の仲間などで傳説と謂つて居るものは、その昔風の約束の最も少ないもの、最も自由に話の形式を更へて行くことの出来るもので、従つて時代に適應して

始終新らしく、いつも歴史の隣まで来て居ることの可能なる説話であつた。或は特にこの二種の口碑即ち歌謡と説話との中間に、更に一つの歌物語ともいふべき部門を、立てる方が便利では無いかとさへ思ふ。

説話から傳説へ

しかし兎に角に現在のところでは、まだ何人もさういふ分類をしては居ない。歌謡は歌謡であつて其中に古くからの歌物語を含み、説話は是と對立して、ハナシの形を以て出来るだけ多くの物語を、保存しようとする仕事と解せられ、傳説は即ち其説話の一隅を占めて、歴史とは截然たる區劃を立てられるものとなつて居る。それが果して實際に適合した分類であるかどうかは、是から尙進んで澤山の傳説を集め、細かく比較して見た上でないと決し兼ねるやうに、近頃になつて私も考へ始めた。しかし今日でも大抵まちがひの無い

二つの事實は、傳説の改造が少しづつ、目に立たぬ程度で我々の時代にも行はれて居るといふこと、傳説の壁一重隣は我々が歴史と名づけて、國家公權の力を以てしてゞも、必ず學ばせようとして居るものだといふことであつて、それから推論して傳説は他の種の口碑よりも、一層急いで採集して置く必要があり、又出来るだけ確實に且つ広く、傳説とは何であるかを知つて置かなければならぬといふことになる。謎や諺や歌謡の類は、單に消えるか残つて居るかの二つに一つだが、此方は十年二十年の短い間にも、もはや前に聽いたものとはまるで變つた話が、ちやんと入れ代つて出来て居り、それが少なくとも外形に於ては、前より後の方がずつと精密に、且つ尤もらしくなつて居るのである。さうして何かといふと御隣の歴史の言ひ傳へと、手を組んであるかうとする故に、用心をしなければならぬのである。しかもたゞそれだけの厄介な誤解の種ならば、成るべく相手にせぬ様に遠ざけて居ればよいわけだが、傳説の大きく又新らしくなつて行く現象には、まだ究められてない人間社會の法則があるのみならず、今ある傳説の中からで無いと見出すことの

出来ない昔からの大切な言ひ傳へが、是から漸く整理せられなければならぬのである。旅人の多くはそんな面倒な仕事にまで、無論參與すべき義理は無いのだが、ほんの氣紛れの切れ／＼の採集でも、それがどれだけまでの學問上の手柄になるのかを、知つて居ることは愉快な事である。自分はもし能ふべくんば、日本の山水が變化に富み、生物には珍しい種類が多く、よその國々の人から羨まれてもよい經驗を供すると同じく、門を出ればすぐ目に觸れる一本の樹、又一塊の石までが、それ／＼の傳説を持ち、それが際限も無く生きて生長をして居るやうな國は、世界弘しといへどもさう澤山は無いといふことを述べて、如何に我々の旅行が張合ひのあるものであるかを、もうすこし細かく説いて見ようと思つて居る。

(昭和三年八月、「旅と傳説」)

木思石語 二

旅と傳説

我々は日本人の保有する莫大な口碑の中で、特に「傳説」と稱する一種類ばかりが、何故に斯く旅人の心を動かし、その結果は或は誤つて、傳説即ち口碑のすべてでもあるかの如く、解する者をさへ生じたのであるか自分は此疑問に答ふべく、三つほどの理由を擧げることが出来る。心ある旅人がもし其の理由を咀嚼してくれられるならば、單に採集の興味に之に由つて更に加はるのみでは無い。行く／＼は其協力に基づいて、恰かも今日の植

物學や昆蟲學が、確固たる一派の學問となつたと同じやうに、新らしい社會知識の一系統を、打立てることも不可能では無いのである。

私のいふ三つの理由は、同時に又傳説の三つの特徴といふことが出来る。其一つは傳説の形式といふか、或は寧ろ無形式といつた方が正しい。即ち傳説には定まつた順序、話し方が無いのみならず、之を語るべき人にも時にも、一切の制限といふものが無いことである。近世の民間説話は、一般に古くからの條件を無視して、何でも構はずに面白ければよいとして居る様だが、それでも早面白いといふ要求の爲に、或程度までその内容を整頓しなければならぬ。其中でも童話といふものは、聴衆が氣の置けぬ連中だから、一向そんなことは無頓着でよいやうなものだが、それがやはり一定の型に囚はれ、小兒が聽いて居て「そんなのはだめだ」と、排斥するものが意外に多い。其上に古くからの話し方が、まだ少しばかり残つて居る。例へば「昔々先づある處に」とか、土地によつては「有つたてんがのに」とかいふ一句が無いと、幼ない聴手の目は御話を聽く時の眼にはならぬ。話の終

りにもつい此頃までは、「それで市が榮えた」といふ類の一句が、是非とも取つて附けられることにきまつて居た。話は又長過ぎても短か過ぎてもいかぬ。さうして中程には必ず印象の深い會話の語があり、それから少しあとには心を動かすべき興味の頂點があり、終りには彼等の小さな常識でさうあつて然るべきだといふ解決が來なくてはならぬ。童話以外の昔話といふものなどは、之に比べると遙かに奔放突兀たるものがあつて、所謂世間話の一小部分を改造しても、之を一つ話とすることは出来るやうだが、やはり童話と同じく笑ふならうんとをかしく、恐ろしいなら身の毛の立つ様な、中心といふべきものを用意しなくてはならぬ。其上に時と場合があつて、冬なり夜分なりであることを要するのみでない。人が集まつたからとて最初から昔話をする者も無く、又話し手にも制限があつて、若い者から年寄に向つて、そんな話をして聽かさうとしてはならぬ。定義を示せと言はれてもまごつくが、誰が聽いても是は昔話と認める話は、存外に限られて居るものである。落語などはやはり民間の説話であるが、其形式が煩はしく融通がきかず、上手は兎に角、下手が

之をやると、屢々ちつとして聴くことが苦痛になる。其上に場處も人も、之を聴こうとする気分にも条件があつて、それを具へなければたゞの物眞似になつてしまふのである。

傳説も通例は説話の一種として算へられるが、上に列擧した澤山の条件の、一つをすらすら具へずとも依然として傳説である。例へば長さでいふならば極端に短かく、ほんの斷片のやうなことを藪から棒に、早朝に路傍で小學校の兒童が、言つて聴かせてくれても我々は耳を傾ける。どんな平凡なしかも不完全な話でも、それが爲に傳説で無くなる氣遣ひは無く、或は面白くも何とも無いと言つて居るものにも意味があつたり、相手の與へようとする印象以外のものを、それから收穫して悦ぶやうな場合もある。定まつた形式が無いから追加も自由であるのみならず、之を語る人の用語にも制限が無いので、自由に標準語に譯して旅人にも解し得られる。それから話し手には多辯とか知つたか振りとか、色々の素質があつて自然に適不適は生ずるが、それは資格といふ程のもので無いから、尋ねたら宿屋の女中でも、驛で働く人たちでも何程かの答はする。のみならず偶然に通るかゝつて、人の問答から傍聴することも出来る。つまりは一番自然に近い採集が、望み得られるといふことが特徴なのである。

傳説と縁起

縁起と傳説とは同じ物であるやうに、西洋の學者には説いて居る人もあるらしいが、少なくとも話し手の範圍に於て、可なり著しい差別が認められる。文章に書き印刷にしたやうな、社寺の縁起は問題の外であるが、たとへば金閣寺銀閣寺等の小僧といふが如き、案内役の説明でも目的は別にある。さうして其御寺で飯を食ふ者で無ければ、言はないことを言ひ又言ふことを言はない。それが所謂千篇一律であるものと、臨時に説明したものたるを問はず、縁起は必ず「我佛を尊し」として居る。門前の茶屋の亭主、熱心なる信徒の受賣をする場合にも、縁起はまだ傳説にはなり得ない。しかも傳説の一番不愉快なる癖、

即ちこぢつけと押賣りとは、却つて此方に於て甚だしく感ぜられるのである。

尤もこの二つの者の相違は階段の差であつて、其堺目に行けば領分は決してはつきりして居ない。縁起にも麻布の善福寺の杖銀杏などの如く、遠近の人が悉く之を傳へ知り、寺の僧は必ずしも強ひて主張しないのに、世間では面白がつて之を評判にする者がある。禪宗の和尚などの寺の由緒に對する態度は、大抵は此類であつた。それが奇妙に傳説の成長流布に力にあつたことは、却つて並々のホラ吹きに勝つて居た。自身は悟りきつてそんな事はあらうとも思はぬのに人が「ださうですね」ときくと、にこ／＼と笑つて居る。さういふ事でもあらうかなどと答へる。さうすると縁起は舊い衣裳を脱いで、追々に傳説の部に入つて行くのである。之と同時に他の一方には、社や寺とはもう何等の關係も無くて、しかも或限られたる土地の者ばかりが、飛んだ熱心さで主張する傳説がある。是などは寧ろ村の縁起、部落もしくは自稱門閥家の縁起といふ方が當つて居るかも知れない。近い隣に競争者のある故跡、さうで無くとも一步此境外へ出て來ると、それを打消すやうな人の

多い様な場合に、却つて旅客の袖を引張つて、聽かさずには歸すまいとする傳説が行はれて居る。しかしながら、それとても亦一つの事實である。傳説の支持者が多いか乏しいかは、さう容易には調べられるもので無い。今は停車場の驛長を始めとして、一人も故障を唱へる者が無からうとも、以前からさうであつたと断定する方法はない。要するに縁起の既に管理者を失つたものが、傳説だと思つて居れば大なる過ちは無いわけである。

縁起と縁を引かない土地々々の傳説の方が、自由で又興味の多い事は判り切つた話である。しかしその爲に少しでも縁起臭いものを差別し排斥しなければならぬ必要は毛頭も無い。問題は單に古いものと新しいものを見分けて、出来るものならば原の形に近い方を、無くなる危険が多いから大切にするといふに止まるのである。宮寺の縁起には特にこの變遷の跡が見出し易い。これも傳説成長の跡を尋ねようとする人の、非常に有益なる參考であるが、普通に此方面には昔から學者が多く、文字の證跡が幾らも残つて居る。古い處では元亨釋書や高僧傳の類、稀には其以前の記録も中央部にはあるが、大抵は稍後れて

足利氏中期以後に、色々の縁起類が繪卷讀物として世に現れて、群書類從などには大分見えて居る。それが戰國の混亂を經過して、江戸時代の初頭には早改造を企てられ、其新舊を比べて見ても、多くの兩立し難いものが加はつて居る。それから以後世人は益々筆豆となり、再建や開帳の度毎に、縁起を整頓するのも信心の一事業と考へられた。前代の旅人たちは其間をあるき廻つて、幸ひにして忠實な紀行や見聞録を留めて居る。それを年代順に並べて見れば、至つて容易に縁起の改造せられた部分が知れるのみならず、それを要求した各時代の信心にも同情がわいて来る。さうして更に一步を進めて見ると、文字によつて社寺の言ひ傳へを書留めなかつた時代にも、同じ改造は必要であり且つ頗る容易であつたことは確かで、曾て金毘羅や善光寺の如く、まだ遠國の道者を當てにせず、地元の住民と信仰を共同にして居た頃には、縁傳二つのものゝ關係は、當然に今よりも遙かに親密であつたといふことも亦察せられる。

だから我々はその結論として、次のやうなことを言ふことが出来る。現在に於てこそ社

寺の縁起と、土地の傳説とは内容外形に可なりの差があるが、源頭に突き詰めて行けば一つであつた。傳説の多くは曾て使用せられた縁起の破片であり得るのみならず、今の縁起とてもその最も作爲を経ぬ部分には、まだ古來の傳説を保持して居る。それが如何様に所謂合理化されて來たかは、同じ經路をやゝ時おくれ、進まうとして居る傳説の研究に取つても、看過すべからざる大切な参考である。

傳説の第二の特徴

一夜半日の旅の客に取つても、なほ傳説が親愛なる思ひ出の種である理由は、それが簡單に且つ容易は、手帳に留められるといふだけでは無い。更に適切なる第二の理由としては、話に物があり記憶に具體的な足場のあることを擧げることが出来る。『旅と傳説』が寫眞を最も有力なる杖柱として、進出しようとして居るのを見てもわかる如く、傳説には土

地と關係せず、風物と結合せず浮遊するものは殆ど一つも無い。否之を他の色々の説話と區別する爲には、寧ろ一つの地に根を下し、動かし移すことの出来ぬ點を、目標としようとする人さへあるのである。例を引くにも及ばぬか知れぬが、たとへば松の名所を巡つて播州の海岸を旅した者があるとす。歸つて來て其話を試みようとする場合に、先づ頭に浮ぶのは相生松はこんな姿、手枕松はこんな形といふやうに、同じ松ですら一つく、混合せずに思ひ出すことが出来る。それが偶然に個々の傳説の、差別の目安となるだけでも便利であるが、元々傳説はさういふ目に著き記憶し易い外形があればこそ出來たので、殊に樹や石の珍しい姿は、殆ど其發生の唯一つの根據と言つてもよかつた。だから何心無く路を歩んで居る旅人でも、容易に珍しい木や石を見付けて、傳説に行き當ることが望み得られるのである。

殊に面白いのは、傳説は往々にして路傍に出て居る。新道は明治になつて幾らとも無く開鑿せられたにも拘らず、二里三里と田圃路を折れ曲つて、やつと到達するやうな傳説地

はめつたに無い。それは人が親切に其脇まで路を付け、交通往來をよくしてくれたのみでは無く、不便な地にあるものは遠慮して早く消え、茶店や橋の袂に近いものばかりが、益益人望を博する結果であつて、之を見ても傳説の盛衰が存外に烈しく、且つ彼等は埋没を免れんがために、絶えず忘れな草の如く聲高く叫ぶものなることが窺はれる。汽車の各驛の案内板を見ても、名所と名乗るものゝ半分は是である。中には丁寧な傳説ありと書いたものもある。それが旅人の注意に上らなかつたら、先づはよく／＼運の悪い、時世に向かない言ひ傳へを守つて居るものであるといつてよいのである。

此點は他の一切の口碑に超越して、獨り傳説のみが郡村の地誌の類に、幅を利かして居る原因である。それと同時に唯數ばかり多く、斯ういふ類のものを集積して置くことが、土地の昔の生活の研究と何の交渉も無く、強ひて交渉をあらせようとするれば、心にも無いちぢつけを敢てしなければならぬ所以でもある。其ちぢつけの最も粗製なものは、之を其儘歴史として受入れさせようとする企てである。例へば義經の腰掛石、金賣吉次の塚處の

類が、もしも此兩人の通路であつたことを意味するならば、彼等は到底奥州平泉に行着かずして、もう其一生を終つてしまはねばならぬ、と言つてもよい位に其數が各地に多い。斯んな場合の説明として屢々聽くところは、いや彼方のは何かの間違ひだらう、もしくは眞似て殊更にそんなものを、作り設けたものであらうと言ふのであるが、しかも自分の方の立證方法としては、現に立派に石があり塚があるのだから疑ひは無いといふ。この二つの論法は兩立しない。最初から「さうだ」と言ひたい人より他の者には「さうだ」と言ひ得ない理屈である。それといふのが傳説と歴史との、一番肝要なる差別の點、即ち一方は遺跡がたゞ一つしか有り得ぬに對して、此方は寧ろ有力なるもの程、數多く出来るものだといふことを忘れて居るからである。どうして此様に多く一種の傳説が成長するかを、考へて見なかつた過失である。

歴史は其事件の時日を過ぎてしまへば、もう新たに現はれる道は無いのみならず、歳月と共に追々光の薄くなることを免れぬものだが、傳説に在つては却つて後になる程づゝ、

話が詳しくも又尤もらしくもなる。少しあやふやな、もしくは理屈に合はぬといふ部分は、削られるばかりか他のものと入れ替へられて居る。さうして昔から斯う言つて居るとばかりで、果して其通りを傳へて居たか否かを、調査させたことは無いのである。どういふわけではほど違つた二つのものが、相隣して混同されようとして居るのか。私たちには其事情が殊に興味深く、又傳説といふものを研究したくなる原因でもあるのだが、世間では今は寧ろさう聞いて聊か失望する人があるらしいのである。ところが旅客は斯ういふ問題に對して、屢々最も公平なる批判者であつた。即ち一方の割據的もしくは排外的になり勝ちなのに對して、是は比較と類推とに由つて、容易に其意味を理解し又經驗を重ねて、知識の眞價を明らかにし得るからである。傳説蒐集の興味が、單なる寫眞やスケッチの數の増加に比べられぬのは、言はゞこの分類と整頓との樂みである。今まで格別に注意した人も無かつたが、傳説には通例不動の地點目的物が伴ふ以上に、十の八九まではそれに名があつて、其名稱も亦各地共通のものが多い。近い都邑ならば模倣標竊の疑ひも懸けられるが、

百里二百里を隔て、九州にも奥羽にも、同じ名の塚や淵、それから至つてよく似た説明の保存せられて居る例が多く、時によつては話はもう絶えて、地名ばかりがちゃんとして残つて居る處もある。澤山旅行をした人は幾らでも其實例を知り、どうして此様に互ひに似て居るかを、不審がらずには居られない。これが又何よりも有意義なる我々の旅の魅力であつた。

傳説と神話

傳説の第三の特徴として、特に旅人の心を引き易い理由は、既にほゞ前段の中に述べたから再び詳しく説く必要は無くなつてしまつた。それは何かといふと傳説は信ぜられて居ることである。語る者が屢々之を歴史と混同する位である故に、常に安心して人の間に答ふるは勿論、もし他に競争者でもあるか、又は書物などにそれと兩立せぬことが出て居る

と、寧ろ聽くことを欲せざる人の袖を促へても、説いて聽かせずには居られぬといふ程度に、熱心になるといふことである。だから漫遊とも名づくべき旅行を一度すると、よほど冷淡な者でも可なりな耳學問をして來ることになる。旅と傳説とは親密ならざるを得ぬ所以である。

此序を以て述べるのが適當か否かは知らぬが、日本の傳説の中で一番始末の悪いのは所謂平家谷、平家の落武者の住み著いたといふ村の口碑である。それも唯小松某もしくは維盛の子孫といふだけならよいが、村に氏神の社があれば安徳天皇を奉祀し、古墳石塔の大きなものがあれば、幼帝此地に御隠れなされたと謂ふのみならず、時には畏多くも其御末の如く、自らも信じて居た家であつたことである。源平時代の舊記類を見ると、如何にも壇の浦の悲劇は傳聞を主とし、確實に御最後を認め得るものは無い。だから後日にもせよさういふ異説が公表せられたとすれば、容易にそれを打消すことも六つかしいか知れぬが、奈何せん近世百年内外の間に、さういふ主張をした土地が、九州四國にかけて十數ヶ所あ

り、單に平氏の殘黨だといふだけの者は、それに十數倍するものを私等でも聞いて居る。何れもどうだらうかと言ふと眞赤になつて、丸で至尊をないがしろにしたかの如き非難をする。明治の初年以來之を宮内省に申し立て、所謂御陵墓傳説地の標木を建てさせ、陸地測量部の地圖の上に其記入をさせたものでも、人は氣付かないが十箇所に近いのである。旅人の之に對して取るべき態度は、何にしても容易なもので無い。しかし我々は如何なる場合にも、當該地方人の如く、其の一つを正しきもの、他のすべてを贖物と、斷定してしまふことは敢てしない。それよりも何が故に僅かな年月を隔てて、近代俄かに同種類の主張が、斯うも數多く八方から、現はれるに至つたかを考へざるを得ぬのである。

其説明の一つとして先づ想像するのは、最近に於ける國史知識の普及又は民衆化である。琵琶で平家の物語を聴くといふ事が、山家片田舎では既に通常で無かつた上に、ほゞ國體の大義に通じて、如何に政戰黨争の成行きとはいひながらも、よもや其様な出來事が、貴人の御身の上にあつたらうとは思はれぬといふやうになつたのは、新らしい教育のよほど

行き互つた後でなくてはならぬ。即ち其以前の數百年間は、年代勘定でも固有名詞でも、一向に注意をせぬ人々が管理して居た言ひ傳へであつたのである。言はゞ傳説の成長し得る時節に入つて、何れも突如として成長した傳説であつたのである。しかも一二の明白に虚構せられたものを除いては、土地の人々は正直で且つ些しでも其言ひ傳へを疑つて居なかつた。如何なる方法を以てしても、之を恠しむ人と争はうとするだけの自信があつた。九州南部では、天皇は薩摩より外へは御出でましたが無かつたといふが、南の島々には島毎に平行盛、資盛などの遺跡があつて、歌は事蹟を説き、塚には遺靈を崇祀するのみならず、現に多くの舊姓は其後裔として、之に相當するだけの門地を保持して居る。作り事と見ることは到底不可能であるに拘らず、たま／＼其一つを承認することは、同時に他の一切の傳承を、不實と看做す結果になるのである。

東北北陸の山の中に入つても、やはり平家の落人として立派に公認せられて居る者が多く、彼等はたゞ割據沒交渉の一手段のみによつて、辛うじて家の誇りを保つて居る。我々

は學問の爲でなかつたなら、今暫らくは之をそつとして置きたいやうにも思ふが、どう解してよいかと尋ねられるならば答へざるを得ない。私の答は斯うである。君の村、君の家の言ひ傳へは確かに古い。事によると源平の合戦よりも更に古いかも知れぬ。少なくともずつと古い時代から、日本にはさういふ傳説があつた。さうして傳説は信すべきものである。たゞそれは元は單に最も貴とい御方、もしくは神に近い御方と其家來たちと言つて居たのを、後になつてそれならば養和のみかど、平家の一門より他には無いと、新たな日本歴史の知識によつて決定したのでは無いか。それより以上には此不思議は解き様が無いと言ふつもりである。

天皇の御遺跡といふものゝ、國々に傳はつて居る例は非常に多い。其中でも美濃の宇多天皇、三河の文武天皇、上總の弘文天皇の如き、到底正史の中からは半點も誠らしさを見出し得ないものが信ぜられて居る。甲斐や常陸の孝謙女帝の傳説は、確かに作り事の甚だしきものであるが、用明天皇の如きは御在位僅か二年、若くて御隠れなされたのに方々に

巡狩の口碑がある。私の見たところでは、此説にも昔としては宥恕すべき誤解の理由があつて、寧ろ是によつて後代の諸皇子の、御傳説地なるものゝ原由を類推し得るのである。

醇朴なる時代の日本語では皇子も神の子も一樣にミコであり、天王は又神の名として、久しい後まで普通に稱へられた。さうして平民は容易に今日の如く、貴き方々の忌名を口にする事を許されなかつたのである。もし平家谷の程度に自由なる註釋をなし得るとすれば、後年歴史の知識に由つて、之を日本武尊とし用明天皇とすることは、些しでも困難では無かつたのである。

しかも此言ひ傳へは牢く之を信する者の口から、神の祭の日の如き最も改まつた機會に、必ず之を信せんとする人々の耳へ、嚴肅に語り傳へられ、あらゆる方法を以て其忘失を防いだのである。我々の仲間では特にこの類の古風な口碑を、神話と名づけて後々の傳説と區別して居る。神話の傳説と異なる重要な點は、何れの説話にも見られない程の窮屈なる方式のあつたことである。之を語る人と機會とが限定せられ、切りに之を繰返すことを戒

められて居たことである。さうして一般の信仰を以て之を支持し、同時に又之に由つて信仰を支へしめたことである。神道に時代の變遷があつて、先づ中央部の方から此類の神話を必要としなくなつたが、夙に分れて孤立して住んだ田舎人は、若干の退化を経ながらも、よほど久しい間神話と信仰とを結合させて居たのである。西洋の諸國には昔希臘に行はれて居たやうな神話は、もう何れの地にも絶えてしまつた。たゞ其痕跡としか認められぬ神話が、今尙子供の話などの中に交つて居るので、學者は往々にさういふ神話式説話を、簡略の爲に神話と謂ふこともあるのである。

しかし神話式の民間説話が、もしも神話と謂ひ得べくば、神話から脱却して成長した傳説、例へば平家谷や御陵傳説の類も、やはり亦神話と謂つてよいわけだが、それでは得る所は紛亂以外の何物でも無い。私の考へて居る分類では、探したら今でもまだ純粹の神話が少しは残つて居るかも知れぬが、それは過去のものとして別に置き、其中から特に形式の面白味に心を引かれ、信仰が無くなつても尙以前の型を追はうとしたものが歌物語、次

には外形よりも主として内容の奇異と變化とに興味をもつて、それを面白く語らうとしたのが昔話とも呼ばるゝ民間説話、それから最後には語り方や事柄の興味よりも、特に叙述の眞實に利害を感じて、それだけは必ず記憶し且つ主張しようとしたものが傳説と、ざつと斯んな風に分裂して、現今の口碑を作り上げたものと思つて居る。だから日本の神代卷の如く、古く記録の存する場合は除いて、他の民間の今は絶えたる神話は、辛うじてこの三筋の路を辿つて、次々に本の姿を突止め、是と古來の慣習や所謂心碑の幽かなる證據とを照らし合せて、始めて固有信仰の實狀を窺ひ知ることが出来るわけである。其中でも傳説は殊に豊富であり、可なりの近世の紛亂はあるにしても、幸ひに其整理と比較とによつて、最初の動機も追々に判明するから、資料として一番に有效に、且つ又我々の心を學問の興味に誘ひ易い。國を愛するの道といふものは、さう世間の想像する如く、理屈ばつたものでは無いと思ふ。要するに知ることが最初の順序であり、是ほど又適切に我々をして前代を理解せしめる手段は他にはあるまい。旅行が本當の日本人を作り得るものとすれば、

それは山川草木の單なる形狀や色彩ばかりではないわけで、斯ういふ外國の人には何の意味も無いやうなたゞ切れんの傳説の中からでも、祖先の心の動きを感じるといふことが、特に力強い教訓であつた爲と見るの他は無いのである。(昭和三年九月、「旅と傳説」)

木思石語 三

傳説採集の興味

旅行者に取つては是が恐らくは最も重要な問題であらうが、今までは誰も根本的に此點を考へて見ようとした人が無かつた。勿論人によつて眼の著け所は一様であるまい。しかし學問の立場からいふならば、此興味は是非とも回數を重ねる程づゝ、次第に濃厚になつて行くものでなければならなかつたのである。それにも拘らず、世にはたゞ事柄の奇抜無類なることを喜び、自分一個の狭い見聞を誇つて、一旦他の地方にも同じ話があつたこと

を発見すると、直ぐにがっかりして興を醒ましてしまふ人も多い。此等は全く最初からの考へ様が悪いので、外形が是ほど歴史に近く、曾て其土地に現出した事實であるかの如く、人も認め自分も信じて居て、しかも本當はさうでなかつたといふ處に、傳説の不思議もあれば意義もあることを知らなかつた結果である。そこで何よりも先に言つて置かなければならぬことは、如何に傳説地の周圍に住む人が、斯んな珍らしい話は又と有るまいと思つて居るものでも、捜せば必ずどこかに同じ例があり、殊に日本では一つの傳説が、遠く離れた十箇所二十箇所に、それ／＼獨立して分布して居る場合が多いといふことである。是はつまり西洋の諸國に比べて、非常に傳説の量の豊富であることも原因であるが、それ以上に同胞國民の精神生活が一様で、且つ久しい間ちようど傳説の成育に適した共通の心理を持つて居たことが、一層著しい理由であつた。僅か形を變へて今日も其事情は續いて居る。即ち日本の旅人が特に傳説の研究に適して居る所以である。

一つのをかしたな實例を擧げるならば、私は今から十五年程前に、河童が馬を水中に引込

まうとして失敗し、もう再び悪戯をせぬといふ誓約をして宥してもらつたといふ話を集めて見たことがある。北は奥羽から南は九州の果にかけて、要點に於てほぼ一致した言ひ傳へが三十以上もあつて、どこでも皆他と比較をして見なかつた爲に、我村ばかりの實驗である様に思つて居た。何故にそんな奇怪がさう數多く傳はつて居るかは、出来るならば別に詳しく述べて見たいと思ふが、私は之を書物にして世の中へ出してしまつて後に、更にその倍よりも多い類例が現れて来て、今では寧ろ増補の煩はしさに堪へず、もう少し待つて居て發表すればよかつたと後悔して居る。しかも傳説が移し動かすべからざる遺跡を伴なうて居るにも拘らず、到底之を歴史と同視することの出来ぬことは、斯うして幾つかの類推を重ねて行くうちに、愈々明白になつて来るばかりであつた。

だから傳説の採集は他の多くの採集事業に同じく、或程度に達すると更に分類の興味を加へて来るわけである。自分等の見るところでは、村毎に三つ五つ、全國では何百何千と算へるかも知れぬ傳説でも、末には案外限られたる項目の下に系統を立て、其成長の順

路を究めることが出来るかと思ふ。他の方面では中々容易に口碑研究の完成を見ることが望まれぬが、傳説ばかりは大凡終點が想像し得られ、従つて之を中心として口碑の總體、もしくは民俗の全般に互つて見ようとする企ての、必ずしも無謀で無いことも認められるのである。但し此企てに對しては、心ある採集者の協力が甚だ必要で、もし幸ひにして之に若干の讀書を加味し得るならば、其成績の顯著なることは、蓋し案外なるものがあらうと思ふのである。

此點はもう心づいて居る人もあるか知らぬが、傳説採集の第二の興味としては、更に古今の共通といふことが擧げ得られる。大體からいふと傳説は土地によつて次々の變化があり、其變化を生じたのは主として時の力であるが、其中にも頻々として改まつて行く部分と、一向に變らうとしない部分とがある。それが我々などのちよつと想像し得ない事情からで、例へば河童の話に就ていふならば、「二度と再び害をしないといふ約束をさせた」といふ點が、最も強く記憶せられる。しかし此傳説などは、水中の靈物に對する我々の信仰

が改まつたのだから、全體としては話が新らしくなつて居り、其止に之を統一するやうな適切なる地物と名稱とが無かつたから、どうしても散漫になり易かつたが、稀にはまだ地名が保存せられ又は地形が不變であつた爲に、それに繋がれて古い口碑の變化せず居てくれたものがある。實例でいふと、糠塚(ヌカヅカ)と稱して、野中などに孤立した塚の如きがそれで、是は何れの府縣でも五つか七つかはきつとあるといふ位に數多いが、土地では大抵は昔一人のえらい長者があり、其家の飯米を搗いた粃穀が、棄て、此通りの塚になつたと傳説する。稻はつい近頃まで粃のまゝで貯藏せられ、入用に臨んで搗いて、其糲(アラヌカ)を塚の形に積んで置く習ひがあつた。それが大きくなっていつ迄も處分せられずにあつたといふことは、即ち祭とか大集會とか、過去の大事件の記念であつたに相違ない。しかも本物の塚や丘陵を以て、其糲の化して成つたものと見るには、必ず何人かの新たなる想像が働かなければならなかつた。さういふ想像が全國の數百箇處にわたつて、苟くも長者屋敷の跡と言へば大抵糠塚スクモ塚の言ひ傳へを伴なうて居るのが既に不思議で

あるのに、遠くは千二百年の過去に遡つて、奈良朝の時代に出来た播磨風土記の中にも、もう同じ話がやはり大昔にあつた出来事として、語り傳へられて居るのである。それは筆者の生れた土地から一里ほど南、神崎郡八千種(ヤチクサ)といふ村の邊で、今は其名を失つたが糠岡といふ一つの丘陵であつた。風土記の文を直譯して見ると、糠岡は伊和大神と天日槍命との二神、各軍を發して相戦ふの時に、大神の軍勢打寄つて稻を搗き、其糠聚つて丘を爲す。又一説には品太天皇の御世、参り渡り來たりし百濟人等、其俗に従ひ城を造りて居る。その籩て置ける梗が塚と爲るとも謂つたとある。即ち單に分量が多くて、焼き棄て撒き散らすことが出来ないから残つたといふ以上に、特に記念すべき糠の山であつた故に、化して土石となつて永遠に傳はるのだといふ思想が、上古以來久しく我々の祖先の中に傳はれて居たことを知るのに、是は一つのよい證據である。

地方色と時代色

右の糠塚傳説の數多い例の中で、古今南北を一貫してほとんど不變であつたものは、第一にはヌカと云ひ又はスクモと云ふ名稱であり、次にはそんなものが化して一つの岡となり塚となつたといふ通例で無い出来事である。傳説の保存と分布とを尋ねるには、この顯著なる共通を押して行くより他は無い。或は見る人によつては之を要素と名づけて、其點が同じいから一つの傳説だと言ふ我々の態度を、非難しようとする者が無いともいへぬが、もし斯ういふものを要素と認めず、例へば戦とか神様とか將軍とかいふ類の、どしどしと變化して行くものによつて分類して行かうとしたら、少なくとも後には傳説でなくなつてしまふだらう。是も實例によつて解説して見るならば、東京の郊外などに最も多い旗立松、旗洗池の類、主として八幡宮の靈驗を證明すべく、或は旗を木の上に建て、戦勝を祈念したら、これ／＼の奇瑞があつたと云ひ、又は自然に白旗が天より降つたと傳へて居るものである。それを甲社の由緒書には頼朝公奥州征伐の時と記し、乙の寺の縁起には八幡太郎殿凱旋の時にと述べてあり、多い中には日本武尊、さては太田道灌に托したもののさへある

のである。是をそれ／＼の武將の事績に附隨させて、賴朝が參詣したといふからには鎌倉時代からあつたのだといふ風に、解釋して居つたのが今までの歴史家であつた。

又千葉縣の九十九里濱に行つて見ると、かなり弘い區域に亙つて、矢指といふ地名、又矢指塚といふ傳説がある。義家又は賴朝が奥州から船で還つて、此邊の海岸に上陸し、土地の大きさを測量する爲に、路の一里に一本づつ箭を指して、九十九本に及んだと稱し、其百本目を納めたのが此社といふものが、香取神宮以外にもなほ所々にあつたらしい。しかも前九後三の戦役の海上凱旋は事實らしくないので、或村では既に之を賴朝公諸國巡視の際だと説いて居るが、其爲に別に史實に近くもなつては居ない。自分の考へでは金の短冊を鶴の脚に括り付けて、千羽放したなどといふ昔語も、恐らく之と關聯して居ると思ふが、兎に角九十九里の地名に由つて見ても、さう近い頃の發生で無いことは推測せられる。昔の神道には儀式上の神領とも名づくべきものがあつて、祭禮の日に先だつて其信仰の行はれて居る區域を點定し、柱や御幣や神木の杖を立て、祭をする習はしがあつた。紀州

熊野の九十九王子などは、今の王子權現が各地に祀られる以前、先づ畿内の海岸から始まつて、道中次々の攝社を巡拜し、其百番目を即ち本宮と見て居た時代もあつたらしく、古く名の聞えた幾つかの王子社が沿道に建つて居る。さういふ祭の折の玉串の事を、或は形狀によつて矢とも謂つて居たばかりに、儀式が衰へ記憶が稍薄れると、之を所謂弓矢の家の人に、托せんとする傳説が発生したので、本當はずつと古い起源を持つて居るかも知れなかつたのである。従つて假に所謂英雄傳説を狭く解して、甲村の賴朝と乙里の義家を、共に動かすべからずとして分類を試みる人があつたら、其結論の如何にとぼけたものになるかは、想像して見るにも及ばぬ位である。

勿論此中にも人と傳説と、殆ど不可分になつたかの如く、見えるものも少しはある。例へば東國に數多い弘法水弘法井戸、之に伴なふ所の石芋や喰はず芋の話、或は又良い婆と悪い婆の話の如きは、どこへ行つても僧空海の奇跡と信ぜられ、それだから彼の傳記にはさうも見えぬけれども、よく／＼氣まめな足の達者な大和尚であるといふ定評を得、四國

八十八ヶ所は固よりのこと、九州に渡つても御大師水とさへ謂へば、すべて此の大師の遺跡と解して怪まぬ様になつて居る。しかしそれがいつ頃からの變化かは考へて見る餘地がある。現に今日でも東北の一角は慈覺大師、攝州泉州の大部分は行基菩薩、其他格式ある大寺で、各々それを開山上人の功力にした例は多く、殊に今一步を進めて我々の謂ふ杖立傳説、即ち行脚の杖を地上に挿して、此邊がよからうといふと忽ち成長して、後に大木となつた話などは、其一部分は弘法大師、其他の半分以上の作者は他の人になつてゐる。越後の七不思議の一つたる鳥屋野(トヤノ)の逆さ竹の如きも、一向門徒ばかりは親鸞上人の杖と確信し、他宗の人々はやはり弘法大師だと思つて居る。

話が長くなるからもう澤山の證據は擧げないが、稍奇抜なものでは瘡藥師(カサヤクシ)の歌問答、或美人が「身より佛の名こそ惜けれ」といふ一首の歌を以て、祈願の効無きを怨すると、忽ち戸帳の中より御聲高く

村雨はたゞ一時のものぞかしそのみのかさをそこに脱ぎおけ

とあつて、瘡癒えて痕も無しといふ話の如きは、南は日向國の法華嶽寺から中央部一帯にかけて、和泉式部の逸話として傳へられて居るのに、伊豫と上州では土地の名が小野郷なる爲に、小野小町の事績と稱するのみならず、更に早くから叡山に於ては、さる美しき兒(チゴ)と謂ひ、又此話の發生地らしき三河の鳳來寺の峰の藥師に付ては、今は却つて一休和尚の頓作にかゝるものゝやうに、語る人が多くなつて居るのである。

それから今一つ、是は近年私が中央公論に書いたが、大男の山作りといふ最も有り得べからざる古い説話がやはり傳説に化して其遺跡を處々に存して居る。昔々途方も無い大男があつて、富士の山を背に負うて、もしくは某山を棒で兩荷に擔いでやつて來た。其時藤の綱が切れた又は枋が折れた。畚の目からこぼれ落ちたのが此塚だあの岡だと謂つて、今ではもう小兒の笑ひ話にしか通用せぬが、要點が各地共通であるのを見ると、何か冗談以上の元の理由があつたことだけはわかる。是などは流石に實在の人に托し得なかつたらうと思ふが、それでも紀州淡路から瀬戸内海の兩岸にかけては、之を武藏坊辨慶其人の大力

の證據とした例が多い。それを土地によつてはたゞ大人(オホヒト)と謂ひ、關東々海では大太法師、もしくは大多羅坊といふ固有名詞を付與し、肥前島原地方では味噌五郎、岡山縣などでは三穂太郎なども謂ふが、其他の多くの府縣ではもつと率直に、神とも鬼とも名づけて岩の上に其足跡、もしくは怒つて棒を投げたといふ類の遺跡が多い。辨慶や弘法大師には限らず、古今有名にして又人望ある史上の人物で、多くの傳説を占據した人は若干ある。九郎判官義經も其一人なれば、菅原道眞も亦それであつた。しかし瀬戸内海の島や浦なればこそ、天神の御足跡や腰掛石も考へられるし、或は又神功皇后の御由緒も説くことが出来るが、中部以東でそんなことを説かうとすれば、又一段の不條理を冒して、口碑の信用を傷けなければならぬ。それ故に大磯の虎の塚は四國中國まであつても、曾我兄弟の傳説は大井川利根川の對岸より外へは持つて行くことが出来ない。しかも穰塚の物語が、各地の長者の時代より古くから存在したと同様に、英雄の傳説は其一生の活動區域よりも、ずつと遠くの遠くの國まで、どし／＼と擴がつて行はれて居るのである。それを

出来るだけ歴史と調和させて見ようとしたところに、割據時代の弱點もあれば、今日の如き交通自由なる旅行者の、痛切に感得し得る興味もある。さうして書物の新しい読み方も其中に指示されて居るのである。

傳説結成と其材料

それ故に私が傳説採集の興味と言つたものは、實は傳説ばかりの興味では無かつた。寧ろ人生の見方、文化の味ひ方、或は旅といふものゝ本當の價值と言つても誇張でない。人は一生を費して如何なることを調査研究し、もしくは之を信じて人にまで説かうとして居たかといふことを、決して冷笑的では無く、外から又は上の方から見て居るといふ態度が無かつたならば、學問も宗教と同じやうに、定まつた型の中に動き、末世を衰微とし、異説を叛逆と認めなければならなくなるだらう。人は今日も誤る如く昔も誤りがちで、其誤りは

又往々にして全部を率ゐて居た。さうしてそれは殆ど當然ともいふべき理由があつた。其中でも傳説の如く容易に且つ明瞭に、其理由を發覺して尙之に同情し得るものは少ないのである。人が私の動機無く家を懐ひ、又郷土を愛し國を守つて、必ず眞實の最も尊ときものを、後に傳へて置かうとした場合ですら、なほ自然に陥らねばならぬ誤解があつたとすれば、其誤解も亦大切なる我々の歴史である。それを始めて學び知つて後の進歩の參考にしようといふことが、道樂好事の事業であるわけは無い。此點を篤と考へて見た人だけが、旅行を眞面目なる生活の一部だといふことが出来るので、其必要なことは少しでも地質の實例や博物の採集など、甲乙する所は無いわけである。

殊に我々に取つて意義の深いことは、この傳説の野外採集に於ても、やはり面白い發生的の觀察が出来ることである。少年の生物學が小鳥の卵、林の樹の實の芽生などから、其興味を導かれて行く如く、僅か注意する旅人等には、傳説生成のあらゆる階段が見られる。世の中が開け人が多くなると、野生々物の種類は減じて行くに反して、傳説はもと人

間の中に成長するものである故に、一段と變化が複雑に且つ急速になつて行く傾きがある。日本では近代生活の影響、殊に信仰と經濟組織の驚くべき錯綜につれて、新たに色々の動機の傳説の外貌を改めんとするものが増加し、一方には若干の分化を促すと共に、他の一方には又意外なる統一を誘致した。其上に更に大きな役目を演じたのは、歴史の知識の普及であつた。しかも人は我土地の傳説を、信すべからざるものとすることを欲しなかつた故に、屢々思ひ切つた改造を加へて、二つの調和すべからざるものを調和させようとしたのである。東北地方でいふならば、三代田村の歌物語が古くから行はれて居た結果、坂上將軍利仁といふ英雄が認められて居たが、利仁は正史によれば丸で年代が合はぬ故に、もつ傳説の上から殆ど影を斂めてしまつた。用明天皇潛幸の畏れ多い言ひ傳へは、全く聖徳太子の御誕生を、自分の土地での出來事と信じた人々の想像であつたが、それが到底有り得べからざることを知るに及んで、代つて新たに唱へられたのは日本武尊の戀物語であつた。さうかと思ふと上總地方などでは、蘇我の王子神の信仰に基いて、突如として弘文天

皇の行宮を説く者を生じ、其説は日を追つて詳密にして、或は古史の闕を補はんとするの姿がある。最近各地に主張せられる長慶天皇の遺跡なども、少なくともただ一つを除けば他は總て此類でなければならぬ。

しかも前章に平家谷に就ても述べた如く、全國を通じて傾向は略相似たりとすれば、傳説は寧ろ最初から、斯う變つて來るやうな性質を具へて居たのかも知れぬ。別の語を使へば古い形は必ずしも元の形で無く、それも幾度か新人の信じ易いやうに、改めて各時代色の彩色を受けたものと、想像してもよからうと思ふ。例へば聖德太子の御傳記と結合した山路(サンロ)の草刈る夜の笛の物語などは、少なくともその今一つ以前を尋ねて見ることが出来る。即ち貴き天つ神が人間の少女に掣入りをなされて、神の太子を此世に留めたまふといふ信仰が無かつたなら、如何に美しい歌が行はれて居ても、それが根を生じて傳説となることは六つかしかつたので、此點から考へると、今はまだ明かでないといふのみで、如何に變化した現在の地方の傳説の中にでも、まだ至つて大切なる上代の史料が、潜

んで遺つて居るといふことは疑ひ得ないのである。

しかし斯うした傳説の骨髓を爲す信仰を、根本に溯つて悉く傳説と名づけてよいか否かは、又別箇の問題である。自分等の持つて居る傳説の定義では、寧ろ總體の信仰はもう失つてしまつた人たちが、努めて其破片の中の信じ易い部分だけを、信じ又信ぜしめようとする説話に限るのだから、傳説の起源は勿論ずつと新らしく、或は個々の改造を以て、親子孫といふやうなそれ／＼別の傳説に算へてもよいのかも知れぬが、もしさうなると傳説を類別して、さういふ第二次のものと、始めて傳説として現はれた第一次のものに、分ける必要を生じ、それから更に後者を小別して、直接信仰から殘留した「種」のある傳説と、途中で新たに發生した信仰と關係の無いものにして見なければならぬやうにも感ずる。そんな面倒な談理は爰には用は無いと思ふが、この單なる擬似史實、自分等が名づけて無核傳説と謂ふものを、引離して置くといふことは研究の上の便宜である。

傳説は手輕にどし／＼と改造せられる如く、又近世に入つても決して其發生を停止して

居ない。爲にする所ある虚構偽作を外にしても、なほ我々の知らぬ間に新たに入つて来て、少なくとも土地の人の全部をして、信ぜしめて居るものが多いのである。現代人の智能は、單に系統立つた宗教のあらを捜す迄に進んで、却つて個々の不思議について没論理の指導を餘計に必要とするやうになつたので、其點は曾て神話が零落して、之に代つて傳説が盛んに現れた時の事情と、異なる所は無かつたのである。二十四所巡拜圖會などを讀んで見ると、あの一向専修を勧めた平民佛教の中でも、高祖上人の行徳だけに就ては、如何なる奇蹟靈性を説くことも許されて居た。法華宗でも亦題目の功德として、至つて古風なる幻覺をさへ信じようとして居たのである。結局多數の俗衆は不可解の空虚に堪へ得ず、何か形のあるものを胸に描いて、確かなよい代りの出来るまでは、兎も角も之に縋つて居らうとしたのであつて、人が忙しく又冷淡になつたといふことは、たゞ彼等の傳説の選擇が、甚だしく粗陋輕卒に傾くことを、意味するの他は無いのであつた。

従つて之を民族幼稚の兆候とする説には、自分たちは同意をすることが出来ぬ。京城大

學の朝鮮史の教授今西龍君は舊友であるが、曾て斯ういふ經驗を私に語つたことがある。三十餘年前、始めて慶州の故都を訪れて、迎日灣頭に海の潮の去來を眺めた時には、此地名が殊に深秘な響きを興へた。そこで迎日といふ語の由來を問ひ、もしや大昔の神功皇后御親征の、幽かなる口碑でも遺つて居ないかを知らうとした。多分はこの村老の輩に向つて、かの新羅の王波沙寐錦（ハサムキン）叩頭出でて降るの物語を、あらまはして聽かせたものであらう。しかし其結果は聊かも獲る所なくして還つて來た。然るにそれから何年とか隔て、再び同じ地に旅行して見ると、今度は案内者の中に自ら進んで、大昔この大海の彼岸から優れて猛き女性貴人が渡つて來て、新羅の國を攻め平らげたといふ傳説を、説き立てた者があつたさうである。是から導いた今西氏の結論では、朝鮮は今ちようど、傳説生成の時代に在ると言つてよいとのことであつたが、今考へるとそれが果して、舊日本には適用し得ない斷定であるかどうか、常陸の青柳村邊には神の泉の湧く森があつて、其土地をミカノハラと謂つた。三十年前の私の旅行の時には、百人一首に「わきて流るゝ

泉川」とあるのは爰だと稱し、それ故に此森をイツミキの森といふのだと、教へてくれた物知りもあつた。大田蜀山が笑つたやうに、芝居にミテノミヤを祭り、和歌浦にカタヲナミを珍重するやうでは、今に其邊の山にカクト谷、サナキ谷などいふ名所が出来るかも知れない。伊勢の阿漕では平次の塚、古市油屋のお紺貢むつ言の間、上州伊香保の不如歸の遺跡の如き、眞面目で無いのかも知れぬが、入用が無ければ出来もすまい。佐渡の小木の湊なども、古い多くの傳説を忘れて、今は頻りに尾崎紅葉を説くさうである。權三屋お糸はまだ達者に暮らして居るといふのに、早くも金色夜叉の原稿は、彼女の手に秘藏せられて居るだの、扇子に別れの發句を書いた峠の茶屋だのと、旅人を面白がらせるだけの話が現れて來た。何等の固有の信仰をも含まぬ斯ういふ話までがもし傳説なら、我々は正しく其大工場主であつた。しかもそれがたゞの雜草であつて、屢々採集者に無益の混亂を興ふるは事實だとしても、始めからそれ／＼の素性を知つてかゝる者だけには、其發芽繁茂の状態は、なほ觀察に値する大切な參考である。同じ植物の譬へを押進めて行くならば、

土地色々の地味地質や、周圍の溫度水分の如きもの、他に、必ず種子があり種子の生活力があつて、人の時く時かぬは之に比べると、實は小さな干涉に過ぎなかつたのである。

傳説消滅の痕

旅人の氣輕な興味から言へば、數や分布状態又は變化の色々のやうに、最初は必ずしも心を惹かぬかも知れぬが、少しノートが溜まつて來る頃になると、誰でも考へずに居られぬのは、この傳説の種子の出處であらう。日本では村に住む者の昔から持つて居た神の道、久しく彼等の生活法を指導した對自然觀が、是まで一向理解せられて居なかつたらしい故に、殊に我々はこの傳説の荒野良を、奥ゆかしく思ふのである。海を越えて入つて來た國民としては、不思議に土の問題ばかりに我々は熱中して居た。海の口碑の分量に於ては、永年大陸を漂泊した佛蘭西人等よりも遙かに劣つて居る。是は寧ろ故郷が海の小島であつ

た故に、珍らしい新地をもてはやしたのかも知れぬが、兎に角に日本に限り、又日本のみ
に特に成長變化したものが、どの種の傳説であつたかを知る爲に、蒐集と分類とを出来る
だけ古い方へ進めなければならぬ。ところが幸ひなことには傳説に限つて、温帯の草木の
如き一定した收穫の季節が無い。土地を隣して各階段の成長が見られるのみならず、更に
醸つては其衰亡枯稿の過程をさへ知ることが出来るのである。

是は傳説の大きな特徴で、もと／＼それが土地に根をさして、動かすに成長するもので
あつた御陰と思つて自分などは悦んで居る。大多數の前代傳説は、今や單に地名となつて
保存せられて居る。それが最初は地物の名であり、やがては又其傳説の稱呼であつたとも
言ひ得るのである。是も實例で言ふ方が早い、明治になつて多くの大木は倒れ、又無數
の古塚は平らげ開かれたが、傳説の名だけは其まゝになつて居る。壹岐の島でも幾らとも
無き鬼塚が、つい此頃になつて片端から消滅したといふ話を聞いたが、鬼塚といふが如き
特殊な地名がすぐ消える筈も無く、又偶然に附けられるわけも無い。恐らくは或時代、塚

の中に目に見えぬオニを祭り、次で其行事が絶え／＼になる頃から、塚に怖ろしい物が居
るといふ話が擴がつて、空想は自然に之を彩つたことであらう。しかも探して居ると他の
地方には、さういふ名の塚、さういふ傳説が少しづつ形をかへて、まだ偏卑な土地には殘
つて居る。それがどの邊まで分布して居るかを知らぬには、單に傳説の存否を問ふだけでは
足りない。町村の大字小字、或は鐵道の驛名でなりとも、其地名の痕跡が認められる限り
は、曾て一頃は同系の言ひ傳への及んで居たところと假定してよい。さうすると鬼塚は全
國の三分の二にも共通した信仰の、名殘であることが知れるのである。中國の田舎には大
昔火の雨が降つて、住民が遁げ隠れたといふ僅かな塚穴があつたが、多くは崩されて、し
かも地名で無い故に其傳説も消えた。ところが東京近くの埼玉縣各郡には、塚の名や小字
の名に火雨塚(ヒサメツカ)が多い。即ち想像を逞ましくすればノアの洪水の如く、世
界共通なる天譴神話の痕跡、少なくとも曾て此土地の者だけが特別の庇護を受けて、一般
の災害から生き残つたといふ傳説が、可なり弘く我々の中にも流布して居て後にそれが消

えたことが察せられるのである。

或は京良木(キョウラギ)、教來石(ケウライシ)の如きは、もと疑ひも無く清ら木・清ら石であつて、之を無数のたゞの木石と差別して、畏敬し祭り又まじなうた遺跡であることがわかり、それが路傍であり又國郡町村の境に存するを例とするを見ても、如何に我々の天然物信仰が、強く農耕土着の社會にまで傳はつて居たかは察せられるのだが、今は木は枯れ石は移されて傳説も區々に獨立し、もしくは半ば忘れ又誤られようとして居る。加賀の山中温泉、秋田の寺内を始め、多くの土地の名所になつて居るコホロギ橋、それから峠の端や溪川の崖などに、比丘尼や座頭や牛馬が轉んだと稱して、何々コロゲ何々コロボシといふ地名があるのも、比較をして見た上で無いと受取られぬ傳説ばかりが多いが、いくら盲人でもさうくは轉ばなかつたらうから、是も亦同じ清ら木又は石の傳説の、大改造乃至は忘却の痕跡である。

なほ橋の序に謂ふならば、江戸大阪長崎などの思案橋、何れも以前の遊所に近かつたさ

うで、行かうか行くまいかの思案をする處と解して恠まぬやうだが、そんな薄志弱行の遊冶郎が付けた名が、斯うした社會現象として弘く傳はるのは變だから、自分などは之を橋占の故跡と見て居る。細語(ササヤキ)の橋は多くは神の社に伴なひ、行人の何と無き言語に依り、心の疑問を判断した處であるが、其名から考へると恐らく神來つて耳にさゝやくべしと、信じた時代もあつたのである。次には例の多い姿見橋、面影橋、是も同じやうな幻しを見たといふ傳説の跡であらう。轟き橋は橋板を緩く繋いで、渡ると足音がするからと思つて居た人もあるが、トドロは本來足踏みの音だから、是も事によると願ひ事の爲に、橋の上に立つて或所作をすること、例へば今日の御百度を踏むやうな慣習があつたのかも知れぬ。兎に角に獨り名前が珍らしいばかりで無く、現在もまだ色々の傳説が、斯ういふ橋には附いて居るのを見ると、以前は何か信仰生活と交渉する所があつたのである。私は自身永い間の蒐集者である故に、まだ幾つでも斯ういふ問題を提出することが出来るが、そればかりでは勿論我々の傳説の如何なるものであつたかを説明するには足らぬ。

名稱は要するに蛇の脱殻の如きもので、それを陳列して見たところが、到底實物の美しい斑紋を知ることには出来ない。只幸ひなことには一方にはこんな痕跡の存すると共に、他の一方には類例のまだ生きて居るもの、もしくは少しばかり衰へて將に消えて行かうとして居るものが、諸地に分布して其變化の各過程を示してくれるので、それ等を系統立て、對照すれば、自然に發明する所が多いのである。普通に傳説の消えて無くなる順序は、先づ最初に牢く信じて且つ之を大切に思ひ、是非とも語つて人に聽かせようといふ者が無くなること。戰亂饑饉其他の大事件で、暫らく夜話をするやうな機會を失つて居るうちに、ほんの二人か三人の老翁老婆が死んでしまふと、もう残つた者は知つては居るが、わざわざ人に教へるだけの興味も持たず、其うちには改造が加はり又は新らしい傳説が流行して、いよ／＼元のもの御留守になるのである。故人の紀行などを見ると、路の傍に老樹があり塚がある。あたりの者に尋ねて見ても確かなる來由を知らなかつたとあるのがそれで、或は之を「由ありげなる處」とも記して居る。斯ういふ場合にも物があり名稱があると、

人は尙之を傳説の中に算へるが、烏帽子の形に似て居るから烏帽子岩、箱の如く四角だから箱石だといふ類は、實は大抵は忘却失念の粕の如きものである。野石の四角なのは少しも珍しからず、烏帽子は百人一首の歌人の像を見てもわかる如く、殆どどんな格好のものでもあるから、形容の語としては不向きである。是等は傳説の元の形、即ちそんな名を付與した動機が不明になつて、名ばかり殘留したからさうも説明したので、其證據には又他の地方で、現に今一段と實質的な傳説を持つ烏帽子岩、箱石の類がまだ幾つもあるのである。しかし右の如き間に合せの説明でも、名が保存せられなかつたら、曾て此地にも同じ系統の傳説があつたことを、知るべき機會は無いわけで、それが大字小字のたゞの地名だけに、辛うじて残るやうな場合に至つては、愈々傳説に名を付けて置いてくれた、故人の親切を感謝しなければならぬのである。

地名の根原に就ても話して見たいことはあるが、少し枝葉に互るから他の機會に割愛する。日本の地名は奇抜にして不可解だといふことを、地理の教師や旅行者はよく言ふが、

些しでもこの傳説が地名になつて行く經過を考へて見た人では無いのだから、判らぬのが寧ろ當然である。勿論他にも研究に値する原因があり、例へば北海道のアイヌ地名の如く、外形のみで解釋し得るものは寧ろ少ないが、少なくとも約四分の一は、行く／＼傳説の研究ならば、直ぐに意味を知るのみならず、又興味を感ずることも出来るやうになると思ふ。一方土地の歴史を學ぼうとする者にも、傳説から來た地名の趣旨を知ることが、大なる参考である。といふわけは一つ／＼の傳説には、大よそそれが盛んに流布した時代があるから、之に基づいて其土地が開け、人がそんな名を付與した時代を、ほゞ推定することも不可能で無いからである。

それから傳説の名稱それ自身にも、注意して見ると用語の時代色といふべきものがある。全部とは言はれぬが或物は之に由つて、其名前の行はれた始めだけは考へられる。大體からいふとごく古い頃の傳説は、やゝ込入つた叙述があつて、昔話の如くはつきりとした中心が無かつた。一方近世のものにも複合接續が多くなつて、殊に歴史との調和に急なりし

爲に、事績を主とし土地地物に對する注意が稍薄れ、新たに樹石塚池等に、名を命ずる風は衰へたかと思ふ。即ち其中間の或時代のみが、殊に説話を簡約にして、最も多くの尊信を外部の奇瑞、殊に所謂奇跡の存留に向けたのである。即ち傳説に名があること、其名が物語にも歌にも適した好き響きの古語であつたことは、最も我々に取つて興味があり、又研究の價値の多い中世の傳説の特徴と言つてよからうと思ふ。私の採集はそれ故に、主として名前のある傳説を目がけ、又其名前を標的として、之を分類して見ようとしたのであつた。

(昭和三年十月、「旅と傳説」)

木思石語 四

傳説の分類

此問題については、自分は大々最も平凡な、他の國でも屢々採用せられた一つの案を出して置くが、勿論是が極上といふわけでは無い。人によつてそれ／＼の趣味、各自の自己流を案出する餘地は幾らもある。しかし出来るならば旅人どうし、後日に話をして見ても頗る珍漢にならぬだけの、大體の一致は望ましいことである。それには今日の實狀に於ては、やはり先づ蒐集者の便宜を考へて、少しでも面倒な理窟を省き、自然に傳説の起原まで進

んで行かれるやうな分類方法を、採用して貰ふ必要があると思ふ。故高木敏雄君の日本傳説集などは、主として傳説のモチーフ、同じ一つの趣意を以て説明し得るものを、纏めて見ようとした様である。其方が確かに學問的で、末には何れさうなるべきではあるが、奈何せん現在はまだ採録せられた實例の数が乏しく、おまけに其大部分は簡単に動機を推量することが出来ない。それを強ひて起原に就て名目を分たうとすると、問題が孤立してしまつて比較も綜合も出来なくなる。さうでなければ英雄傳説とか天然傳説とかいふ風に、餘りに茫漠として分類を試みた甲斐が無くなる。傳説の中から英雄天然の二要素を除いたら、残る所はちつとばかりしか無いのである。

さうかと言つて同じ民族の、始終交通をして居る各地方の間を、或は武藏の傳説とか播磨の傳説とかいふやうに區別することは、單に採集家の手帳の都合ならば兎に角、之を分類法と名づけることは出来ないやうである。所謂地方色は、何れも必ず後代の變化にのみ認められるもので、傳説の本質又は發生状態とは關係が無い。寧ろそれがあつた爲にいよいよ

よ對照を必要とし且つ流傳の法則が推定せられるのである。民族が同じである限り、離れて住んで居ても永く重要な共通を持つて居ることが、傳説の特色である。中世以後割據によつて其事實を發見し得なかつたことは、傳説の衰微であり又歴史の紛雜でもあつた。それが再び整理せられて、次第に元の姿に立ち復る様になつたのが、自由なる今日の旅行の御蔭だとすれば、分類とは當然に縣境郡境を突切らなければならぬわけである。自分などの僅かな實驗によるも、土地々々の蒐集家は隣を知らず、又適當な標語を知らぬ爲に、銘々が非常にむだな骨折をして居る。一たび同種の傳説が同様の條件の下に、次から次へ發生し得るものだといふことさへ心づけば、後には名稱によつて型を定め、大部分の重複を筆記せずに覚えて居られるのに、いつ迄も丸寫しに苦勞して、却つて肝要なる變化の點を看過しようとしたのである。村誌や郡誌の正確なものを作らうといふ人々は、或は義理にも故老の話を省略することが出来ないか知らぬが、それを集めて研究すべしと唱へながら、なほ傳説叢書のやうに國分けの方法を採つたのは、少なくとも讀者に對して不親切な

ことであつた。

是に比べると傳説の時代別けといふことは、まだ幾分か意味があるやうである。明治以後には明治の特徴があつたやうに、聽く人説く者の社會環境の推移によつて、改造せらるべきものは全體に改められて居る。少なくとも百年五十年前の書物に書留められたものと、現在耳に觸れるものを一括してしまふ事は、比較の價値を損ずる處れがある。故に出来ることならば江戸期の傳説、十九世紀の傳説といふ風に大別して見たいのだが、實際に於てはごく古い例は幾らも残つて居らず、今ある記録は昔といつた所で、大部分は百年以内のものであり、一方現在の口碑にも古風を其まゝ、もしくはたゞ少しだけ變化させて、保存して居る地方も多いから、自分たちは強ひて年代の差別をやかましく言はぬことにして居る。しかし何れかといへば今後旅人の採集が進んで、直接にうぶな住民の口より聽取つたものだけを材料とし、一旦書物に載せられたものは、其時代以前に屬する傳説として、ほんの參考だけに之を利用する方がよいのである。差當り簡単な親しみ易い分類さへ立て

て置けば、やがてはさういふ風になることも遠くはあるまいと信ずる。

木や石の傳説

私等は「初は日本に於て、一番人望の多い傳説はどれか」といふことを考へ、其中でも殊に奇抜で、どうして人が之を信じ始めたかを、解するに苦しむやうなものに注意しようとした。それが少しづつ興味の加はるにつれて、追々と其範圍を擴げて行つて見ると、存外に早くもうおしまひに近づいたやうな感じがしたのである。勿論斯ういふ列擧法を以て、傳説の領分を究め得べき道理は無く、又今日僅かに存するものは、却つて以前大に行はれたものゝ名残かも知れぬが、大體に於て各種傳説の分布は非常に偏より、到底數の上から釣合ひを得た分類が出来ぬことだけは事實である。自分の考へでは、是は我邦ばかりの偶然で無く、元來傳説といふものが斯んな傾向を取つて、成長し又繁茂すべき性質を具へ

て居るので、假に初期に於ては遙かに普遍的に、宇宙と人生とのあらゆる接觸面に行渡つて居たにしても、其中には世の進みにつれて、早く消え又は移るものと、永く固守せられて元の形のまゝ、もてはやされるものがあつたのである。

そこで我々の分類法は、主として傳説の對象に由つて、就て語らるゝ目的物の、普通の順序に並べて見ようとするのであるが、其前に先づ動く傳説と、動かぬ傳説とに大別して置く必要があると見て居る。最初に説き始めた昔の人の心持では、日月風雲の如き天然の現象も、山川草木鳥獸蟲魚の類も、それ／＼一つの物であり傳承の題目であつて、其間には何の差別も立てなかつたのであらうが、一方は之を如何なる人の群に運んでも其まゝ通用し、一方は他の多くの部落の經驗の外なるが故に、元の場所につれて來て同じ様な見聞をさせた上でないと、同じ感動を期し難いものがある。古い例でいふと、日と月とが互ひに避くるに至つた由來は、曾ては天體に關する傳説であつたが、何人にも理解せられる代りには、特に此話を保有しなければならぬ者が無くなつた。之に反して富士と筑波の二つ

の山が、天の神様によつて褒貶せられたといふ物語は、其様式起源に於て頗る前者と近いにも拘らず、たゞ二つの靈山の間に住んで、朝夕に其姿を望む者ばかりが、興味を感じずべき問題であり、殊に筑波の方の麓に住む人に取つて、大切な言ひ傳へであつた故に、傳説として常陸風土記には採録せられて居る。山と山との争ひは、今でも諸國の傳説であるが、それを保存する者は何れか一方の山に寄つた方の住民で、例へば赤城と日光の山争ひ譚を、どうして日光の人のみが保存する任に當つたかといふ理由は大抵は亦話の内容によつて察せられる。即ち傳説には其性質から、特に限られたる人數によつて護衛せられるものと、水や野草と同じく広く一般に公開せられてよいものがあつたので、久しい年月の間にそれが次第に別々の道筋をとつて、成長することになつたのは致し方が無いのである。是と同じ事情で、動物や植物に關する傳説にも、自由に國內を周歴して、後にはどの地方のものでも無く、所謂「むかし／＼或處」の出來事として、稍亂暴に取扱はれて居るものが多い。例へば蕎麥の莖はなぜ赤いといふ話に、山姥の血が流れてとか、アマノジャク

が神様に斬られてとかいふ類は、日本國中の蕎麥が悉く紅い莖をして居る理由としては不完全であるから、元は必ず或村の山畑のみを見て居た人が、考へ出したことに相違ないが、外の土地に往つても蕎麥の根もとの色は皆同じだから、終には「その因縁にあやかつて」といふやうな説明を添へて、之を公衆の中へ差出すことゝなつて、一つの土地の産物では無くなつた。時鳥が昔誤つて弟を殺した兄であり、それを悔んで今でもホチヨカケタと啼きまはるなどといふ話も、單に外形から見れば、時鳥の傳説と謂つてよいやうなものだが、之を説き聽かせようとする人の態度、即ち兎に角に此様な言ひ傳へがあると云つて、信じられるならば信じたいと思ふ念慮は、もう話し手の方には無い。ところが同じ數多い生き物の中でも、例へば津輕の盆踊の歌の中に、

アゝ猿賀池のザッコは

皆みんなメッコだあ

みんなメッコでもねエヤ

一二三びきやメッコだア

と歌ふやうに、或池又は流れに棲む魚が片目であると謂ひ、佐渡の御蛇河内では順徳院天皇が蛇を御覽なされて、こんな島でもやつぱり蛇には二つ目があるかと仰せられてから、此谷に限つて片目の蛇が居るといふ如き、確かな證據は無いのに住民は今でも之を主張する。其他鳴かぬ蛙だの血を吸はぬ蛭だのといふのは、何れも或特殊のいはれによつて今でも七不思議など稱し、それだけは昔話といふ程の面白い話でなくとも、土地の人が永く記憶して居る以上は、傳説の中に算へるより他は無かつたのである。

面倒な理論を述べることは私の本意では無いが、是は要するに今と大昔と、物の觀方がちがつて居た結果で、我々の如く類と個體とを明瞭に區別して考へるやうになつては、以前の傳説にはもう傳説として存在し難いものが多からざるを得ぬのである。古人も木を見て林を見ずなどと謂つて居るが、今一段と單純なる人の頭には、木といふ概念すら無くて、たゞ一本々々の松なり櫻なりを認むるのみであつた。それを我々が家族や村の人に對する

と同様に、ちようど眼の前に現れた一個體を相手として、其屬性や經歷を知らうとしたのが傳説であつた。去來常無き空の鳥や、限りも無く繰返される自然の現象に對して、たまにたま付與したる傳説が、永く其誠らしさを保つことが出來ずに、次第に其様式の面白味を賞美する文藝に、なつて來たのは已むを得ない。之に反して一處に定着して入代りの無い物には、それ自身古い話を思ひ出させて又忘れさせぬ力があつた。其上に物が在るのは言ひ傳への正しい證據だといふ妙な論理は、存外俗間には有力であり、曾て一たび信じたものは、新たな理由の現れぬ限り、之を保存したいのも亦人情で、實は知らず識らずの間に時代の影響を受けつゝも、なほ大よそは普通りの姿を失はずに居られたのである。現今我々の傳説が土に根をさしたのも、殊に老樹巖石の如く、狭い地域の住民のみと交渉を持つものに限られるやうになつたのは、言はゞ消え易いものから消えて行つた結果で、全體を總括して比較をすれば、確かに前代の傳説とは同じ物で無いが、しかも残つて居る一つ一つに就て見れば、其實質も對社會の關係も、特に改まつたところは無いのである。

傳説と地名

我々の傳説は、斯ういふ意味に於て次第に風土誌の領域に入つて來たのである。現在の實狀では、まだ考へ深い旅人の方が、却つて世の所謂普通教育よりも、一層確かな仕事をして居るが、今後もし人文地理の研究が進むとすれば、なによりも先に人が、この大いなる天然とは如何なる條件を以て調和して來たか、何を頼みに我々の先祖が、或山脈の麓の野、もしくは或流れの淋しい岸に落ち著いて、家を構へ村を開くに至つたかを教へなければならぬ。而うして人の心持の内側を記録したものは、地名以外には残つて居るものが殆ど無く、其地名の中でも特に意味深きものは、大抵は昔の傳説と關係して居る。それも日本のやうにまだその大部分が生きて行はれて居る國で無かつたら、之に基づいて既に消滅した傳説までを類推し、こんな幽かな痕跡の中から、隠れたる平民生活の過去を見出すこ

とは出来なかつたので、此點については他の何れの國の旅人よりも、我々は最も豊かに恵まれて居ると思ふ。

地名起原に關する調査の、日本よりも進んで居る國は幾らもある。しかし調査をして見て楽しみが多いことにかけては、我々に及ぶものは少ないであらう。是は單なる御國びいきからさう見えるのでは無く、個々の民族には色々の癖と流儀があるうちに、日本人の如く敏活に又自由に、新らしい地名を付け且つ容易にそれに同意した國民も珍らしいのである。獨り地名には限らず、草木蟲魚の異名でも男女の綽名でも、少しく奇抜なものが出来ると直ぐに流行する傾きはあつたやうだが、殊に人間が早く増し土地が細かく利用せられた結果、地名の數量がどの國よりも多かつた爲に、一層手軽に他人の思ひ付きを採用したばかりで無く、人には成るべく土地の上に深い興味を持たうとする自然の願ひがあつて、久しい間何十番地といふやうな乾燥無味なる番號制を行ふことが出来なかつたのである。そこへ持つて来て我々の先祖は、非常に傳説が好きであつた。といふよりもそれに心を動

かされ易かつた。傳説を地名にして置けば、人が欣んで之を記憶し、又一致して之を使用しようとした。即ち地名としての目的は十分以上に之を達することを得たのであつた。但し何かの事變によつて傳説の方が却つて消えることがあり、名稱ばかりが器械的になほ残るが故に、地理學者の中には往々にして、日本の如く不可解の地名の多い國は無いなどと言つて、其研究を斷念した人もあつたが、不可解といふことは實は我々の學問に、まだ豊かなる獲物の残つて居ることを意味するのである。

傳説と家

話は少しばかり枝路へそれるが、日本人の苗字に何田といふ例の多いことは、西洋人までが既に心づいて居る。苗字は本來居住地の地名から出たもので、實際又今日でも、小字の名に何田が澤山あり、現に東京の市中でさへ神田櫻田永田町などの稱呼が残つて居り、

決して田舎ばかりの特色では無いのである。田は水を溜める爲に傾斜地では特に區劃が小さく、それが多くの家に分有せられるのが普通であつたから、僅かな一村の地名にも、四五十の何田が入用になつて来る。而うしてその中の取分け有名なものは、稍廣い地域にも適用せられ、たとへば柳田ならば「柳田」と呼ぶ田地のある一村をさう名づけ、それから名主と稱して其村を領した者の一門が、悉くその在所を名乗ることもなつたわけである。日本の田地は古くから百萬町歩もあつた、それを一反づつに切つても千萬の何田があつてよい。勿論村さへ違へば同じ地名を付けても構はぬが、それにしてもよほど種類が多くないと、差別の目的は達しられぬのであつた。日本人の命名法の巧者な事は、どうにか斯うにか番地制などを採用せずに、永い間各々の田の名を獨立させて來たのである。其中でも筆者等の苗字の如く、田の上に植物の名を冠したものの多いことは注意せられる。今日の尾張や越後の廣い耕地を見た人は、これは一種の想像上の符號で、あたかも今日の驅逐艦の名の如く、後から後から加へて來たものゝやうに思ふか知らぬが、それでは到底全

部記憶せられる見込は無い。故に昔は單に附近にある何か一種の木を、田の名を傳へる爲に大切に置いて置いたといふよりも、寧ろわざ／＼選定して伐り残し栽ゑ付けもしくは枝を挿した習慣があつたのでは無いか。是は今日もまだ行はれて居る信仰上の行事からも推察することは難くないのみならず、單にエゴが生えて居たから江古田と謂ひ、芹が多いから芹田といふ類の名稱以外に、杉田だの櫻田だのと、到底水田の畔には有りさうにも無い樹もあれば、其種類が又非常に限られて居て、松杉栗梅などゝいふ若干種が殊に多いのである。しかも其類の田の名が早く認められて、一村一郷の古い區域の名にもなつて居るのを見ると、由來はもう忘れたといふだけで、曾てはさう命名しなければならぬ至極重要な理由もあり得たので、全部とは言はれぬが斯ういふものゝ中にも、尙幾つかの傳説が潜んで居たことも疑ひが無いのである。

伐る爲に樹を栽ゑる今日の人の眼には、或は所謂烏の黒雲の如く、甚だたより無い記念物のやうに見えるであらうが、古人は必ず傳説ある樹木を伐り残したのみならず、なほ屢

屢計畫を以て、新たに後世の傳説を栽ゑようとしたのであつた。神社の神木に女夫木などと謂つて、左右一對の同種のものを見るのは、或はもと數多い林の中から、似合ひの二本を伐り残したのかも知れぬが、それが相接して齡のほゞ等しい場合などは、自然の状態としてはさう普通で有り得ない故に、之を相生と名づけて奇瑞と認めると共に、又時としては特にさういふ栽ゑ方をして、其繁茂によつて神意を卜したこともあつたらしい。連理木だの鳥居木だのといふものに至つては、之を自然に見出すことは愈々稀有である。恐らくは最初ある人の計畫に基づくか、さうで無ければ更により以上に珍重すべき不思議の發見があつたので、従つて斯ういふ事情の下に成長した樹木に永遠性を認めて、之を地名として後に残すことも不思議でない。名が残る物が存すれば傳説も通例は成長する。それが古くなると共に一層大切になることも、亦極めて自然な話である。私は以前東京郊外の村を散歩して、此地方の風景の一特徴たる丸太用材の杉林の片端に、しばしば後年の火の見梯子を作るべく、特に二本の杉苗を密接して栽ゑたのを見て、住民の遠大なる用意に驚いた

ことがある。かの二本松とか三本杉とかいふ地名の、村の境や山阪の曲り角の如き、常に土地の人々の話題に上るべき場處に存するのも、勿論其木があつたからには相違ないが、それを伐り残し又栽ゑつけた人の心持には、更に今一つ以前の計畫があり、永く地名と爲り又傳説の宿となることも、最初から彼等の期待する所であつたかと思はれる。

兎に角に我々は「名を後世に遺す」と謂つて、單に輪廓と目標とを留め、事蹟の細かな内容は次々の時代人の、最も好意ある想像に、一任し得る國民であつた。人が歴史よりも傳説を重んじ、寧ろ餘りに精密に確かなる記録の傳はつて居らぬ方面、例へば金時辨慶佐倉宗五郎の如き物語の中に、各自の好きな人物を描き出して樂しまうとした心持は、決して近世に始まつたものでは無かつた。地名や家名の往々にして耳に珍らしく、五人三人が集まつて雑話をする場合優に一夕の話柄の全部を占領することが出来るのも、私は偶然で無いと思つて居る。單に差別の爲ならば甲乙丙丁でも番號でも構はぬものを、特に我々の好奇心に訴へるやうな印象深き名稱を思ひ付いて、それを使ふことに我も人も一致したの

は、過去に忘るべからざる記念があると同時に、更に永遠の未來に向つて、何度と無くそれによつて所謂いはれ因縁故事來歴を語りかはして、空想の世界に遊ばせようといふ好意があつた爲で、此點から見れば竝木に松を栽ゑ清水のほとりに柳を栽ゑたのと同様に、寂しく單調なる此人世の行旅を、少しでも活き／＼とさせようとした昔の人の親切であつた。

名所と旅

但し我々の方にも選擇の自由が許されて居た故に、後世の社會事情或は各自の趣味に任せて必ずしも古人の設けて置いてくれた名どころを、其儘には利用しなかつた。折角相續したのも見棄てたり粗末に取扱つたり、又一方には別に自分たちで、新たに有名なものを作らうとしたこともあつた。殊に近頃の名所舊跡巡りなどは、何かは知らず人のよく行く場所だからといふだけで、最初に名の出來た時の事情などは、省みようとせぬ者が

多い。さうして諸國の數限りも無い傳説地などは、現にちやんとした名が有りながら、少しも今日の所謂「有名」ではないことになつてしまつた。是は全く分類とか比較とかいふことに、忙しい旅客が興味を持ち得なかつた結果であらうと思ふ。

地名や家名などのたゞ痕跡ばかりを留めて居るものから、其根本の傳説を詮議すること、馴れぬ人にはまだ六つかしいかも知れぬが、現に實物が存し話が残つて居るものならば、我々はたつた三つの簡単な問答を以て、いと容易に採集の目的を達することが出来る。餘り講釋が長かつたから、ちよつと御慰みに其方法を傳授すると、村には通例傳説の中心ともいふべきものがあつて、それは多くは氏神の社の附近である。鎮守と因縁のある舊家や別當寺、又共同の井戸なども遠くには離れて居ない。そこへ行つて見ると必ず何か目に附くもの、何か言はれがあらうと直覺し得る木とか石とかある。立留まつてちつとそれを見つめ、又出来るなら寫眞を取りもしくはスケッチをする。是が實は人寄せの手段なのである。さうして誰でもよいから一番近くに來た成人の一人に、次のやうな言葉をかけて

見る。

見事な木ですね（又は變つた石ですね）

斯ういはれて何とか受答へをする人なら、必ず話をしてくれる人である。そこで第二回は

此木（石・塚）には名がありますか

無いといふやうなら又方向をかへなければならぬが、大抵は笑ひながらも、子供の時から知つて居る名を答へる。

それは珍らしい名前だ。きつと何か「いはれ」があるでせう。

ざつと先づ斯んな風に續けて聞くと、新たにどう語らうかを案じて居る餘裕が無い。話があるならばほゞ有りのまゝに出て來るし、無いならば無いといふことが確かに知れる。さうして又此次に尋ねて行くべき方角なども、之によつて暗示せられるのである。

ところが八かましい人たちの調査方法なるものは、何か傳説があるならば報告せよと來る。さうすると第一に傳説とは何かといふ問題が起り、次には何と書かうどう報告しよう

の評定が面倒で、結局は名文家を煩はすやうになり、村に今あるものとは遠ざかつてしまふのである。もしさうしてしまつてから定義を論じ、範圍を明かにしても役には立たぬ。殊に書いたものが出來ると無筆の人はあべこべに之に縛られて、却つて自分の信じて居たものを棄てることさへある。つまりは名所といふものゝ本來の意味を、汲んで見ようとせぬ結果である。

そこで自分の意見では、傳説には稀には移動し易くして今尙移動せず、限られたる地域に古代の眞實として、たゞ空に信用せられて居る話もあるかも知らぬが、數量に於てそれは甚だ僅かであり、又以前人知れず、どこか他の土地から流れて來たのかも知れぬ故に、それは准傳説とでも名づけて假に別にして置き、主としては土地に定著し地物と不可分に傳はつて居るもののみを、出來るだけ多く採集しようとする。それから又餘りに有名であるが爲に、却つて之を指示すべき適切な名目の無い場合も稀にはあらうが、通例は地形地物に就て語られる限りは、大抵その目的物が傳説の要旨を名に負うて居る。それが名木で

あり又名石であるのみで、未だ字の名や村の名に應用せられない間は、多くは傳説其もの忘却と共に、名稱も消えてしまふものであるから、名がある以上は其陰につましく隠れて、まだ傳説も生きてゐるものと見てよいので、即ち單なる木石の呼び名を書留めるところが、やがては又傳説の採集ともなるわけである。

此頃自分の作り始めた傳説目録では、専ら分量の多少を標準として第一に木の傳説、その中には腰掛松・矢立杉・杖銀杏・逆さ榎などの小別がある。第二には石の傳説、是にも腰掛石・休石を始めとして或は傾城石・比丘尼石等、細かく別けて十何種ほどの、可なり弘く分布した昔語りが算へられる。第三に塚の傳説、或は數は木や石などよりも多さうだが、今はまだ歴史との混淆が甚だしく、之を整頓するに餘分の手が掛かる。それから次に來るのは我々が總括して水部傳説と謂ふもの、池と淵とが最も多く、瀧とか温泉とかにもそれ／＼傳説を代表した珍らしい色々の名があつて、それは悉く水の神の信仰の名残のやうである。是と對立して陸上に道の神の威力を記念するものが、坂や辻、橋や渡し場など

の傳説となつて残つて居る。其次には森と野の一隅、古い屋敷址などにそれ／＼特色ある口碑があり、中にも長者の故跡といふものからは、特に我々の祖先の美しい想像力を認むべき、優秀なる文藝が伸び榮えて居る。それから最後には現在の人間生活を圍繞して、別に又一團の社寺堂閣舊家名門の傳説などが成長して居るのであるが、それを一々列挙することはまだ私の力の能くする所では無い。しかし何れにせよ日本の傳説には、今尙適切な名稱を持つものが多い以上は、其品目によつて分類して行くことは、必ずしも衆人の一致の望み難いやうな面倒な事業では無いのである。

(昭和三年十一月、「旅と傳説」)

木思石語 五

白米城の傳説

傳説とはどんなものか、傳説採集の興味は何れの點に在るかを、實例を以て語らうとするに、やはりこの白米城（ハクマイジャウ）の話などが、適切な色々の條件を具へて居る。以前「郷土研究」に此問題が提出せられた時には、全國の白米城は、まだ八縣十二箇處しか知られて居なかつた。土地の人々は、何れもそれを記録に逸したる歴史と信じて居り、又さう認めても少しも差支が無かつた故に、それを或平和な時代に、誰かゞ歌物語の形を

以て運搬し、やがて似合はしき一地に定著したものと、言ひ切るだけの勇氣のある人も無く、ましてや如何にして斯んな話ばかりが、弘く國中を浮遊して居たかなどいふことを考へて見ようとする者は無かつたのである。つまりは最近まで約三百年ほどの間、我々日本人と傳説との關係は、殆ど少しの變化も受けずに、昔のまゝで續いて居たのである。斯うして古い傳承の續いて居る國は他にはさう多くない。この研究の今後日本に盛んになるべき、一つの理由はこゝに在るかと思ふ。私は其後十何年、飽きずにこの一つの傳説の分布に注意して居た。さうして目に觸れる限りは手帖の端に書き留て置いたのであるが、今算へて見ると更に二十近くの實例が加はり、區域は更に七縣にひろがつて、大よそ全國の端々にも及んで居る。まだ幾つかの記憶を脱したのものもあるかと思はれ、更に他の旅客によつて追加せられるものも多いことゝ信するが、それが一つでも直ぐに役に立つやうに、大體今あるものによつて説明を試み、出来ることならば其原因の探求に向つて、一足の歩みを進めて見ようと思ふ。

府縣の實例はその確かなる出處と共に、末の方に列擧して置くを便利と考へるが、其前にごくかいつまんで傳説の大略を述べると、第一に傳説の所在地は或岡又は山の上である。曾てそこには城が有つたと傳へられ、當然に其城主の名が近世の郷土史家の頭には響いて来る。しかしこの固有名詞は、今日の聽衆が考へて居るほど、古くから固定不動のもので無かつたらしい。それよりも先に疑はしくなることは、そんな高い處に果して城があつたか否かといふことゝ、假令半月でも二十日でも、そこに籠城することが出来たかどうかといふことであるが、傳説は兎に角に籠城を以て始まつて居る。

元來非常に要害のよい城であつたが、一つの大なる缺點は水の手の不自由なことであつた。夜深く麓の澤に下つて、水を汲んで來なければならぬのが弱味であつたといふ。それは當り前のことで、元々水の無い山の上に取籠つたといふことが、斯ういふ傳説を發生せしめざるを得なかつたのである。土地の人々にはそこに水の無いことをよく知つて居る。

我々ならば「まさか彼處には城は無かつたらう」といふべきところだが、昔の人は「だから白米城の物語が有るのだ」といふ風に考へて、却つて話を珍らしがり又信じようとした。是が以前と今と人の心持、又周圍の社會事情の著しく異なつて居た點である。

傳説の二十餘箇處に共通した部分は、寄手が其城の水に乏しかるべきを察して、水の手を斷つて城兵を苦しめようとしたことである。さうすると此謀計を中止せしめる爲に、わざと遠くの方から見える處へ馬を引出して、白米を注ぎかけて馬の脚を洗ふ様子を見せ、水はまだ幾らでもあるといふことを装うて敵を欺いたといふのである。至つて簡単な智略のやうではあるが、斯んな出來事が二回も三回も、偶然に起らうとは思はれぬのみならず、白米が果して遠方から眺めて、水と見えるかどうか甚だ疑はしい、自分などは始めから想像上の奇談であらうと思つて居る。

しかしそれが爲に此傳説の興味は、些しだつても滅殺するものでない。假に事實の根據

を持たぬものだとしたら、何か別に人にさう信ぜしめる原因が有る筈だからである。最初に我々が注意をして居たのは、所謂白米城の故跡から、屢々焼けた米が出ることであつた。米は農民の大切にするもので、やたらに山野に撒き散らさぬのみならず、そんな物があれば必ず鳥が來て啄んでしまふ。それが土の中から焼けて澤山に出て來るのを見ると、驚きもし訝りもするのは當然のこと、本當はそれと馬を洗つたといふ話とは關係がやゝ遠いのであるが、一寸考へると或はさうかも知れぬといふ想像を起させるのであつた。

土の中や岩の陰から焼米の出る土地は、必ずしも斯ういふ山の上の城址のみとは限らない。平地にそれがある場合には、通例は昔の長者の屋敷跡だと傳へて居る。或處では長者が大火事に遇つて没落し、其米庫の米が朽ち残つて居るのだなど、謂ひ、それを煎じて飲むと瘡の病が治ると信じて居る地方も少なくは無い。名和長年が、天子を奉じて籠城したといふ伯耆の舟上山の如きは、白米城の傳説は無いけれども、やはり赤土に交つて今でも焼米が出るので有名である。といふよりも或は焼米が出る故に、爰を太平記にある舟上山

と、きめてしまつたといふ方が正しいかも知れぬ。

焼米が出るから城址だ長者屋敷だと推定することは、實は頗る不安心なものであつた。殊に我々の過去は永く、大事件は只其一時點に外ならぬ。その前後の千百年に亙つて、何か別に焼米の土に埋もれるやうな原因が有つたのでは無いかどうかを考へずに、直ぐに二つの事物を結び付けようとするのは正しくない。米は前代の生活では入用に臨んで精げたもので、貯へて置くには粃のまゝであつた。長者の庫に白米が有つたといふことは勿論疑はしいが、幾ら籠城の際でも、馬を洗ふほど多量の白米を、用意して置いたといふことは信じられぬ。殊に軍陣の間では玄米が普通の兵糧であつて、白米が今のやうに白くなつたのは、近世の所謂生活改良であつた。白米城の傳説を信じた者は、先づ是だけの事實をすらも、よくは知らなかつた人たちであるから、其推理に若干の誤りがあつたとしても不思議は無い。

我々の考へて居るのは、以前山や丘の上の淨き土地で、祭をする習はしが今よりも盛んであり、其供物の米を祭が終つて焼いたか、もしくは今日の田神祭のやうに、焼米にして供へて居たのでは無いかといふことである。白米城の傳説地がもしさういふ祭をする處であつたならば後に其式は斷絶してしまつても、なほ常に格別の注意と敬意とを、其土地に對して拂ふ人が多かつたわけで、言はゞ傳説の特に成長し易い沃土であつたかも知れぬのである。

次には此傳説が、かねて國中を流傳して居たとして、如何なる因縁がそれを此地に土著せしめたかといふこと、是も列擧した多くの例を見比べて少しづつ其端緒を引出す事が出来るやうである。此物語の内容は、非凡なる人間の智能によつて、弱は能く強に勝つたといふ成功譚の系統に屬するにも拘らず、其結果は半分以上不幸に終つて居る點が、見遁し難い一つの特徴である。即ち一旦は白米で馬を洗つて敵の眼を欺いたけれども、後に何かの事情で其術が露れ、もしくは第二回の攻撃に由つて、城は結局落ち城主は滅びたことに

なつて居るものが多い。陸前登米の例は小鳥が其米に附いたので水で無いことが判つたと謂ひ、他の多くの例では老女とか寺の僧とか内通して、事實を敵に知らせたといふことになつて居る。此種類の説話の通例の形に比べると、この悲劇的終局が著しく眼に著くので、是は私などの遺恨型又は怨念物と名づけようとして居る部類に屬して居る。能の舞などでは、必ず其事件の主人公自身の靈が、出て来て物語することになつて居る。さうしてやはり時には生前の得意談にも及ぶことがあるのであつた。例へば謡曲八島では後シテは源義經で、

去つて久しき年波の

夜の夢路に通ひ来て

修羅道の有様あらはすなり……

と謂つて、殊に彼が一生涯の最も花々しかつた實驗を語つて居るのである。斯ういふ稍不調和な二つの説話の結合、即ち勝つた者の快い記憶を、沈んで居る者の淋しい詞から聽く

といふことは、無論後年の複雑化に相異ないが、氣を付けて見ると日本の文學には其例が多い。断定することは出来ないけれども、白米城の傳説の元にも、一つの此の種類の物語の流行が、曾てはあつたのでは無いかと思ふ。

もつと具體的に私の假定を説明すると、最初は兎に角に誰か話して聞かせなければ、土地の人たちは信じたくても、此傳説を知る折が無かつたわけである。全體何人が始めて斯んな話をしたのか。それが第一の問題であるが、私は至つて簡単に、それは此城に居たといふ或武士の幽靈であつたらうと思つて居る。幽靈の言つたことならば、昔の人は信ずることが出来たのである。

何も私が信ずるといふのでは無いから、之を攻撃することは暫らく控へて貰ひたい。私は只以前斯ういふ風があつたらしいといふことを述べるまでである。幽靈が活きた人に話をする方法は、二通りあるものと考へられて居た。其一つは夢か幻しかに現れて語ること。

人が追々不實を説くやうになつて、そんな事を謂つても信じない者が多くなつたが、それでもなほ眞面目に此方法によつて、死者の口から或事實を知つたと思つて居る人が今でも居る。第二の方法は口寄せといふ者の口を借りること。是も所謂知識階級こそは、有り得べからざることゝ考へて居るが、現在もまだくゞ弘く行はれて居て、それを聴かうとする程の人ならば、全部で無いまでも一部は信するに足ると思つて居るのである。

白米城の奇談が既に現實のもので無く、又城に在つて其祕術に参加し、更に寄手の中に入つて、水かと思つた當時の状況を聞合せることの出来た者が、落城の後まで生き残つて、其實驗を人に語るといふことが六つかしいとすれば、この二つの方法の何れにもせよ、鬼に角に幽霊の言に聴くより他は、別の途は無かつたことゝ考へられる。さうして土地の人の想像力、所謂潜在意識の範圍は限られて居た。白米で馬を洗ふといふ類の奇抜な思ひ付き、しかも熟知區域が十里十五里の間隔を置いて、日本全國に分布するの一つの事實を、個々獨立して村々で聴くことは出来なかつた筈である。故に私は之を今日風に解すれば、

口寄せの持つて來た話、信じた人たちの立場から言ふならば、幽霊が或優れたる歩行神子(アルキミコ)に託して、語つて聴かせた話の名残であつたらうと思ふのである。

近世の口寄せ神子の頼まれるのは、大抵は家庭的の交通だけであつた。新たに死んだ者の有る家では、通例其次に來る彼岸の日、又は中陰の終りに近く、一度は其人の口を寄せることになつて居る。又或家では定まつた季節に、祖先の靈を招いて幽顯二界の會話を試みることになつて居るのみで、無縁の亡者までには及ばうとせぬのが普通であるが、それでも何か一向に心當りの無い物の祟り、意外な障りなどに出くはすと、斯ういふ職業の者に頼んで、先づ憑らんとする者の誰であるかを知らうと試みる。さうすると大神が出て來たり、天狗が現はれたりすることもあるが、時には突如として數百年前の死靈が、自ら名乗つて因縁を説くこともあるのである。

それにも時代があり傾向があり、又は口寄せの専門も段々に分れたが、近頃は東京など

では動物や樹木の精は少なく、益々盛んに死んだ名士の靈が語るやうになつて居るさうである。聽手が多智多感であると、幽靈の言も亦どし／＼と改良せられるであらうが、村には以前何物をも信じ得る人が、寧ろさう澤山の新奇を豫期せず、各自の理解し得る靈驗を得ようとして居た。其上に靈媒の能力にも限りがあつた故に、今でも田舎の口寄せはその言ふことがやゝ形式化する傾きを有つて居り、又それで少しも差支の無いやうに、巫女は常に弘い旅行をして居たのである。

戦争は昔から、政治の大いなる混乱であつたと同じく、又靈界に向つても非常な動搖を與ふるものであつた。單に一時に多くの亡靈が出来るといふのみで無く、其靈は何れも氣力のなほ盛んな、無理に今までの宿りから追出された、荒い憤つた所謂浮ばれない者ばかりであつた。佛法の方から見ても、さう容易には淨土へ移つて行かぬ怨靈のみが多かつた。村里の周圍を其様な怖いものに充滿させて置いて、不安を感じざる人は無かつた筈である。殊に白骨が散亂し夜は陰火の燃えるといふやうな場處が、次から次へと不思議話を積み重

ねて來たことは、それだけは少しでも不思議でなかつた。其状態がどれ程續くべきものであつたかは、細かな色々の原因も加はつて居るから、簡單には之を算定し得ないが、平家物語でも義經記でも、決して文章や情感のみから、あれだけの人の注意を引付けて居たもので無いことは、其中心の何處であつたかを考へて見てもわかる。能でも幸若でも、實は古戰場文學の一面の發達に過ぎなかつたのである。

供養追善が追々に此動搖を鎮靜したことは事實であるが、その一つ前には色々の意外な災害と、其原因の探求とがあつたのみならず、之を逃れる方法の一つとして、出来るだけ詳しく過去の事蹟を説き、又忍耐してそれを聽かうとした風習のあつたことは、多くの記録に依つても之を跡付けることが出来る。幽靈は普通甚だしく饒舌なものであつた。其理由は私には説明することがさう六つかしくは無い。夢でも口寄せでも、實際は個人的であつたから、前に聽いて居る事實と大抵は一致しない。それ故に時代が進むと共に、益々詳

しく且つ具體的に語つてくれぬと、聴く者が合點しなかつたのである。

之を白米城の傳説にあてはめて考へて見ると、村の附近に注意すべき一つの靈地があつて、そこに村人が折々は奇恠を見た。多分戰場であらうと想像して居るうちに、或時一人の優れた巫女が遣つて来て、口を城の主の亡魂に貸して、眼に見る如く以前籠城の日の光景を語つた。其語り事の中で特に心を動かした一節は、白米を水と見せて馬を洗つたといふ逸話であつた。成程さういへば此處には焦げた米が埋まつて居る。話はよく合ふといふ様なことになつて、後には些しの疑ふところも無く、之を當地の歴史として人に誇り得るやうになつたのでは無からうか。それを一方の口寄せの側から言へば、必ずしも山に燒米の出るといふことに暗示されずとも、是が高い處に靈地の有りさうな村に来て、昔の戦を語る一つの形式であつたのかも知れない。僅かづつの組合せの相異はあつても、實際彼等の用ゐて居た語り事は、さう澤山の種類があらう筈は無かつた。今でもよく生靈か死靈か、男か女か目上か目下かなどと、寄せられる靈の人柄を尋ねて後に、言ひ出す文句も亦大よ

そは定まつて居るので、是が主として各地の物語の、細かな點までが共通だつた理由であらうと思ふ。巫女の故郷といふものは信濃とか丹波とか、尋ねて行くとまだ方々に有るらしいが、やはり最も大いなる中心は京都にあつたやうである。彼等にも師弟の系統はあり、又練修があり各自の發明があつた。白米で馬を洗ふといふ昔語りの如きも、他の多くの民間説話と共に、大本に溯れば學者の智識で、出處は佛典であつたり又唐宋の奇聞集であつたりするかも知れず、それから絲筋を引いて段々に、他の民族の影響も認められぬとは限らぬが、少なくともそれが日本の昔の物語となつたのは、個々のいはゆる白米城の所在地では無かつたのである。

此意味に於て我々の傳説は、今や全く埋もれてしまつた中世の一つの社會相を語つて居る。それも切れぐに自分の土地ばかりの、古い口碑を守つて居ただけでは、何の事やら分らずになつてしまふのであつたが、幸ひにして近來各地方の聯絡が開けて、斯くの如く

一時に各府縣の類例を比較して見ることが出来た故に、人はどうしてもその共通の根原を尋ねずには居られなくなつたのである。

最初に二つの問題が我々の研究を具體化させようとする。其一つは傳説の發生地、是には又二通りの別があつて、ちようど作物ならば新たなる栽培地に當るものと、元から成長したものを採取した場處とがあり、新らしいものには輸入種もあつたか知らぬが多數は原産地を以て目すべきものが分つて居る。例へば全國に分布して居る蛇の掣の話なども、半分以上は池なり洞穴なり、爰より外では無いといふ遺跡があつて、我々の定義の傳説の部に屬するのであるが、しかも其出發點が大和の三輪であつたことのみは、如何に我處の言ひ傳へに忠實なる者でも、もう之を否定する力を持たぬのである。但し今日までは如何にして一つの傳説が、村から村へ移るかを知らなかつた爲に、輕々に剽竊だの模倣だのといふ斷定を下さうとし、それに服しない者が又無理な理窟を付けて見ようとしたのである。そこで第二の問題として、その傳説の運搬者が何人であつたかといふことが考へられる。

通例は村から外へ旅行でもした者が、同じ傳説のあつた處に行き合せて、それを持還つて我土地のものにしたと推測せられて居るのであるが、それはウソツキの多い今日でも出来ぬことである。我々なら他にも類例が有るといふことを知れば、寧ろがつかりとして今まで信じて居たものを棄てるかも知れぬのに、幾ら昔の人でもそれから新たに信用し始めるといふわけは無い。是は反對に自分の村以外には、有るといふ事を知らなかつた結果と見る方が正しいのである。斯ういふ状態に於て全國共通の話を、遠くから持つて來て信ぜしめ得た者は、さう多勢は居なかつた筈だから、我々には追々見當が付いて來るのである。

餘り澤山の假定を設けずとも濟むやうに、出来るだけ顯著なる一列を見出さうとして私は苦心した。他日なほ詳しく述べて見るつもりであるが、和泉式部が瘡の病に罹つて、藥師如來に願を掛けて歌を詠んだら返歌があつたといふ話、是などは歌の性質から推しても時代が略わかる上に、醒睡笑といふ本には之を叡山の兒童の話とし、一休諸國咄では三河の

鳳來寺に於て、和尚が戯れに作つた狂歌のやうに記して居る。即ち精々は江戸時代の始め頃に、それを和泉式部又は小野小町の如き、女の歌人の逸話として通用させることになつたのであるが、しかも薬師を安置した國々の靈場に於ては、今以てそれを自分の土地の歴史と信じ、また他の地方にも同じ文句のへぼ歌が、傳はつて居ることも知らぬのである。私は之を京都の誓願寺、即ち今も和泉式部の墓と木像があり、同じ女性の色々の事蹟を、語り傳へて居る御寺から出たものと認めて居る。此寺には何か原因があつて、面白い多くの昔話が傳はつて居た。前に揚げた醒睡笑なども、曾て此寺の住持であつた安樂庵策傳が、聽いて覺えて居た滑稽譚だけを集めたと謂つて居る。さうして同時に諸國修業の比丘尼や法師が、爰を本山として絶えず出入をして居たらしいのである。最初それが何人の手を以て作られ、又どうして教へられたかはまだ判明しないが、兎に角に此連中が旅の身過ぎとして、歌ひあるいて居た讚佛乗の物語には、定まつた一つの型があつて、それが中央の或處に於て統一せられて居た結果、斯ういふ奇異なる全國の傳説の、一致を見るに至つたと

とだけはほゞ明瞭である。

但し其臺本とも名づくべきものは、最初から無かつたらしいから出て來ないに極つて居る。従つて此一派の管理に屬した物語の種類は勿論、それが如何なる形を以て歌はれてゐたかも、今では只想像をして見るより他は無。私に見た書き物の中では、安居院の神道集といふものがたつた一つ、無理な漢字を以て斯ういふ語り物を筆録した實例であつて、それは既に南北朝の末に出來上つて居る。安居院も京都の念佛團體の一つで、やはり諸國を巡業した宗教的藝人の中心であつたかと思ふが、それと後代の誓願寺一派、即ち和泉式部を開祖の様に謂つて居た歌比丘尼たちとの、脈絡はまだ明かにし得ない。たゞ安居院の方に傳はつて居る諸國大社の本地譚が、何れも荒唐奇恠を極めて居るに拘らず、往々傳説と化して關係ある土地に保存せられ、中にも信州諏訪の甲賀三郎の物語などは、現實に歌ひ物として村々で歌ひ語られて居たと同時に、他の一方それに基づいた傳説が、信州は申すに及ばず、近江常陸其他の土地に、既に根をさして成長して居ることが分つたのである。

自分等は之を文藝が宗教の中から、次第に別れて出た一過程として、特に或邦の傳説にその豊富なる實例を引繼いでくれたことを感謝して居る。白米城の場合も多分さうであらうと思ふが、説く者は夙に物語の藝術的意義を認めて、豫め其様式を準備する程度まで進んで居るのに之を聴く人ばかりはまだそれを人間の技能に出でたものとは考へず、もしくは其技能を、普通りに靈界の事實を表白するものと思つて居たのである。

斯ういふ時代は可なり久しく續いて居たやうで、我々にも其境目は實ははつきりしない。落語で笑ひ芝居で泣くといふ人の心持なども、單に想像力とか同情とかの問題では無かつた。うそだとは知りながらも其時だけは、之を現實と同様に迎へて見るやうな心理は今でさへ有る。井澤長秀翁の俗説辯などは、僅か二世紀前の學者の著述であるが、なほ澤山の民間小説を擧げて、是は信用が出来ぬといふことを力説して居る。即ちあの頃にはまだ有識者の間にも、俗説は原則として信用すべきものであつたのである。梓巫や口寄せのきま

つた事を言ふのは、毎年だから誰でも知つて居るのに、それを頼んでは信じ且つ泣かうとして居たのである。或白人の東印度の島の見聞録の中にも、巫覡は託宣を頼まれると必ず作り事を語る。然るに自分にも何か決し兼ねることがあると、他の同業者を依頼してその靈託と稱するものを聴き且つ信じたと書いてある。

即ち聴いたから信ずるといふよりも、本來信ずる必要があつて之を聴かうとしたのである故に、口寄せの言は永く有力であつたかと思ふ。兎に角に白米城の話などは、早くより多數の語り部の共通の知識であつたに拘らず、土地限りに於ては、それを新事實の啓示として、非常な感動を以てそれを受入れた場合があつて、それだけが歴史の待遇を受けて、いつ迄もそこに保存せられたのである。歴史が今日の如く必ず書物であるならば、自然に二者の區別は立つべきだが、以前の社會では昨日あつた事實も、百年前の出來事も、實驗者から聴いた話も、靈から告げられた物語も、之を傳へる方法は常に唯一つより外は無かつたのである。

靈に代つて昔の事を語る者が、もし村々に割據して外と交通せぬ者ばかりであつたら、傳説は恐らく日本のやうに、斯んな著しい各地共通を示さなかつたであらう。假に一つの民族としての、古い一致は持つて居たにしても、土地それだけの變化といふものが、今少し多かつたことと思ふ。白米城には限らず、我々の村の傳説には尋ねて行くと丸で瓜二つといふものが、幾らとも無く出て來るので、それを私が試みた様に排列して行くと、どうしても特殊の運搬者、それも一つの中心地に於て材料の交換を續けて居た者が、あつたことを考へずには居られぬ。和泉式部と近い例は靜御前があり、又大磯の虎御前の話がある。何れも殆ど全國に亙つて、其遺跡又は出生地といふものが數多い。女性が二人で旅行をしたといふ例は、虎と少將といひ、祇王祇女といひ、又松蟲鈴蟲の二人の官女とも謂つて居る。斯ういふ傳説が新たに發生したとすれば、其時代は當然に限定せられる。それが念佛宗門の流布と關係して居る故に、先づ此方面に一つの中心を想像することが出来るのであるが、勿論一種の團體には限つたわけでは無からうと思ふ。時には男の中にもさういふ旅

行者があつて、違つた系統の傳説を移植して居たかも知れぬ。白米城などもまだ明かにどの運搬者の手にかゝつたかを察することは出來ぬが、ただ稀に其密計が或老女によつて内通せられたといふ例のあるのを見て、女性が此物語の流布に干與して居たのでは無いかと思ふのみである。

私の假定は尙今後の類例によつて、其當否を確めなければならぬものがあるが、少なくとも今まで集まつた材料の上では、是だけの希望は繋ぐことが出来る。其一つには文藝に對する民衆の態度もしくは要求が、もとは今日と丸で違つて居たものだといふこと、其二つは歴史といふものゝ成立には、我々が今日史料と名づくるもの以外、更に一つの非常に豊富且つ有力なる供給源のあつたこと、第三には全國農民の生活に織り交へられて、或少數の移動分子が、可なり強烈に社會文化の表相を彩つて居たこと、第四には我々の大昔から持つて居る異常信仰の根底には、或は近代の傳説長養と同じ種類の作用が、暗々裡に加擔して居たのかも知れぬこと、先づ少なくとも此四つのそれ々に大切なる前代の事實、

今日迄はまだ一向に人の省みなかつた歴史が、我々旅人の根氣のよい實地討査から、段々明かになつて來る見込がある故に、私だけは是をいゝ加減のところまで打切つて置きたく無いのである。

或は説明がまだ不足かも知れぬが、餘り長くなるから一旦此邊で止めて、次には具體的な例を述べて置く。番號は他日引用の便宜の爲に附けたものである。

白米城傳説の實例

(イ) 埼玉縣比企郡松山町附近、有名なる吉見の百穴と相對した東南の丘陵を、上田某といふ武士の城山であつたと謂ひ、土中から焼米の出る處がある。昔籠城の折に水の手を切られ、白米を以て馬の裾を洗つて寄手を欺いたことがあるといふ(十方菴遊歷雜記初篇)。

(ロ) 群馬縣吾妻郡中之條町の東北に聳ゆるタケ山の頂上の平地、大きな岩穴があつて中に白骨の散らばつて居るのは、昔此城で戰死した人の骨で、又矢の根も折々出て來る。敵が此南の青山に陣取つて攻めた時に、水の手を絶ち切つて城兵を苦しめたので、始めのうちには山の間から白米を落して瀧があるやうに見せかけて居たが、麓の百姓の内通によつて、後には寄手も欺かれなくなつて落城したといふ(郷土研究二卷二號)。武田信玄が上州一郷山の城を攻めた時にも、やはり白米で馬を洗つたことがあると、簗輪軍記には出て居るさうだ。また其書は見ないが、又別の話であらうと思つて居る。

(ハ) 新潟縣南蒲原郡長澤村下太浦の釜蓋(カマブタ)城址、四面は絶壁で二萬坪ほどの平地、中央に大きな空濠を通じ、往々土器の破片を堀り出す。時代及び城主は不明、故老の說に、昔敵の一軍大崎村まで攻寄せ、斥候を淺市まで進めたが、要害堅固と見て水の手を取切り、長陣に攻め落さうとした。城兵は之に對して白米を馬に注ぎかけて水浴をさせる様に見せかけた。敵勢遙かに望んで眞の水なりと信じ、用水は不足せずと思つて終に陣を

引いたといふ(嵐溪史)。

(三) 同縣古志郡山本村浦瀬の奥に在る城山、城主は高津谷入菴、天正七年上杉景勝の勢が攻め寄せた時、山の東の麓の土ヶ谷といふ村の老女、城内の用水は大澤といふ處の清水を、伏樋で引いて居るのだといふことを密告したので、土中を索めて其樋を切つてしまつた。それ故に城兵渴に苦しみ、敵を謀らんが爲に白米で馬を洗つて、水に困らぬ様子を遠見させたけれども、寄手は既に水の無いことを知つて居るから、六月二十八日の炎天に進撃して、城は遂に落ちて城主入菴、一族郎徒悉く自害してしまつた。此邊には古墳が多く、又高津谷氏の屋敷跡といふ處からは、元祿十三年に朱の充ちたる二升ほどの瓶をも穿り出したこともあり、村には其後裔と稱する者が種々の記念品を保存して居る。落城の日に寶物を埋めしめたといふ榎の大木があつて、深夜には折々陰火が其樹の下に燃えるのを見たといふ(温故之葉卷九)。寶を埋め金銀や朱の瓶を隠したといふ話は、最も土地の人の重きを置く點であつたと見えて、全國に亘つて非常に例が多く、是にも定まつた歌の型がある。

さうして之に由つて今でも人が搜索をして居るが中々見付からないやうである。是なども自分は或時代の歌物語の流行を意味するかと思ふのだが、坪井正五郎博士は此傳説は通例古墳に伴なふから、當時その土工に従事した者の勞働歌であつたらうと言はれた。是も目錄を作つて詳しく比較して見る必要があると思つて居る。

(ホ) 長野縣埴科郡東條村の尼巖(アマカザリ)山、此山に霧がかゝらぬと雨が降らぬから、雨飾りの意味だとも謂ふ位で、至つて峻岨な高山であるのに、傳説では源頼朝公の時、この山には雨飾殿といふ尼君が城主であつたと謂つて居る。頼朝木曾退治の爲に善光寺に滞陣し、遙かに此城の要害を探らしめた。城は水の手が乏しかつたけれども、尼君の謀を以て、白米を柄杓に汲んで馬を洗つて見せた。それ故に尼巖と謂ふのだとも傳へられて居る(つちくれ鑑)。この山に附いた傳説は、幾分か他の地方のよりも複雑になつて居る。事によると最初此傳説の起つた因縁が、雨乞の祈禱又は早魃の惱みに在つたことを、推測せしむる手掛かりを供するものかも知れぬ。

(ハ) 私は實地を見ないのでまだ確かめ得ないが、やはりこの長野の市から三里ほどの處に、桂山といふ城址があつて亦一つの白米城であると謂ふ。或は同じ山の話が、今では此程度にまで變化して居るのかも知れぬが、桂山の方では城主は落合備中守といふ近世風の名になつて居る。城には兵糧の米が澤山にあつて、飲水には缺乏して居た。それで寄手が水攻にしようとするのに對して、山の中腹から盛んに白米を落して、大きな瀧があるやうに見せかけて居ると、麓の或寺の住持が、あんな處に瀧は無い筈だと謂つたので、それが謀計であることが知れて、とうとう火を掛けて城を攻め落したと謂ひ、今でも山上に戦死者の墓がある。寺の僧は其祟を受けて死に寺も焼けて色々の不思議が續いたと謂つて居る。石のやうになつた米粒が此山中から今でも出るのは、其時瀧に見せようとして山から落した白米の残りであらうといふ(廣野あや子氏報)。しかし此場合は單に米とよく似た白い砂礫であつたかも知れない。焦げずにさう長い間、穀物の残つて居るわけも無いからである。

(ト) 同縣小縣郡神科村上野の城山、上田の東北一里ばかり、城の名を米山城といふ。今

も城址といふ處から燒米が多く出るさうだが、城の名とは慥かに關係がある。是も天文中に村上義清が、武田勢に攻められて水の手を斷られた時に、馬の背中から兵糧の米を浴びせて、遠見には水が幾らでもあるやうに見せかけ、敵を油斷させて置いて其間に越後へ落ちて行つたと傳へて居る(傳説叢書、宮田氏記を引いて)。

(チ) 次には同じ縣の北安曇郡中土村平倉の古城址、これは飯森十郎といふ武士が、武田方に攻められて水の手を斷られ、白米で馬を洗つて見せたりして敵を欺かうとしたが、城中の飼犬が水を呑みに山を下つて來たので、其苦計も見顯はされて落城した。それ故に麓の里倉といふ部落では今でも戒めて犬を飼はない(小谷口碑集)。犬が水の在り處を教へたといふ方の話は方々に在る。それも今に列擧して見たいが、恐らく水の神の祭と此動物と、古く特別の關係があることを意味するものであらう。

(リ) 同じ縣でもすつと南へ寄つて、下伊那郡上久堅村の神峯城址には、知久大和守が、是もやはり武田勢に攻められた時に、篝火の上から白米を水の様流して、水攻の無効で

あることを示したといふ話がある。山本勘助が松の樹に登つて、遙かに之を望んでまんなま
と欺かれ、口惜しがつて地團太を踏んだと傳へて、今でもその地には少しも成長しない地
團太松の老木がある(傳説の下伊那)。

(ヌ)それから嶺を越えて西筑摩郡に行くと、木曾の妻籠(ツマゴ)の城址にも、亦一つ
の同じ話がある。是は天正十二年に山村良勝が籠城した時に、伊那の菅沼小大膳が諏訪保
科などの援兵と共に攻寄せ、水の手を切つて城兵を干乾しにしようとした。良勝は之に對
し白米を以て馬を洗はしめたのを、敵が遠見して是は水があると思ひ、軍を伊那口へ引上
げて行く處を、伏兵を設けて打破つたとまで傳へて居る(吉蘇志略卷一)。非常に詳しいから
城主の日記の様にも見えるが、後にも伊勢の例でわかる通り、軍記は普通斯う云ふ風に土
地の多くの言ひ傳へを結び合せるものなのであつた。

(ル)つまりは此地方には斯ういふ傳説の起り得る様な、水の少ない山城址の如きものが
多かつたのである。更に木曾川を下つて岐阜縣に入つても、先づ惠那郡中津町駒場の阿寺

(アデラ)城址、地名を聞いたゞけでも嶮岨の山腹であつたことがわかる。爰でも天正二
年の二月、木曾義昌が甲州方として攻寄せ、水の手を槌を切落したと謂つて、土地の名も
斧戸と呼んで居る。此際城中では櫓の上から、米を瀧の如く落して見せたので、別に用水
があるかと疑つて逡巡して居る間に、決死隊が突出して圍みを破つたと傳へて居る(惠那神
社誌附録)。

(ヲ)次には同じ岐阜縣の飛驒の山國には、二つは少なくとも同様の傳説があるが、中々
二箇處位では無いと、土地の學者は謂つて居る。最も古く知られて居たのは、吉城郡國府
村の箕輪(ミノワ)城一名白米城、國司姉小路家の臣下牛丸攝津守、是に籠城して馬を洗
ふの智計を廻らしたと稱し、話は全然他と同じであつて、或は敵退き去るといひ、又は終
に落城したとも謂ふのである(斐太後風土記卷一その他)。

(ワ)今一つは又同郡小鷹利村信包(ソブカ)の白米ヶ城、こゝでも姉小路家の幼主を、
忠臣牛丸又太郎といふ者後見して籠城したといふ。寄手の軍兵此城に水無き事をかねて知

りけんや、籠城の面々水無き城なれば咽も乾くべし、是へ出て水呑めと敵陣より呼ばれば、城主智勇の計略にや、白米を以て陣馬を洗はせ候由。寄手の軍兵等水無きよと思へば水多く有之よと感じけるとかや。依つて今に白米ヶ城といふと傳へて居る（飛騨國中案内）。

(カ) 以上で中部日本の分だけは済んだ。次には先づ東北の例を片付けて置くと、其一つは宮城縣登米郡米谷町大字北方の森合城、千葉新助明義といふ武士、敵に圍まれて爰に籠城し、水盡きたれば米を以て馬の脚を洗つて見せたところ、生憎小鳥が來て其水を啄ばむによつて、忽ち水乏しきこと露はれ落城すと謂うて居る。それが慶長七年に死んだ人ともいふが、其頃その様な手詰の戦があつたかどうかは確かでない（登米郡史）。多分はもつと古くからの話を、此勇士の事蹟と混同したものであらうと思ふ。

(ヨ) 同じ郡でも吉田村善王子の朝來（アサコ）といふ處では、長根づたひに土手の跡があつて、朝日長者白米を此堤の上に撒き、白壁と見せかけて賊を防いだといふ傳説があり、又藁人形を多く作つてそれを奉行人の中にまじへ立たしめたので、賊ども之に恐れて念佛

壇に供養をして去つたとも謂ふ（同上）。朝日長者の故跡と之に伴なふ傳説とは此地方にも多い。長者で無ければ米を此様な目的に使ふといふ、途方も無いことは出来なかつた如く、普通の質素な農民たちは考へて居たのである。又さういふ心理が、特に此種の傳説を非常に印象の深いものとしたので、以前の要點は智慮分別といふことよりも、さういふ大膽な思ひ切り又は處分の自由といふ所に在つて、それが没落後の昔話となつて、殊に哀傷の感をも誘うたものでは無いかと思ふ。

(タ) 更に北上川の流を溯つて、岩手縣稗貫郡湯ノ高楯の城にも、さういふ傳説が軍記に化して残つて居る。永享二年の二月に、南部遠江守が此城を圍んだ際に、「城中水の手を留められ大いに迷惑に及ぶと雖、寄手に是を悟られじと朝々に乘馬を牽出し、白米を張りかけ背洗ひの體に見せければ、寄手は遙かに之を見て誠の水と思ひ云々」と記してあるが、是も終には敵から箭文を射て、すかして降参させられたのであつた（吾妻昔物語上卷）。

(レ) 高楯は即ち高い處に在るタテで、亦山城のことであつた故に、水攻めの物語が定著

し易かつたのである。青森縣中津輕郡岩木村の高館でも、城主の名は言はぬが、やはり同じ様な落城談が傳はつて居る。水の手を切られて困つたことを匿さんが爲に、馬に白米を注ぎかけて水で洗つて居る様に見せたけれども、敵方がよく氣を付けて見ると、其水は切れぬになつて落ちて居るので水で無いことを看破し、一層水攻に力を入れたから遂に落城に及んだ、其際城の大將は馬に鞭うつて、隣の新法師といふ村に走り込んで、そこで戦死したと謂つて塚がある（津輕のしるべ）。何かの折に此塚の靈が祟り、段々尋ねて見るとあの高い山の城が落ちた時に死んだ者の亡魂といふことになつたものと想像するが、さういふ序にやはり白米で馬を洗ふ話をして聽かせたとすれば、土地が北の方に遠く隔たつて居るだけにこの符合には意味が深いやうに思ふ。

(ソ)そこで引返して西南部諸地方の例を擧げるが、世間で古くから一番よく知られて居たのは、三重縣一志郡の阿阪城、是は參宮名所圖會等といふ通俗の書にも繪入で出て居り、伊勢參りの道中からも遠望し得る城山であつた。應永二十二年の夏、足利家の諸軍勢が國

司北畠氏を此城に攻め圍み、四方の水の手を止めて城兵を渴に苦しめたときに、城方手だてを廻らして櫓の前に馬を立て、柄杓を以て白米を汲み掛け馬を洗ふ如くにす。寄手是を見て退屈し水を斷つことを中止した。仍て俗に此城を白米の城と名づけたといふことが、南方紀傳や勢州軍記に載せてあり、江戸幕府公撰の後鑑などにも、史料としてそれを採用して居る位だから、土地の人たちは勿論事實と考へ、他縣の是と同じ傳説を其轉借の如く考へて居るであらうが、本當は爰のが最も古かつたと云ふ證據はまだ一つも出て來ない。單に文字に縁のある人々の耳に、少しく早くから入つて居たといふ迄で、それも果して此城の事蹟として、傳はつて居たかどうかもわからぬのである。

(ツ)同じ三重縣でも大河内の城に、やはり同様に米で馬を洗つて見せたといふ話があることを、武功雜記といふ書には載せて居る。是も籠城をしたのは北畠方で、智慧を搾つたのは家老の某となつて居る。ただ此方は永祿年中のことで、時代だけが百五十年も後の、織田信長の打入の時となつて居るのであるが、二度はさて置き假に一度だけでも、實際を

んな事實があつた筈はないのである。

(ネ)ところが其の隣の滋賀縣に來ても、蒲生郡西大路村音羽の城に於て、蒲生貞秀入道が細川政元の家臣澤倉某に攻められた時、水乏しきを隠さんとして米を桶に入れ、汲みかけて馬を洗ふ如く見せたといふ逸話が常山紀談に出て居る(醉迷餘録)。

(ナ)京都府では丹後中郡五箇村の城で、城の主山岡民部が敵に攻められて水盡き、白米を以て馬を洗つて敵を計つたけれども、遂に落城したといふことが、丹後古事記といふ古い戦記に誌してある。天正年中の事とも謂ひ、或は天文十三年だとも書いたものがある(中郡誌稿)。

(ラ)島根縣では雲州の白髮城に於ても、尼子義久が毛利に攻められた際に、是は白米では無く白砂を以て馬を洗ひ、敵を欺いたといふ話が傳はつて居た(新續古事談)。醉迷餘録には此等四つほどの例を並べて、元は何れか一つが眞實であつたのを、他の處々にも誤り傳へたものだらうと謂つて居るが、誤聞でもはた故意でも、それが根をはやすには數十年は

かゝると思ふ。そんな事をして次から次へ移つて居たら、とても是だけ一致した傳説が、同時に國の端々にまで行渡ることは出来なかつたであらうと思ふ。

(ム)昔の人の推測はまだ充分に具體的でなかつたが、戦記は大抵江戸時代の初期、百年ばかりの間に各地とも出来上がつて居る。それが一つ／＼獨立して、同じ白米城の話を書き録して居るのを、單に作成の年月順によつて、前を見て眞似たと見ることは、少なくとも動機と方法とが説明し難い。是は最初から既に共通の資料があつて、寧ろ互ひに他の地方を知らぬ爲に、之を珍重して書き残すことを得たものと思ふ。九州の實例は大分縣に一つ、豊後鶴ヶ城の話が豊薩軍記に出て居る。天正中利光宗寅此城に於て島津勢に圍まれ、箭に中つて戦歿したのを城兵色にも顯さず、遊興の舞樂し白米で馬を洗つて見せた。薩軍城中用水に乏しからずと心得て、水の番を引いたと記してある(郷土研究四卷五號、南方氏報)。是などは或は筆者が既に軍談の型を熟知して、幾つかの籠城苦心談の一例に取合せたとも考へられるが、次に擧げる一つなどは地名説明の傳説で、少なくとも一旦は故老の口を

經て居たことがわかる。

(ウ) 佐賀縣では松浦一黨の根據地の一つ、岸嶽城址の南手に米の山といふ高地がある。或時寄手が水●手を切つて責め落さうと企てた時、城方其計を覺り、馬を此處へ出し白米を以て洗うて見せた。遠方からは水と見えたので敵が水責めの計畫を中止して退陣した。「其跡にて水の要害を拵へ申候由。白米にて駒を洗ひ候處を米の山と謂ふ」と傳へて、それを土地の一つの舊跡に算へて居たのである(松浦昔鑑)。

(牛) 四國でも或ものは既に記録の中に保存せられて居るだけであるが、やはり根原は口碑であつたかと思はれる。高知縣幡多郡鹽塚の城は、鋪地民部少輔藤康これに立籠り、伊豫國の軍勢が之を攻めたけれども抜けなかつた。偶々一人の老女用水の在り處を密告し、敵は上水の手を切つて城兵を苦しめ、藤康は城の塀の上に馬を上げ、白米にて水使ふ眞似をして見せたが、遂に落城したといふのは、遠く離れた越後釜蓋城の例とよく似て居る。老女の告げ口は傳説の古い一つの型であつた。

(ノ) それから香川縣に行くと、今度は又土佐から攻められたといふ話になつて居る。其一つは大川郡富田村の境に在る雨瀧山の城址でも、大切なる水源地を長會我部軍に破壊せられ、飲水が盡きて今にも干死に死なうとした時に、一計を案じて山から米の洗ひ水を盛んに流して見せた。寄手は之を望み、さては他にも水の用意があるのかと驚いたが、よく見ると多くの小鳥が來て其水を啄むので、始めて白水と見せたのは實は白米であつたことが知れ、構はず政立てて翌日は落城したと謂ひ、討死した城主の墓も城址の近くに在る(藏本長市君報)。是などは宮城縣米谷の例と半分以上似て居るが、眞似たとしては互ひに餘り縁が無い。雨瀧は恐らく信州の雨節りと同じく、元は戦争と關係無き雨を禱る山であつた故に、斯ういふ水不足の遺恨談が、自然に成長することを得たものと思ふ。

(オ) 愛媛縣では喜多郡藏川村三重の城址に、やはり長會我部軍の來り攻めた時、米で馬を洗つて寄手を欺いたといふ紀藤將監の話が傳はつて居り、なほ同じ郡内にもまだ二三箇所は同じ傳説があるといふことである(横田傳松氏報)。

以上が今日自分が知つて居る實例の全部であるが、今後も讀者諸君が興味を持たれたならば、まだ／＼澤山の類例が今無い地方からも出て來ることと思ふ。さうして其中の若干のみは、よその村に珍しい昔語りのあるのを羨んで、そつと持つて來て移植をしたといふ嫌疑を受ける者があるか知らぬが、此通り弘く分布した多數のものが、悉く其手順を経たものとする事だけは絶対に出來ない。さうすると當然に誰が何處から如何にして、運んで來たかの問題が発生する。私の假推定が信じにくいならば、第二第三の答は必然に出て來るであらう。結論は假に小さくとも、學問としてはもう十分に成立つて居る。ましてや文學と宗教と經濟生活との三つの方面に互つて、今まで何人もまだ究めなかつた可なり大切な過去の事蹟が、たとへ薄々ながらも此道筋を通つて、始めて我々には窺ひ知ることが出来るのである。日本の靈界現象の複雑にして又豊麗なることは、僅かに存する文字の記録からでも推察せられる上に、今日の忙はしい世に住んでも、まだ毎日のやうに我々は之

を實驗して居る。その不可思議に對する平民の敏感も、やはり年久しき文藝の感化であつて、之を全國的に統一しては又頒布して居た幾つかの漂泊者の群が、實は暗々裡に非常に大きな仕事をして居たといふことが、斯んな一つの傳説からでも、追々に立證せられるかも知れぬとしたら、採集の事業も亦決して無意味な道樂では無いわけである。

(昭和四年三月、「旅と傳説」)

再び白米城の傳説に就て

其後『旅と傳説』に報せられた、(一)陸中江刺郡岩谷堂の城址(喜田博士)、(二)下野芳賀郡益子町高館山の城址(高橋勝利君)、(三)陸奥三戸郡大館村大字妙の大茂館址(小井川潤次郎君)、(四)近江滋賀郡阪本城址(垣田五百次君)の四つの例の外に、更に又幾つかの資料が加はつた。他日改めて精密なる比較を試みるとして、一應其目錄だけを作つて置きたいと思ふ。便宜上北の端から列記して見ると、

(五)陸奥二戸郡福岡の古城。天正十九年の九月に、九戸左近將監政實籠城の際、國司勢に水の手を斷ち切られて、白米を柄杓に酌んで三百疋の馬に注ぎ掛け、城中の水いまだ盡

きざることを示したと、九戸軍談記には語り傳へて居る。續群書類從に採録せられた九戸記其他の記録には其事が見えない。是は中道等君の注意によつて知つた。軍談記では九戸政實の立て籠つた城を宮野城と記して居り、宮野城は實は九戸氏の本居、九戸郡伊保内村に在るのださうだが、宮野を福岡城の舊名と解する説も既に久しいから、もし白米城の傳説が今も残つて居るとすれば、やはりこの二戸郡の古城の方に附いて居ることゝ思はれる。尙この序に、前編(夕)に載せた稗貫郡臺村(湯)の高楯城のことは、邦内郷村志にもほぼ同様の叙述がある。

(六) 下野那須郡那須村湯本、即ち今の那須温泉の近くの城址にも、白米で馬を洗つた口碑のあることが、那須温泉案内といふ書にあるさうだが、私はそれを持つて居ない。近年出版の那須郡誌、又は明治三十七年の栃木縣誌には其記事が無いのを見ると、是も記録とは關係の無い民間の傳承であつたらうと思ふ。

(七) 越後では中蒲原郡川東村大字不動堂山に、もう一箇所の白米城の址があるといふことが、中蒲原郡誌に見えて居る。年代も城主の名も丸々不明で、只この妙策を用ゐたにも拘らず、終に落城して士卒が守將を殺して降つたとばかり傳へて居る。

(八) 能登の半島にも二つの白米城のあることが、つい此頃になつて私には發見せられた。其一つは有名なる七尾の古城、畠山家の久しい根據地である。但しこれには馬を洗つたといふ話は無い。越後の上杉家の軍勢が此城を圍んで居たときに、水の手を切つて散々に苦しめ、もう參つたらうと思つて橋の上から伺うたところ、盛んに瀧の水が白く流れ落ちて居るので、失望して兵を返さうとした故に、其橋の名を今も戻り橋といふとある。しかも無数の鳥が其瀧の水に集まるので、始めて白米なることを知つて、取つて返して攻め落したとも謂つて居る。二三ヶ月前に出版せられた石川縣鹿島郡誌の記事である。

(九) 今一つは是と隣する鳳至郡の宇出津町の城山の話で、同じく近年の鳳至郡誌の中に録せられて居る。城に取籠つたのは長與市景連、寄手は是も亦上杉謙信の軍であつた。七尾と宇出津とは船ならば數時間の距離であるが、口碑は二地全く同じで、是も白米の瀧を

流し、鳥類の來り喙むによつて、その偽謀が暴露したと謂ひ、馬を洗ふといふ一條は無いのである。但し戻り橋の遺跡の代りに、爰では城山の海に臨んだ一面の、赤く崩れて目に著く處を、その白米の瀧の落ちて居た痕だと謂つて居る。

(一〇) それから西に進んで出雲簸川郡鳶巢村、今の平田の町の郊外に在る鳶巢城址にも、毛利の軍勢に攻められた尼子方の城兵が、虚勢を張つて白米で馬を行水させた傳説がある。と、小村力藏君は報ぜられた。前章に擧げた新續古事談の白髮城(ヲ)とは、勿論別の話である。是も雲陽實記とかに出て居るさうであるが、私はまだその書を見たことがない。

(一一) 其次には備中吉備郡高松村、高松の水攻めで名の高い清水氏の城址であるが、是だけは少しく話が違つて、白米の妙計を施したのは寄手の羽柴方といふことになつて居る。最初城の東を流るゝ一宮辛川の堤に布を張り、其上から白米を少しづつ流して見せると、城兵は遙かに之を望んで、この位のことならまだ日數がかゝると安心して居るうちに、不意に他の一方の足守川の水を切り入れて、忽ち此城を水で圍んだといふのである。落城と

白米との聯想が前からあつたので無いと、ちよつと是だけ獨立しては、言ひ出されさうにも無い稍込み入つた物語である。此話は岡山の桂又三郎君から報知せられた。此縣内にはまだ焼米の出る城山が幾つもある。其中には或は白米城の傳説も残つて居るかも知れぬ。

(一二) 海を越えて四國に渡ると、讃岐香川郡上笠居村、即ち高松の市から西へ一里ばかりの勝賀山といふ香川家の古城に、やはり米を以て馬を洗ふといふ話が傳はつて居ることが、宮武省三君の讃州高松叢誌に誌されてゐる。是も同國大川郡雨瀧山の事蹟と同じく、天正十年土佐の長曾我部が攻寄せて、藤尾の城が降を納れた時のことだらうといふが、記録にはまだ見當らぬさうである。戰國交通の十分で無かつた時代には、何度か同種の謀計が焼き直して用ゐられたかも知れぬやうに、宮武君は考へて居られる。もう是くらゐ例が多いと、さういふ説明は六つかしからうと思ふ。

(一三) 九州では豊前黒崎の麻生城に、同じ話があつたといふことが、右の宮武氏の著述中に見えて居るが、詳しい事はまだ聽いて居らぬ。

(一四) 次には同じ國の香春岳の城址にも、馬に白米を浴せて水あることを示した傳説がある。秋野新君といふ人が報ぜられた。今一應土地に就て確めて見たいと思ふが、是は城下の家の一人の女性が、敵の間者と縁を結んで、秘かに泉の在處を教へた爲に水の手を切られ、城は焼打ちに遭うて陥落し、奥方若君は谷に墜ちて死に、其娘の一家も祟の爲に死に絶えたと謂つて居る。さうして今でも亡魂のしわざとして、山中に入つて異様の物音を聴くといふことである。

(一五) 肥前では藤津郡鹿島町と、能古見村との境に在る蟻尾山の上に、有尾城といふ城の址がある。文明年中大村家親が此城に居た時、千葉氏の軍勢に攻められて城中水乏しきを隠さんが爲、馬を小高い切所に牽き出して、白米を注ぎかけて水を使はせる状を装うたので、敵軍は容易に攻入らうとしなかつたが、搦手の防備が手薄であつた爲に、後に其虚を衝かれて落城してしまつたと言ひ傳へる。

(一六) 右の鹿島の町から二里あまり上流、能古見村の南端には本城といふ部落がある。

京ノ岳の翠巒を控へた好景勝の地であるが、頂上に城山といふ五反歩ほどの平坦があつて、そこにも白米で馬を洗つた傳説が残つて居る。城の主は原右近太夫清房、有馬氏に屬して居た。寄手は龍造寺の武將たりし鍋島豊前守であつたが、此城たつた一つの弱味であつた水不足が、白米の計略によつて巧みに押隠され、敵は攻めあぐんで空しく退却したと謂ひ、其時月毛の駒を引出して白米で洗つたといふ岩を、土地の人々は今に千石岩と呼んで居るさうである。此二つの例は右の本城部落の居住者、早田信四郎君の報告である故に最も確かである。

(一七) 更に今一つの例は同國杵島郡朝日村宇黒尾、即ち高橋の停車場から西北に見える烏帽子岳の山上にも、多くの焼米を出土する城跡らしき地があつて、そこにも亦同一の傳説が保存せられて居る。この報導は鹿島實業學校教諭の原虎一君と右の早田君と双方から私は受取つたが、年代に就ては必ずしも確かな言ひ傳へは無い様に思はれる。即ち一説には是を源平時代の合戦と謂ひ、一方朝日村の村誌では南北朝の兵亂に、肥後の菊地勢が武

雄の後藤氏と合體して、探題の今川氏を此城に攻め圍んだ際だと記して居る。兎に角に城兵が水の缺乏に苦しんで、白米で軍馬を洗ふの奇策を試みたといふことのみが、特に鮮明に住民の記憶には残つて居たのである。

以上前編を通じて今知られて居る例が四十三、南北十九の縣に互つて居て、まだ此外にも現はれて來る見込がある。さうして自分はこの類例の際限も無く見付かるといふことが、最も大なる學問上の價值だと思つて居る。澤山の理窟を述べ立てる面倒無しに、歴史と傳説との差別は誰の目にも明かになつて來るからである。たとへば白米で馬を洗つて見ようかといふ思案は、偶然に或は二人三人の頭に浮ぶかも知れぬが、是に伴なふ結果までが一致するといふことは歴史では六つかしい。表に作つて見れば直ぐにわかることだが、小鳥が飛び集まつたので米だといふことの露はれたものが、宮城と石川と香川の三縣に四箇處、女が告げ口をして敵が悟つたといふものが亦何箇處かある。それよりも更に重要な一つの共通點は、此傳説の屢々九戸軍談記といふが如き、演義體の軍物語中に書き残され

て居ることである。演義は過去の或事績に關して、もつと詳しく知りたいといふ熱望が、誘ひ起した所の一つの技藝であつた。現在の講談師の實驗が教へる如く、是には長期の練習と口傳があり、又多くの様式の成長とその自由なる配合があつた。水戸黃門や大岡越前守が人望ある話題となれば、古今内外の各種の昔話は、次から次へと來り加はつて、悉くこの二人の英傑の逸話にならうとする。それが前代の八幡太郎、弘法大師に於ても同様であつたのみならず、遠く溯れば釋迦の前生を説き盡したジャータカの物語とても、亦復是の如きものであつたのである。しかも文書を以て固定せられなかつた我々の「無教育」時代の事を考へると、この話の種の運搬と交易と、珍藏と活用と愛玩と感動とは、勿論今よりも何十倍か盛んであつたと見てよいのである。吉野拾遺や江源武鑑を始めとして、江戸時代に出現したといふ偽書の數は多い。近世の修史家が安心して居た古記の中にも、一部は精確で、一部は作り事であるものは幾らもある。是を二三の天才あるウソツキが、空から書き上げるものと見ることは恐らくは不當で、其前久しい間口から耳へ、自由

な著述が許されて居なかつたら、到底そんな事は考へ出す事も出来なかつたのである。但し其出鱈目を我々の現實生活に應用するやうになつて、そこに始めて禁止すべき弊害は現はれたが、過去は寧ろ國民の空想の、最も無害に逍遙し得る遊歩場であり、同時に又彼等の追憶を、淨化し美化するところの沈澱池でもあつたのである。兵馬劍戟の間にをめき叫びつゝ、殺戮せられた人々の爲には、殊にその淨化装置の必要は大であつた。是が平家物語の赤間が關に起り、曾我物語の富士の裾野に成長すべかりし、必然の理由の如くに私などは考へて居る。だからもし強ひて白米城の傳説の責任者を明かにしようとするれば、それは欺いた人でも無く又輕々しく信じた人でも無く、寧ろ其土の久しく荒れて、秋の草の離離として居たといふことに、やさしい物の哀れを感じて居た人々こそ、當の本人だと言はなければなるまい。藝術は言はゞ人間の幸福なる弱味から、斯ういふ順序を踏んで段々に發達したものであるらしいのである。

(昭和四年十月、「旅と傳説」)

白米城傳説分布表

大正五年の始め、「郷土研究」四卷三號に此問題が掲げられたときには、實例の知られて居るものが九つしか無かつたのが、昭和四年には四十三、南北十九の縣に亘つて分布して居ることがわかつて來た。現在はそれがよほど多くなつて居る。無論是からも發見せられるであらうが、重複のむだを省く爲に、一應地域別に排列して見る。此中で片假名又は數字を括弧にして記入した分は、前篇に掲げたものだから詳しくは説かない。利用者は寧ろ此表に見えない同種傳説が、如何に面貌を異にして保存せられて居るかに、注意せられたら楽しみが多からうと思ふ。出来るだけ出典又は報告者の名を記入して置くことにした。

青森、中津輕郡、岩木村 高館城(レ)

同 三戸郡大館村妙 大茂館(三)

岩手、岩手郡雫石村滴石城 (岩手郡誌)

城將手塚左衛門尉、寄手南部方、蕎麥を茹る娘に教へられて水の手を断ち切る。雀が白米を啄むによつて計略顯はる

同 紫波郡煙山村 城内館 (旅と傳説三卷六號)

村の娘が白米の計略を敵に教へる

同 碑貫郡湯 高楯城(夕)

同 江刺郡岩谷堂町 城址(一)

同 二戸郡福岡町 城址(五)

秋田、

山形、

宮城、黒川郡大衡村 越路館 (郷土の傳承二)

城主大衡治部大輔、天正中伊達勢に攻めらる。雀によつて白米發覺す

同 登米郡米谷町北方 森谷城址(カ)

同 同郡吉田村善王子 朝來堤(ヨ)

福島、石城郡 住吉城址 (石城郡誌?)

濠の水が早でできたとき、倉の米をいばい敷いて水に見せた。鳥がほじくつて顯はれる

栃木、芳賀郡益子町 高館山(二)

同 鹽谷郡大宮村大久保 城址 (地方叢談)

城主大久保太郎、寄手梶原景時等、水攻にあひ白米を以て黒馬の足を洗ふ。餅賣婆の白狀にて秘密あらはる。鶏を放ちて火攻にす。故に此村今も鶏を飼はず

同 那須郡那須村湯本。城址(六)

茨城、多賀郡高岡村下君田古館 (大間知篤三君)

城主宇野氏、敵方欺かれて引返す。其地と稱して旗卷平の地名あり

千葉、――

新潟、中蒲原郡川内村不動堂 白米ヶ嶽 (七)

同 南蒲原郡長澤村下大浦 釜蓋城址 (八)

同 古志郡山本村浦瀬 城山 (三)

同 同 栖吉村栖吉 普濟寺山 (越の風車)

城將夜遁れ城落つ。陣鐘は寺に残る

同 中魚沼郡倉村 倉俣城 (高志路七卷五號)

外丸村辰ノ口城主に攻められしとき、白米を以て馬を洗ふ。敵遙かに之を望んで引返す。駒返は

その遺跡かといふ

同 岩船郡三面村布部 城山 (布部郷土誌)

米を瀧に流す。鳥が集まつて敵に見破られる。今も五月節供の日は、此山に白い幟が立ち白い馬が走る。之を見たものは死ぬといふ

群馬、群馬郡? 一郷山 (ロ)

同 吾妻郡 タケ山 (ロ)

同 利根郡沼田町 倉内城 (上野國志)

城主沼田三郎。保安元年七月の事といふ。他の多くの例よりも四五百年早し

埼玉、比企郡吉見 上田氏城址 (イ)

東京、――

神奈川、――

長野、小縣郡神科村上野 米山城址 (ト)

同 下伊那郡上久堅村 神峯城址 (リ)

同 東筑摩郡洗馬村本洗馬 城址 (伊那の中路)

村の名も是より起るといふ

同 西筑摩郡吾妻村妻籠 城址 (ヌ)

關東中部の例

白米城傳説分布表

一五二

同 北安曇郡美麻村 千見城址 (郡郷土誌稿卷七)

弘治年中、武田勢に圍まれたといふ。城主大日方長辰、白米で顔を洗つて見せ又瀧に落す。城の犬が水を呑みに下りて来て見顯はされ落城す

同 郡同村 大野田城 (同書卷二)

是は或は同じ土地の話かも知れぬ

同 郡神城村 飯田城址 (同書卷二)

城將大日向某、是も犬によつて發見されたといふ。大川といふ川が流れて居る

同 郡中土村 平倉山城址 (チ)

同 埴科郡東條村 尼巖山 (ホ)

山梨、

静岡、

富山、東礪波郡梅檀野村 増山古城址 (越中舊事記)

城主熊川宗範、越後の長尾勢に攻められて、白米にて馬を洗ふ。雁の多く集りさはぐによつて顯はれるといひ、又老尼が兵糧路を教へたるによつて落城すともいふ。五月十二日云々

石川、七尾市 古城址 (八)

同 鳳至郡宇出津町 城山 (九)

岐阜、山縣郡大桑村 大桑城址 (山縣郡誌)

天文中、齋藤秀龍に攻められる。晝は米倉の米を瀧の如く流し、夜は又その米を運び上げたといふ。今も其米がまだ落ちこぼれて居る

同 惠那郡中津町駒場 阿寺城址 (ル)

同 吉城郡國府町蓑輪 白米城 (ヲ)

同 同郡 小鷹利村信包 白米ヶ城 (ワ)

愛知、

福井、足羽郡麻生津村中荒井 冬野城址 (南越民俗二卷一號)

白米城傳説分布表

老翁秘密を洩す。後に祟あり。こゝでは白米は糶だつたといふ

同 坂井郡鷹巣村高須 鷹巣城址 (同誌二卷四號)

畑時能の城址といひ、なほ此傳説あり

同 南條郡南柚山村阿久和 柚山城址 (同誌二卷二號)

同 遠敷郡野木村武生 箱ヶ岳城址 (同誌二卷一號)

同 大飯郡佐分利村石山 胴慾河原 (同上)

秀吉水攻の折にといふ。色々の言ひ傳へを伴なふ

滋賀、滋賀郡阪本村 阪本城址 (四)

同 蒲生郡西大路村音羽 音羽城址 (ネ)

三重、一志郡阿阪村 白米城 (ソ)

同 飯南郡大河内村 大河内城 (ツ)

京都、中郡五箇村五箇 城址 (ナ)

大阪、泉南郡西葛城郡蕃原 白米塚 (口承文學十二)

根來勢が織田に攻められたときといふ

和歌山、那賀郡上岩出村 城ヶ峯 (同上)

楠勢の一部が立て籠つた時といふ

兵庫、城崎郡 山名氏城址 (土俗談語)

秀吉水攻。老女密告。其家には代々不具が生れる

鳥取、

岡山、御津郡大野村矢阪 富山城址 (旅と傳説三卷二號)

白米で馬の裾をさした話があつて、土中からは焼麥が出る

同 吉備郡高松町 清水氏城址 (一一)

香川、大川郡富田村 雨瀧山城址 (ノ)

同 香川郡上笠居村 勝賀山城址 (一二)

近畿周囲の例

徳島、――

島根、出雲 白髮城(ラ)

同 簸川郡薦巢村 薦巢城址(一〇)

廣島、――

愛媛、新居郡橋村檜ノ木 姥ヶ橋 (石槌山及道前の史蹟と傳説)

姥の密告によつて白米の計略顯はれ高峠の城は落城す。天正十三年、寄手は小早川隆景、城主は

金子備後守

同 喜多郡菅田村大竹 松野城址 (旅と傳説三卷七號)

矢野若狭守居城。長曾我部勢攻來るとき白米に灰をまじへ打水の態をなす。敵退陣の際打つて出て却つて破らる

同 同郡 大川村藏川 三重城址(オ)

同 北宇和郡三島村? 古城址 (南豫史?)

是も長曾我部攻のときといふ。落城に伴なふ色々の傳説を存す。城主芝一角

高知、幡多郡

鹽塚城址(キ)

山口、――

福岡、豊前黒崎? 麻生城址(一三)

同 田川郡香春町 香春岳城址(一四)

同 嘉穂郡大隈町 益富城址 (筑 傳説集)

天正十五年、是は籠城の秋月方の智謀で無く、寄手が城を乗取つて後に白米を散じて瀧の如く見せかけたとある

同 朝倉郡高木村 烏屋ヶ城址 (同 書)

安倍貞任居城、白米が盡きたので次に油を流す、それに火を付けられて城は落ちたといふ。密告の家は子孫崇を受く

大分、大分郡八幡村? 米山 (豊後傳説集)

姥が水を選んで居た話あり。或は山姥に水を汲ませて居たのが、一日に二日の水を選んで一日は

休むのを怒つて研り殺してから、水の手が切れたともいふ。高崎山籠城のときのこと、流した白米の落ちた所がこの米山になるともいふ

同 郡竹中村 天面山城址 (同 書)

落城のとき多くの米麥を谷に流すといふのみで、馬を洗つた話は無し。焼け残りの米を、今も拾つて腹の薬にする。

同 郡同村 鶴賀城址 (ム)

同 直入郡竹田町 岡城址 (豊後傳説集)

是も鶴賀城と同じに、鯛の分配に漏れた足輕の怨みによつて内通したといふ話を伴なふ

宮崎、

佐賀、神崎郡三瀧村 城山 (櫻田勝徳君)

城將クマシロカツトシ、龍造寺勢に攻められたときといふ

同 西松浦郡 岸嶽米ノ山 (ウ)

同 杵島郡朝日村 烏帽子岳 (一七)

同 藤津郡能古見村 有尾城址 (一五)

同 同郡 同村本城 城山 (一六)

長崎、

熊本、

鹿兒島、

沖繩、

右の二十五府縣七十八か九の類例の中でも氣のつくことは、第一には事件の起つたといふ時代が皆新らしく、大抵は足利末のいはゆる軍書時代に屬し、その以前の言ひ傳へといふものは三つ四つしか無いことである。第二には其大部分が敗北者の記録で、城は落ち守兵は戦死したといふものゝ多い事である。第三にはこの妙計も效を奏しなかつたといふ事情に、女子の干與したものが可なり多い。法師老翁の祕密を洩らしたといふものゝ他に、中部では犬、東北では雀その他の鳥

類も出て来るが、其中では犬が最も意外なだけに、特に何等かの暗示をもつやうに感じられる。もとより計數によつて原因を推斷することは出来ず、又はばかりの數ではまだ物の役にも立たぬが、別に解説の方法も無いとすれば、先づ斯ういふことを手掛りにするの他は無いのである。それで今後この言ひ傳へに出逢つた場合には、一應は必ず此點がどういふ風に保存せられて居るか、氣を付けて聴くことにしたいと思ふ。

(昭和十七年五月)

傳説と習俗

矢立杉の由來

傳説の起原は、全部が白米城の口碑の様に、面倒な解釋を要するものばかりでは無い。中には何年か氣を付けて居るうちに、自然に思ひ當るといふ類のものも随分ある。たゞ何れにしても稍多量の材料を集積してからで無いと、往々にして仲間の者しか承知せぬやうな獨斷に陥る危険があるのである。私はどうかして少しも辯證の方法を雇はずして、起原が獨りでに明らかになるといふ實例を見出さうとして居るのであるが、遺憾ながら未だ完

全に其注文に合するものに出逢はない。今度話をして見ようと思ふ矢立杉の傳説は、もう十何年も前に手を著けたもので、其頃一部分を公表して見たこともあつたが、詳しく聴かうといふ人が無いので、久しく亂雜の儘に打棄てゝあつた。しかし考へて見ると、是などは比較的發生の経路の明らかな、證據のやゝ豊富なる一例である。傳説が我々の歴史の、如何なる事實を表明するかを説いて、將來の蒐集者に若干の興味を抱かせるには、或は適切な題目であらうかと思ふ。仍て以前の白米城が幾分か理窟に過ぎたといふ評を受けた埋め合せに、爰には一つ、各地から集まつた材料ばかりを、出来るだけ話の様に排列して御目に掛けようと思ふ。斯うして居て唯自然に、讀者諸君に自分と同じ判断を下さしめ得たならば、それでこそフオクロアの目的は達したことになるのである。

一 鎌 筧 竹

最初に問題の要點を述べて置くが、日本には地上に箭を突刺して置いたら、それが芽を吹き根を下して、成長して竹となり樹となつたといふ傳説が諸處にある。それは明白に史實では無いのであるが、今までの人は、稀には其様な不思議も有り得ると思つて居た。ところが同じ傳説は必ずしも稀有で無く、「昔」と名づくる時代には可なり頻々と、其不思議が現はれて居たといふことが、比較によつて此頃わかつて來た。さうすると何が其傳説を發生せしめたかといふことが、一つの問題になるのである。

是ほど單純な傳説でも、永い年月の間には色々の事由が加はつて、徐々として誤解を尤もらしくして居る。我々の仕事はそれを手近のものから、段々に分析して行くことであるが、是にも傳説をして直接に自ら語らしむる方法があるのである。第一には箭が成長して繁茂したといふ竹がいつ迄も矢竹として用ゐられて居たことである。備後の鞆の津から二里ばかり西南、廣島縣沼隈郡田島村の屬島に、周圍六町餘の矢筧(ヤノ)島といふ小島がある。全島悉く篠竹で、其質が矢筧に適して居た。現在は村の人が之を採つて竹細工の材

料として居るが、前には箭竹に用ゐた故に、此島の名が出来たのである。昔平家の勇士能登守教經、輒の能登原といふ處から弓を射たら、其箭が此島に達して根を生じて此通り繁殖したと謂ひ、其能登原には又教經の弓掛の松がある（沼名前神社由來記附録）。

東京の近くでは神奈川縣都筑郡都岡村大字今宿（現在横濱市）の東の堺に、矢筈が淵といふ處がある。昔畠山重忠が二俣川で戦死した時に、此地に二本の箭を刺したのが、自然に根を生じたと謂つて、年々二本づつの矢竹が生えて居た。今は絶えてしまつて、それを以て箭を製したといふ話は残つて居ない（新編武蔵風土記稿）。しかし二本の竹の偶生するといふ點に、奇瑞を感じたことは次の話と似て居る。美濃では養老の瀧の邊に神社があつて、其社の後に黄金竹と稱して、年々二本づつ生えて一年限りで枯れる竹があつた。神社以外の地へは根を分けても生育せぬと謂つて居た（津村正恭譚海二）。同國土岐郡の土岐の神筈（カウノ）神社でも、根を一にし節を並べて双生する竹があつて、一鎌を以て一對づつ伐ることが出来た故に、其名を一鎌竹（ヒトカマダケ）と呼んで居た。是も昔土岐氏の元祖

なる源三位頼政が、此竹に三十六斑の山鳥の尾羽を翹いで、禁中の恠鳥を射落したといふ傳説があり、猪早太の子孫と稱する猪野家の一門が、此社の氏子であつたといふから、單に箭竹に伐つたゞけでは無く、其箭は恐らく神祭の式に用ゐられたのである（稿本美濃誌、岐蘇古今沿革志）。

頼政は射藝の大家であつたといふ所から、土岐以外の地に於ても屢々弓矢の傳説の引合ひに出される。愛媛縣の上浮穴郡などでは、あんまり話が珍奇であつた爲か、源三位とは謂はずに時の頼政といふ勇士と傳へて居るが、それでも土岐氏の一族の先祖であり、又鶴を退治して功名を立てた人だと言つて居る。久萬山中の麻生ヶ池の大蛇は、其頼政の實母であつた。我子に立身をさせたい爲に、化けて鶴となつて京都に飛び、あの大騒動を引起した。さうして豫め打合せをして置いて、息子頼政の弓に射られたのである。その時の箭を伐つたといふ處が、同じ久萬山の二つ野といふ地に在つて、毎年必ず二本づつ揃うた矢竹を生ずることになつて居た。それを採取して永く松山の殿様に献上するを吉例として居

たさうである（松山雜記）。篠竹はこの山野にもあるが、何か普通と異なるもので無いと、斯ういふ口碑は發生しなかつた。松でも杉でも同齡のものが二本、竝んで成木して居るのを偶然で無いと考へたやうに、所謂一鎌篔竹が殊にめでたく、従つて又靈あるものと認められたこと、是が此傳説の一つの原因になつて居る。さうすると次には何の用に、何の目的の爲に、いつ迄もそれを大切に居たか、問題になるのである。

悪鬼退治

信州では戸隠山麓の西谷といふ處に、鎌八幡の社があつて、其周圍の森は悉く箭篔竹であつた。余五將軍維茂が鬼女を射たる矢二本、土に立つて根を生じたと言ひ傳へ、竹の產地ではあるが此竹だけは、領主より猥りに切ることを禁じられて居た（信濃奇勝錄二）。

肥前松浦の大野嶽の頂上には、龍が池といふ古池があつて、昔鎮西八郎爲朝に退治せら

れたといふ黒髮山の蛇が、折々此池にも通うて住んで居た。當時爲朝は先づ此嶽に登つて、池の畔から驗（シルシ）の矢といふのを射た。其箭が三十何町を飛んで、ちやうど龍が池の鬼門にあたる古野村の後谷といふ地に落ち、其まゝ竹林となつて永く榮えて居る（松浦昔鑑）。昔に比べて廣くもならず、又絶えもしなかつたといふから、其竹の産地は限られて居たのである。

箭として用ゐられたものは獨り竹のみには限らなかつた。越後の彌彦山の御神は、和銅三年の八月に、始めて此四米水（ヨナウツ）浦に上陸なされたと傳へられて居るが、其折御突きなされた椎の木の杖が、永く神木となつて社殿の前に茂つて居た。國家事あらんとすれば則ちこの杖の樹が異を示した。神に祈請して其枝葉を取つて箭を作り、之を以て賊に向へば、指す所誅に伏せざる無しと謂つて居た（羅山文集伊夜比古神廟記）。

是は尊い信仰であるが、千年の後まで其昔の奇瑞を銘記するには、單なる故老の口碑以上、別に具體的なる方式があつたらしいのである。例へば陸前遠田郡の篔嶽（ノノダケ）

には、矢竹を祀つたといふ筈宮（ノノミヤ）権現がある。昔阪上田村麻呂、巨賊高丸を此山に追ひつめ、終に之を射殺して首級を京に送り、胴を丘上に埋めて残りの箭一筋を土に刺し、もし幸ひにして東夷再び起らずとならば、此箭七日夜の中に生きて枝葉を生ずべしと誓ひ言を立て、爰に凱陣の式を擧げた。さうすると果して其誓ひの通りに、兵亂永く熄み、矢竹も亦繁茂したといふ。それ故に今でも正月の二十五日には、この神聖なる竹を伐つて箭を作り、二人の少年をして歩射を試みしむる祭典があるのである（日本宗教風俗志）。

毎年春の始に步射（ブシヤ）奉射又は備射など、稱して、弓を射ることを嘉例とする神社は、算へきれぬ程諸國にある。其際に用ゐられる箭の材料は多くは定まつた様式を以て、定まつた土地から採取せられて居たらしいから、もしどうしてさうするか理由を尋ねて見たならば、大抵は又一つの傳説が聴き出される筈である。この弓神事の的には、鬼といふ文字を書くものが少なくない。しかしそれに由つて此行事の目的が、單に故事を解説す

るだけの演技であつたとも言ふことが出来ぬのは、鬼がやゝ形を變へて、いつでも此人生に紛れ込んで居るからである。例へば後世の疫病神、ウンカの神又は早魃といふ鬼に對しても、是が充分なる警告であり又畏嚇であることを信じたればこそ、斯うして今も古式通りの弓の術を示して居たのである。それと他の一方の、年の豊凶を卜するといふ目的とも、やはり亦深い關係があつた。日本の占ひは保護神の啓示であるから、支那人の卜筮のやうに冷淡無私ではなく、出来るだけ人民に都合のよい前兆を示さうとした。従つて氏子は永く昔の奇瑞を記憶したのみならず、今も安心して毎年の祭の日に、同じ試みの箭を放つことが出来たのである。傳説と習俗とは、言はゞ一つの信仰から生れた兄弟であつた。だから生き残つた一方が、衰へた他の一方の心持を説明してくれる道理である。習俗は既に改まり盡し、僅かな傳説だけが保存せられて居るやうな外國でも、之に基づいて前代の精神生活を尋ね出さうとして居る。ましてや我邦などは是から私が列擧して見ようとする如く、傳説と習俗と二つのものが肩を組んで、併行して傳はつて居たのである。それを別々の現

象として取扱ふことは、先づ資料を粗末にする責を免れぬのである。

遠矢の高名

うっかり理窟に走らうとして居たが、今度は又事實だけを述べることにする。鎮西八郎が大野嶽の上から射た驗の箭が、三十町を飛んで古野の村に落ち、能登守教經は鞆の津の弓掛松の處から、海上二里を隔てた矢筈島に射通したといふ類の話は他にも澤山あるが、大抵はあの人の弓勢ならばさもあるべしと思はせるやうな、偉人ばかりの逸話になつて居る。尾張海士郡の下田といふ部落には、源義經爰に在つて弓を射たと傳ふる、又一本の弓掛松があつた。其箭の墮ちたといふ處が百町村の矢落(ヤオチ)の社で、それだから百町と名づけられたかの如く、土地の人たちは思つて居た(張州府志)。

埼玉縣入間郡加治村大宇川寺では、矢田川の上流に矢の根辨天の社がある。昔平將門が

岩淵山の頂上から射放した箭、前ヶ貫(マヘガヌキ)矢下風(ヤオロシ)の二村を過ぎて、爰まで飛んで来て落ちた故に、此祠を建てたと傳へ、矢ノ目といふ地名も残つて居り、前ヶ貫の方でも、征矢神社といふ鎮守の社がある(入間郡誌)。

磐城刈田郡圓田村大宇矢付でも、昔源義家奥州入りの時に、同郡小原村の清水峠から射た箭が、落ちて地に付いたから矢付といふと稱し、そこには鉾付神社があつてその八幡太郎を祀ると謂つて居るが、恐らくは八幡大神であらう(刈田郡案内)。村の名の矢付も或はもと箭槻であつたかも知れない。神木に槻の木を栽ゑることは、昔から東北地方の風であつた。吾妻鏡には將軍頼朝奥州陣ヶ岡に滞在の時、高水寺の鎮守走湯權現に參詣し、神に奉ると稱して社の傍の大槻の木に上箭の鏑を射立てたといふ事が見えて居るが、其故跡と傳ふる陸中古館村の走湯神社には、今でも箭立の槻といふのが有つて、其神木の相續者だと謂つて居る。是も土地では八幡太郎義家が、戰の吉凶を卜せんとして弓を射ると、其箭あやまたず此木に命中したとも謂ふ者があつたが、兎に角に今から二百年前に枯れた前の木

の根方には、その昔の矢の根がちゃんと見えて居たさうである（紫波郡誌）。

福島縣東白川郡の近津宮、即ち今日の國幣社都々古別（ツツコワケ）神社にも、神木征矢の槻（樺）があつて、村の名は八槻であつた。大昔日本武尊、槻の木を以て征矢を作り、射て八人の土蜘蛛を噓したまふ。其箭地に立つて悉く芽を生じ、見事なる巨木となつた。但し今ある神木の槻は栽繼ぎである（大日本老樹名木誌）。

旅行者にはまだ幾分でもこの心持が解るかも知れないが、斯ういふ地名の傳説が、土地に育つた人々に與へる感興は、到底書いた物だけでは之を想像することが出来ない。小さな頃から知り過ぎる程よく知つて居る山川、其間に散らばつて居るやゝ珍らしい幾つかの地名、それを一つの奇抜なる空想を以て繋ぎ合せ、歌なり物語りなりに纏めて見るといふことは、假に虚構であつても面白い聴き物であつた。況んや是は昔から誰いふと無く、殊に尊とい弓矢の業に伴なうて、保存せられて居る口碑である。聴けば忘れること無く又何度でも思ひ出して、次々語り弘めて永く又數多く、残つて居るのも不思議では無いのであ

る。上代の記録を讀んで見ても、斯ういふ地名の連鎖譚が、村々の過去を融和させて居た効果は察せられる。我々の言葉と共同の興味とは、恐らく此筋を進んで行つて、日本民族の歴史を次第に矛盾の無いものにしてくれたのである。

近代の傳説に於ても、やはり地名の因縁に基づいて、一つの言ひ傳への領域が大きくなつて行かうとする傾向が見える。例へば上總の舊埴生郡では、昔頼朝卿が矢口といふ處から射た箭が、矢田の地を経て金矢といふ部落に落ちたと謂つて、其間は四五町も離れて居た。さうして矢口には其故跡と稱して、島の中に圓く矢竹の茂つて居る場所があつた（埴生郡見聞漫録）。或は又九十九里の濱の方に行くと、同じ將軍が此地方を測量する爲に、六町一里に一本づつの矢を刺してあるいたといふ話があり、夷隅郡の矢指戸といふ處は、その百本目の指し止まりである故に、この地名が出来たと傳へて居る（房總志料續編）。山武郡蓮沼村の矢指大明神は、一説には百本の矢の指し始めといひ、他の一説では其中央であつたと謂ふ、他に或は日本武尊の射たまふ矢、下矢に六町づゝ九十九矢射通したまふとも傳へ

たのは、多分此序を以て武射といふ郡名をも解説しようとしたのであらうが、兎に角に其處には亦記念の御社があり、なほ松と杉と各一株の御神木が栽ゑられてあつた。

矢は境の標

矢指といふ地名は下總にも、又常陸にもあつて右の傳説よりは古いやうである。神奈川縣でも都筑郡の、石川と下川井の二箇處に矢指があり、足柄上郡の岡本村にも、幾つかの矢佐芝といふ字があつて、谷佐芝川といふ小川も流れて居る。如何にして關東の各地に此地名が発生したか。それを考へて見ることが、同時に又傳説の成立を探る結果にもなるかと思ふ。上總の土氣本郷町の大字の一つに、小食土と書いてヤサンドと呼んで居るなども、私には頗る興味ある一例である。小食は晝餉即ち野外の食事のことで、この矢指處がもと小食をする場處であつた爲に、此文字を宛てたのでは無からうか。傳説の頼朝が此地

方を巡遊して、屢々辨當を遣ひ其箸を地に刺し、それが又後に成長して蘆原となり薄の叢となつて居るとは、「日本の傳説」の中に既に述べて置いた。肥前松浦領の境では、其箸が大きな樟樹にさへなつて居るのである。相模の山村の矢佐芝といふ地名も、其故跡が永く靈地として遺つて居ることを意味し、つまりは境に矢を刺した習俗の一つの名残では無からうか。それを實地に就て確かめて見る前に、少しく別の方面から、此推測の必ずしも空なもので無いことを説明して置かうと思ふ。

安房の入不斗（イリヨマズ岩井村）の竹林山滿能院は、もと熊野神社の別當寺であつた。此寺の庭には頼朝公の旗竿竹と稱して、節も揃ひ太さも同じ程の二本の竹が、毎年必ず偶生する竹藪があつて、此竹の多く生える年は豊作だと言ひ傳へられて居た。治承四年の八月二十九日、頼朝此社に參籠の折柄、寺の僧が庭前の竹二本を伐つて、それを目出たい旗揚げの旗の竿に献上したところ、頼朝大いに悦んで褒賞は望みに任せるといふことになつた。仍て院主は弓を射て、其矢の届く限りを以て寺領とせんと乞うて許された。斯ういふ

傳説が縁起となつて残つて居る(安房志)。是も察する所最初は此寺の所領が、到底普通の箭の届かぬ境まで及んで居たのを、所謂二股竹の奇瑞に托したものであつたらうが、後には一方を箠竿など、謂ふやうになつて、法師の射藝といふことが無意味な話になつてしまつたのである。

是とよく似た話は三河國碧海郡、野寺の本證寺の舊記にもあつた。昔小山判官の弟親祐といふ弓矢の名人、或時主君の命として、汝能く遠矢を射る。今宜しく力を盡して射試むべし。其矢の届く限りを領地として與へられんとのことで、乃ち遠矢を射て數十町の地を賜はつた。後に仔細あつて家を寺となし、僧となつて教圓と稱すともいへば(和漢三才圖會)、一説には小栗判官行重の子息、慶圓法師なる者が、弓を射て寺領を得たとも謂つて居る(二十四輩巡拜圖會)。是も恐らくはもと此寺内に竹林があつて、嘗ては其竹を切つて矢を製したと言ひ傳へて居たものであらう。

武藏箕田村満願寺の阿彌陀堂は、六孫王經基武藏守として當地に住する時、此堂を建立

せんと謂ふとの口碑がある。(新編武藏風土記稿五〇)。村は仲仙道の吹上・鴻の巢の間に近いので、古くから往來の旅人に知られて居たが、堂の傍には少しの竹藪があつて、其竹は箭竹の如しと謂ひ、或は縦横に畫(スヂ?)あり、密にして東箭の如しとも記してある。寶曆九年に建てた石碑の文に依れば、經基の矢が爰に落ちて成長したといふ傳説があつたものか、この竹叢を名づけて射貫と爲すとあつた(大田蜀山壬戌紀行)。仲仙道には今一つ、上州妙義山の射貫岩も有名であつた。昔百合若大臣が松井田の里はづれから弓を射たと傳へて、其時踏張つた足跡石も路傍に在り、そこから眞正面の山の上の巖石には、彼が射通したと謂ふまん丸な穴があいて居る。其矢の行くへはもう不明であるけれども、是も亦遠矢の驚くべき一つの例であつた。

出雲の廣瀬町の富田八幡宮といふのは、昔平家の勇士悪七兵衛景清が遣つて来て、御社を今在る處に遷したといふ傳説がある。さうして景清が築いた城の跡といふのが、今でも高い山の上に残つて居るのである。八幡の御宮は元はそこに在つた。これへ城廓を構へた

い爲に、神に禱つて社壇を遷したまふべきや否やを圖に取ると、果して遷座あるべしとの圖を得た。乃ち大いに悦んで白羽の矢を弓につがひ、闇夜に虚空に向つて之を射放したところ、其矢が落ちて来て今の社の地に立つた。是を神意なりとしてそこに社を興し、其白羽の矢を永く神寶の第一として持傳へて居た（懷橋談）。社の神職の家を竹矢氏と謂ふ。元は田邊であつたのが、此奇瑞に因つて今の姓に改めたと謂つて居る（明治神社誌料）。

白羽の矢が常に神意を代表して居たことは、古くから之を信じた人が多かつた。讃州木田郡牟禮の白羽神社は、もと白羽八幡宮とも稱へて居た。文明年中に土地の領主中村加賀守氏宗、夢に一つの白羽の矢が東の方より飛び來つて、城の北なる林の中に落ちたと見て是を神明の靈區を示したまふものと信じて、覺めて後往いて之を求めたところが、果して阿彌陀寺の後の山中に於て、夢に見た通りの箭を見付けた。一同感歎してそこに御社を建てたのが、今日の白羽神社であるといふことである（讃州府志）。

鳥取縣でも八頭郡屋堂羅村の式内意非（オヒ）神社、俗に老の宮といふ御社は、御神體

が白羽の矢であつた。大昔武内宿禰が此國へ遣つて來た時には、まだ御宮は長砂村の一宮谷といふ處に在つた。武内は其處から矢を射放して、此矢の落ちた處へ神殿を建てようと言つた。さうして新たに造營せられたものが此社である故に、今も矢落谷といふ地名が残つて居る。屋堂羅といふ珍しい村の名も、多分「矢通り」の變化だらうといふことである（因幡志神社考）。

武内宿禰は確かでも、山に登つて占ひの箭を放し、その落ちた處を以つて靈地の區劃とすることは、實際有り得べき前代の信仰行事であつた。ところが其距離だけは何處までも傳説で、親しく其地を視た人ならば、必ず喫驚するやうな遠方まで、神の箭が飛んで來て立つたことになつて居るのである。それで無ければ又語り傳へるにも足りなかつた。傳説はつまり平凡ならざる事蹟の要求であつたが、我々の空想には寧ろ制限があつて、幾ら奇抜なことを考へ出しても、第一に信じて之を語り傳へる人が無ければ何にもならなかつた。それでおのづから全國共通に、同じ一つの出發點から、同じ軌道の上を走らうと

する傳説が、斯くの如く多くなつたわけである。

傳説の二系統

或は又理窟に落ちる嫌ひはあるが、私は今後傳説の蒐集が進んで、細かな發生學風の系統分類が行はれるやうになれば、必然問題は前に述べた白米城の口碑の如きやゝ込入つた構造のあるものと、矢立杉の如き簡明なるものが、何故に各個の地名の傳説として、同じ方法を以て保存せられて居たかといふ點に、向つて來る事と思つて居る。傳説は通例先づその不思議なる一致に注意せられるが、次には是が根本的の差別に、不審を抱く事になるのが順序である。是は我々が最初如何なる機會に於て、斯ういふ平凡ならざる事蹟を信じ始めるに至つたかを、考へて見ることが出來れば何でも無い仕事であるが、兎角是までの學者は其傳説の文書に現はれた時代より、後の事ばかりを論じて居たのである。フオク

ロフといふ學問が起つて、茲に漸くこの映画のフィルム、草木でいふならば地下に隠れて居る鬚根と牛蒡根とを、調べて見ようといふことになつたのである。正しいか正しくなかつたかは別の問題として、兎に角我々の信じて人に語り得た體驗は、耳から入らなければ眼から入つて居る。此以外にも肌膚其他の感覺を経たものが有り得るが、それだけが獨立して働いた場合は、實際は至つて少ないのである。それで我々は發生の起源に溯つて、耳の傳説、眼の傳説と分類して見ることが出來るのである。現代は人が饒舌となり、又饒舌が必要になつて居る。従つてあらゆる傳説は口を以て引繼ぐのであるが、最初第一次に之を感得した人々に取つては、幾つかの神祕は言辭を超越し、文句の解説を無用として居ることは、傳説發生の最も大いなる機會、即ち昔の世の祭の式を想像して見ればよく分る。今でも信心深い村では其光景に接することが出來るが、祭の式場には絶対に雜談が無い。大切なる言葉と、沈黙の觀望とがあるばかりである。従うて我々の信すべきものが、當然に二つに分類せられたのである。そこで私たちは是を耳と眼といふよりも、寧ろ神語記錄

と神態記録との、二系統に分けて見る方が、一層適切であらうと思つて居るのであるが、其様な用語を成立させる爲にも、やはり實例に就て今少し詳しく述べる必要がある。

近頃の傳説は多くは混成であつて、何れももと有つた形の儘といふことは出来ないが、それでも大體に於てまだ若干の特徴だけは持つて居る。神語は大昔の「空中に聲あり」といふやうな強烈なる信仰が、追々に靈媒の口を籍りなければ、神の御告げを受けることの出来ぬ迄に衰へても、それを大切に保存しようとする努力には變りがなかつた。といふよりも疑ふ念が少しでも現はれようとすれば、却つて解説は一段と丁寧になり、傳承も亦一段と忠實になつて来る。耳から入つて來た傳説は全體に面白く、又形がよく整うて説話といふものに近い。之に比べると眼の實驗に始まつたものは、其感じを他に傳へる事が最初から容易で無かつた。ましてや年を隔て信仰が稍弱れば、何人も進んで註釋の任に當らうとする者が無く、寧ろ古傳の尊嚴を保つ爲に、出来るだけ叙述を簡約にする必要をさへ認めためたのである。義經腰掛石といふ類の、名稱ばかり残つて居るものなどは、其省略の最小

限度に達した例であつて、儀式や記念物の消滅と共に、誤られ忘れられる場合も此方に多かつた筈であるが、しかも現在はまだ數量に於て、遙かに語りごと式の傳説を凌駕して居る。さうして又其宗教上の根據はどうであつたかといふと、是も通例は他の一方のものよりも、尙一段と強固であつたらしいのである。自分たちが傳説の研究を所謂説話學の外に置き、別に習俗の側から比較を進めて見なければならぬと、思つて居る理由は爰に在るのである。

話は少し遠まはしになるが、先年福島縣の南を旅行した時に聞いたのは、あの邊の村には何十年目に一人ぐらゐ、突如として驚くべき行者の出現する事がある。今まで普通の農民であつた者が、忽ち奇恠な事を口走り、祈禱を始め豫言をし始める。それが皆當るのださうである。其靈力を發表する方法は略きまつて居た。いつでも先づ屋根の上に飛昇り、屋の棟に跨がつてグシをつかんで引動かすと、家全體が上下にがた／＼と跳つた。それを近隣の者が一同に出て見て、始めて此男に靈の憑つたことを知るのださうである。現に此